
le freak

やましたよしのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

le freak

【Nコード】

N6636C

【作者名】

やましたよしのぶ

【あらすじ】

魔女と野球とIPODと5歳児と音楽と私が出てくるお話

001 -

001

泣いているのは誰だ？

泣いているのは僕だ。

どうして泣いているのだろうか？

こないだお茶をこぼしてしまったのは君のせいかもしれない。

あと一步のところだったのに、

君の気分を良くするにはどうしたらいいかな？
僕の気分を良くするにはどうしたらいいかな？

いままでそれに気づかずに、

私は長い間、君に振り回されていた。

002

私は小さい頃無口な少年だった。

両親も無口だったからしょうがないかもしれない。

けど、無口は損だ。

僕はピアノを習っていた。

僕は案外良い成績を取っていた。

そしていつもなにかに追い立てられていた。

ある日、追いつこうとする努力をやめた。

これは僕の少年時代の話だ

いまでも、時々夢を見る。象徴的に。

003

ちいさい悲しげな子猫を見るのはせつない。しかし、

ちいさく、愛らしく、素直に愛情を求める子猫と遊ぶ。

これも結構せつない。どうしてだろう？

なににせよ、癒される。

004

小さな嘘。

誰も、最初はそんなつもりじゃなくって、ものすごく単純に、軽い気持ちだったんだけど、

それは、私につまらない単純労働を何年も義務付け、どこにもいけない恋愛を何度も繰り返させた。

せっかく整備した広大な農園を自ら破壊していく、

それはそのうちに巨大な爆弾を自ら製作する為に、私に膨大な量の科学入門書やら、なにやら押し付ける。

だけど、それでゼロになるわけではない

より強固な軍隊が生まれるだけだ。ゴールの前で11人が攻めもせずに、ひたすらじっと耐え抜くサッカーチームみたいだ。もちろんそんなチームをだれも応援したりはしない。

そしてある日、その小さな嘘がどんな話だったかも忘れてしまう。

005

自分を信じなさい。

私はこの言葉を呪文のごとく唱える。

006

どこかに魔女が住んでいる。

現代の魔女は、普通の人となにもかわらない生活をしている。

自分が魔女であることをだれにも言ったりしない。面倒なのだ。

秘密を告白するには十分な注意が必要だ。

一人の魔女はちょっとしたお金持ちと結婚し

双子の娘と4人で仲良く暮らしている。ねこもいる。
娘達も魔女なので、なかなか子育てに苦労している。

旦那はやさしい人だ。そして魔女になってみたいと思っただが
そんなに簡単ではない。別に強く望んでいない。

一人の魔女はあるロックバンドのボーカリストとして
生計を立てている。何人かのファンは、、彼女は
魔女ではないか？と騒いでいる。確かに彼女にはそんな雰囲気がある。

まあ、そりゃそうなんだけど、、

まだ独身だ。なにか近寄り難い雰囲気もある。

自分だけが持つ、ある特殊ななにかを、わかりやすい
目に見える形で持っている人がある。

ものすごくいりくんでいて理解しにくい、
特殊ななにかをつかめそうでつかめない人もいる。
ものすごくいろいろな感情が複雑に絡んでいる。

特殊な自己の存在にまったく気づかない人もいる。
特殊な誰かを批判する人もいる。

なにはともあれ。

秘密を告白するのはとても勇気がいることだ。
みんな一緒だ。

007

魔女が、その魔女的ななにかに悩まされる以外に
生きていくのはかなり簡単だ。

その特殊性を現在、市民権をきちんと得ている特殊性
に変換すればいいだけの話だ。人はそれを才能と呼ぶ。

もう一人の魔女はその道ではかなり有名なヒプノセラピスト
として生計をたてている。彼女に会いに多くの人が
訪れ、かなり忙しい生活を余儀なくされているが、
もちろん、弟子になにひとつ教えられない。

「職業間違ったんじゃないの？」と他の魔女から

よくからかわれるけど、彼女なりに満足しているみたいだ。

008

昔、なにしてもいらいまして、親切な友人が懸命にそのいらいを解きほぐそうと努力したけど、結局なにをしても無駄だったということがあった。

いったい何が原因でそうなったのかわからないけど、私はそれを見えるものすべてにぶつけた。

なにもかもがとても歪んでいて、くだらない俗物で本来あるべき（と自分が思っている）誠実さが理不尽ななにかに容赦なく破壊され、私の同意もなく

私は巻き込まれていると思っていた。どこにもいけない。

外にぶつけても無駄だと悟った頃、私は街を転々とした。

いろいろな出会いがあった。今、その人たちに

とても感謝している。嫌なこともあったけど、良い思い出だ。

今、どこでなにをしているのかさっぱりわからないけど

元気でいて欲しい、何人かは、それでちゃんと生きていけるのか心配になるような人ばかりだけど、、

009

私は仕事はちゃんとやる人だ。遅刻もしないし、与えられた仕事はいつも上司の期待以上にこなしていた。だけどそれだけだ。

頭の中ではいつも違うことを考えていた。私なりのベストな仕事をイメージしていた。若い頃、私はたくさんの

提案を上司にぶつけてみたが、ことごとく却下された過去の経験がそうさせてるのだと思う。

イメージ通りに会社が動くこともあった。

しかし、なにはともあれ、私はある時期がくると会社を去り、その街を去った。同じ事を繰り返すとわかっていても何度かそのサイクルを繰り返した。

010

一人の元同僚は青森県出身の男だった。

いつもおどおどしていて、お金にだらしがなく

上司に余計な仕事を文句もいえずに押し付けられ

私にささやかな愚痴をこぼしながら仕事をしていた。

いつもわずかなお金に苦悩し、ひきつった笑顔で

私にお金を借りに来た。たった500円だ。

「今日は自分も持ってないんだよ、銀行にいかなきゃ、」

ある日、私は明らかな嘘でその悲願を断った。

彼はひきつった笑顔のままその場を去った。

彼は他の人に借りた500円を返せず、

その人が腹をたてて、しつこく請求してきたのだ。

次の日に彼は無言で会社を去った。

何人かの同僚達は貸したお金を返さずに消えた彼に対して怒っていた。

どれもわずかな金額だった。でも、なんだかお金を返さない彼に対

して

怒っているというより、なにか違う事に対して怒っている
みたいだった。彼はなにかのキーワードとして存在していた。

何日か過ぎるとそれが笑い話となり、そしてみんな

忘れていった。噂によると今、彼は名古屋屋にいるらしいが

おそらくまた同じ苦悩を抱えてなんとかやっているんだと思う。
なんというか救いようなところが多くあるけど

基本的には親切な男だった。元気でいて欲しい。

そういう私もなかなかお金に関しては、人の事とやかく

言える資格なんてない。まったく、話すのも嫌になるくらい
私もなかなかの貧乏人だった。一冊の本をかけそうな位だ。

誰もそんな本は読みたくないかなと思う。開くのも嫌だと思う。

011

011

A工場とB工場がある。両方ともZ社の製品を生産するライセンスを持っている。両社はライバルみたいな間柄だ。

ある日、C社という工場ライセンスシステムを開発している会社の営業がA社を訪れる。なんでも現状の1.5倍の作業効率を達成できるという新しいシステムを売り込みにきたのだ。

A社は喜んでそれを買ひ、それはたしかに効率を上げ、一時的に業績を伸ばした。関連会社からの信頼を獲得した。

コンピューターに打ち込まれたプログラムが職人的な作業をすべて請け負った。何人かの少々頑固で職人肌なオペレーターは嫌な顔をしたが、多くの人は楽になったと喜んだ。ボーナスはいつもより多くなっていた。

その成功例をきっかけに、C社はB社にも当然売り込む。このところ苦戦していたし、多くの残業を余儀なくされ、社員から不満の声が上がっていた。ライバル会社の真似をするのは気が進まないが、そんなことは言っていられない。時代はどんどん変わるのだ。

C社はさらに開発を進めて、より洗練されたシステムをB社に売った。業績は目に見えて上がった。

A社は復活したB社に怯えた。社員の給料を上げてしまったし、今また、業績を落とすことは出来ない。

A社はラインの簡略化を図り、一人一人の作業効率を管理し、さらに注文に即対応する為にラインの24時間化を計画し、交代勤務制を有無言わず実行した。

B社は頑固な職人肌オペレーターを少しずつ解雇した。難しいことはコンピューターがやってくれる。あとは安い人件費で雇えるものを派遣すればよい。文句をいわずにやってくれる人が一番だ。作業自体は単純でだれでも1週間教えれば出来る。

C社は新しいシステムを開発するたびにそれをうまく両社に売り込んだ。

さらに両社に強力なライバルが現れた。中国にあるG社だ。日本では絶対不可能な安い人件費を誇る会社だ。とても太刀打ち出来ない。

そうして、両社の従業員は多くの残業を余儀なくされ、土曜日も出勤し、睡眠時間は不定期で、近頃はボーナスも減り、不規則な労働によるミスも多発し、いついなくなるかわからない期間雇用社員を抱え、文句を言えばさらに給料の安い関連下請け会社になんか。

飛ばされ、多くの従業員が怯えることとなる。要するにこれは競争なのだ。

ずっとこの単純作業を繰り返した40代以上の作業員にあんまり良い転職先など無い。

現状になんとかごまかしながらしがみ付くほか無い。彼らはまだ幼き子供をしつかり養育しなくてはならない。壮大なマジックでも起こらないかぎりそこから抜け出せない。せいぜい宝くじが当たるのを夢見る位しかない。そこで生き抜いていくタフな

肉体をなんとか維持するするしかない。でも彼らは想像以上にタフで基本的な人に親切な人だ。これ以上タフな労働を求めるならば、工場主は本格的な作業用ロボットが現れるのを待つほか無い。

そうして夜は明け、朝が来て、夕方が来て、夜になっても人々は働く。

深夜のコンビニエンスストアが賑わう。カラスが生ゴミをあさっている。

時々、猫と残飯の奪い合いをしている。いかれた車の窓からゴミが投げられる。複雑な社会だ。

012

この文章は誰の為にもしならない話した。小説ではない。日記でも無い。ただの文だ。

ただ、この文は私が書きたくって書いた文だ。誰にも見せない。おそらくきっと。たぶん。

もう一度言う。これはただの文だ。

小説と呼びたいなら、そうしてもいい。

でも私は認めない。私に許可をもらいに来ないで戴きたい。

013

私が作曲をはじめたのは15歳の頃だ。高校の時、今思えば貴重な夏休みを時給550円のアルバイトで過ごし、夏中、たいして美味くも無い料理を出すレストランで稼いだお金を音楽機材につぎ込んだ。当時それは何十万もするものだった。

20年経った今、それは一台のパソコンにしつかりと見事に収まった。値段もかなり安い。時代は変わる。

そういうわけで、今はパソコンだけで作曲している。アルバイトは結構楽しんでやっていた。学校よりかはなにかしら学ぶところがある。ただ、夏休みは遊ぶべきだとふと思うこともある。

014

独学で作曲を始めた。

はじめは最初の音をドにするかファにするかで1週間ぐらい悩んだ。あほみたいだけど、当時は真剣に考えてた。

その後に私はコードをひたすら覚えた。

どうして私が作曲し、編曲出来るようになったのかははっきりと思いつけない。時々どうして自分は曲が作れるのだろう？と思うことがある。私の記憶は肝心なところが消えている。

彼女の話によると、私の前世は日本人で1941年に空軍に属していて、広い太平洋のどこかに沈んだそうだなにかしらの操縦ミスにより自爆したらしい。

「ちょっと間抜けなところもあったけど、良い人だった」

と彼女は言った。

「自分の飛行機嫌いはそこからきてるのかな？」

彼女は首を振って言った。

「違う、彼は自ら志願してパイロットになったしただ、空に浮かんでる分には純粹に楽しんだ。」

「ただ、あなたが想像しているよりももっと複雑な感情を心にしまったまま海に落ちたの」

「飛行機はただの飛行機なのよ」

？

「もしかして自分はその複雑な感情を引き継いでるのかな？」

彼女は私を見つめる。

「もしかしてね、今はなんとも言えない 私にもわからない」

「あなたはこの世の中の重大な人物のひとりなのよ」

「重要？」

彼女はそれ以上にも言わなかった。秘密だ。

016

前世なんて信じたくないけど、彼女の言うことを疑える理由がない。彼女は多くの人間が信じられないようなことをこなげもなくやる。完全にトリックもなんもないマジックを目にしたし、

なんというか信じる以外に方法がない。そうしないことには

この結婚生活はうまくいかない。もちろん夫婦の間には

マジック抜きで、いろいろと障害が起こることもあるだろうけど、

今のところ仲良くやっている。それになかなか魔女を奥さんに

するという事は人には言えないけど、良い。なってみないとわからない。

でも、前世があるとなると来世も認めなくてはいけない。

まだ彼女の口から天国だとか地獄だとかの言葉がない分救われるけど、

また死んでからどこかの国で人生いちから始めるのかと思うと

ちよっとうんざりする。例えば飢餓がある国とかにまた生まれたら

やだなーと思う。考えてもしようがないことだけだ。

今、そんな心配をしても意味の無いことだけど、

私はちよっと心配しすぎるところがある。無限ループだ。

017

双子の娘がいる。現在5歳でマコとミコという名前だ。私が名づけた。

奥さんは36歳でミカという名前だ。彼女の母が名づけた。黒猫がいる。マミという名前だ。彼女が名づけた。

これが私の家族だ。

私以外は全員女性で魔法使いだ。そんなのってない。

猫でさえ魔法使いなのに、

というわけで私は日々少しずつ、ささやかな修行をすることになる。正直なところそんなに熱心でもない。3人と一匹の魔法使いがいればそれでもう十分だ。必要なし。

018

魔女にも苦手なものはある。彼女は納豆が嫌いだし、娘たちはピーマンが嫌いだ。私も納豆は嫌いだから我が家の食卓に納豆は出てこないけど、ピーマンとなるとちょっとした騒ぎとなる。でもなんだか

そういう時、私のような人間はなんだかほのぼのとした気分になる。

むすめたちはかわいい。単純に。

019

遠い遠い未来の話 001

科学は完全なDNA解析を終え、生態学、哲学、宗教学を洗練させる。

ある程度の自然現象を科学の力でコントロールできるようになる。反重力、クリーンなフリーエネルギー、昔のような貨幣経済は終了しており、

人々には無条件で土地が与えられる。昔あった国という単位はこの未来に当てはめるとすると家族になる。農業技術の発展が家族単位での自立を可能にしたのだ。衣食住という人間の必須事項は無条件で与えられる。それ以上の事をするのはあなたのアイディア次第だ。そういうことは昔とまったく変わらない。

いまだに野球の試合も行われている。相変わらず横浜は雨ばかりだ。いつになったら閉開式の屋根を付けた球場をつくるんだろう？

人類は生きることが可能な星を見つける。何万年もかけて築き上げてきた知識を使って、

その星に文明を創るのだ。まずは小さな微生物から育て、海を作り、緑を作り、

動物を作る。我々はDNA技術を駆使してある日、この星で一番機能的に優れている動物を選び、改造する。そうして彼らに火のおこし方や、道具の作り方などを教える。

ある日、地球からあるマジシャンが壮大なイリュージョンのしかけを持ってやってくる。

マジシャンはマジックを存分に披露する。人々は驚ろく。

マジシャンはまずは私の言うことを信じさせることに全力を傾けた。人々に争いの無い正しい人の生き方の根源的な思想を吹き込む。いわゆる神の誕生だ。人々は信仰した。

必要と判断されれば有能な人物を探し出し、科学の発展の為のヒントを

さりげなく教えた。しかし、文化というものを正常に伝えることがこんなに大変なものだとは思わなかった。想像以上だった。

他の星からも移住者が来た。彼らはまた違った思想の持ち主だった。我々が育てたところに勝手に入ってきて、まだ力の無い人々を支配した。

労働力を必要としていたのだ。マジシャンは有能な人間にリーダーを命じ、

あらゆる手段を講じて壮大なマジックを起こし、人々を団結し、奴隷労働から逃れさせた。

人々になにかを起こさせる為にはなにかを強く信じさせなくてはならない。情報を操作し、象徴的な出来事を強引に作らないといけない。

しかし、世の中が完全に団結するということはありません。

人類が文明を起こして以来一度も無い。

綺麗に人々をひとつにまとめ上げようと努力した人間はひと時、それは成功したように思えても必ず終わりが来る。

むしろ、人々とはそういうものなんだ。みんな違うんだ、

という漠然とした認識を持ち、直感を働かせた方が

うまくいくのかもしれない。自由にやらせた方がいいのかもしれない。

まだまだわからないことはたくさんある。

我々はこのようにして、歴史の再現を星ごと観察する学問をつくる。この未来においては、一番興味深い学問であり、一番視聴率の高いTV番組でもある。しかし月旅行なら今は手軽にいけるけど、その星に

いくのは選ばれた学者とかじゃないと許可されない。危険なのだ。

以上、これは私の軽はずみな想像話だ。もちろんこんな話ならいくらでも出来る。

020

遠い遠い未来の話002（仮定）

まず魔女に市民権が与えられる。
教育のひとつとして魔女修行が行われる。

今で言う超能力のようなものだ。空中浮遊、遠隔操作、
物体移動などは基本的な能力だ。だれでも出来るような
教育システムが確立される。さらに高いレベルにもいける。

しかし、まず先に個人とはなんだろう？
ある個人とある個人を分けるものとはなんだろう？
ある個人とある個人を分けるものが崩壊したら、
人が肉体を持って生きる意味があるのだろうか？

人の心理がすべての人に読まれるとするならば、
プライバシーは消滅する。人に読まれたくない心の動きを
簡単に読まれたら人はどういう心になるのだろうか？

情報の質としてはこれは完璧だ。完全な情報をだれもが
得ることが出来る。嘘がない。だれも嘘をつけない。

人類は肉体を捨てるのか？ それとも心というものを共有していく
思想を持つことは可能なのだろうか？

欲望とか、恋愛とか、セックスとか、嫉妬とか、あらゆる
感情は無くなってしまうのか？

欲望が存在するとしたら、争いごとは絶えず、結局
お互いに殺しあうことになるのではないか？

それとも、今現在では考えられないほどの高級な思想が
きちんと存在して、それなりにうまくやっているのだろうか？

セックスは完全にフリーな状態となるのか？
それとも私の想像が単にネガティブなだけなのだろうか？

言葉はあまり必要なくなるのかもしれない。文字もいらないのかも
しれない。

ちょっとわからない、魔女が市民権を得る条件とはなんだろう？
魔女とは少数の人だけが持つ特殊な人たちで、なにかの重要な役目
をはたし、

基本的に方法論を伝授することは固く禁じられるのだろうか？

それとも魔女とは宿命的に秘密を守り抜く存在であつた方がよいのだろうか？ 今はそれがいい。我々家族はかなり仲良く暮らしているのだ。他の誰にも邪魔されたくない。

特殊な秘密を信頼する人と共有するということは、なかなか悪い。

魔女が市民権を得て、教育システムが確立される。

高いレベルに達したものは、また別の次元の肉体をどこかで与えられる。そこでは我々の想像を超える話がある。

そこではおそらく時間と空間の概念が綺麗さっぱり消えている。

のかもしれない、、

しかしある特殊性が特殊でなくなつたら

なんにしてもやっかいな問題はおこるのかもしれない。

もし、全世界の男がホモになったらどうなるのだろうか？

もし、日本全国民が読売ジャイアンツを応援したらどうなるのだろうか？

こういう仮定は基本的にありえない話なのだろう。ばかげた想像だ。無限ループだ。

昔、演劇部にいたことがある。

私は役者としての才能はほぼ無く、多くは裏方にまわった。別に役者がやりたいというわけでもなかったし、

裏方のほうが良かった。私は先頭に立ってみんなを引っ張ると言うよりは、

裏でフォローする立場のほうに向いていると自覚していた。

世界とは舞台だ。

みんな少なからずとも演じている。本質的な自己をありのまま表現することはとても難しい。それをするにはこの3次元世界において

表現方法が限られている。なかなかうまくそれを表現したくても出来ないのだ。いろいろと学ばなくてはならない。

あるものは悲劇を演じ、あるものは喜劇を演じ、

あるものは驚きを人々に与え、あるものは汚れ役を演じる。

そのようなものに対して、人々は惜しめない拍手や、歓喜の涙や、容赦ない批判を浴びせる。世界中にそれはニュースとなって配信される。一躍ヒーローになったり、犯罪者になったりする。

舞台裏では裏方の人間がバタバタと動き回る。

道具係は次の場面に必要なものを何度も確認し、声を潜めて

タイミングを計っている。ストーリーは様々な場面変換を要求する。照明係は役者を照らし続ける。役者の存在感を増幅する。

音響係はタイミングに合わせて最適な音楽やら効果音を鳴らす。音楽はムードを作り、役者の感情表現を増幅する。

それぞれの役に合わせて、我々は最適な衣装やら音楽やら小道具を用意する。

ハンサムな好青年役にはクールなスーツが与えられる。高価な腕時計、

財布にはたくさんの種類のクレジットカードが品良く並べられ、皺の無い一万円札が過不足なく収まっている。隣には美女が誇らしげに

笑顔を浮かべている。大手会社社長のご子息役なのだ。シンフォニーが

彼に特上の歓喜の楽曲を流す。

そこにキョロキョロと落ち着きの無い、いつも自分の運命を決めかねているような、こ太りでいつも胃薬を持ち歩いている40代のサラリーマン役が登場する。

彼にはかなりくたびれた安いスーツが支給される。

一日中、暑い中お得意先をまわってきたおかげで汗がたくさんあふれている。

財布の中にはお札の代わりにレシートやらが放り込まれている。小銭が多い。

音楽はストップする。

「あの、こないだの商談の件ですけど、なんとかOK戴きました！」

ここでハンサムな青年は満面の笑みを浮かべて彼を称える

「そうか！　よくやってくれたよ！　君にはいつも感謝している
ありがとう！」

彼らはがっちりと握手をする。ハンサムはせいっぱいの感謝を表
現する。

営業役はしきりに恐縮するばかりだ。隣で微笑む美女の存在も気
になる。

照明は一旦落ちる。場面転換が行われる。営業役はここで終わる。

この話はハンサムな好青年が次期社長候補としてなれない職場で活
躍し、

最後にはその栄誉を勝ち取るという感動的なお話なのだ。この後も、
ハンサムな好青年役は最後まで満面の笑みを浮かべ、観客からは
惜しめない拍手が送られる。最後まで彼は与えられるのだ。

私は舞台裏が好きだ。劇は終わり、蛍光灯がほのかにあたりを照ら
す。

役者も裏方もみんな混じってこの達成感を喜び合う。ささやかに
気の抜けたパーティーが用意されている。みんなはめいっぱい気
を抜いて

今日までに起きた舞台裏話に花を咲かせる。

しかし、舞台裏は決して表の光を浴びてはいけない。

営業役と美女役が密かな恋愛関係にあることや、ハンサム役が実は

ゲイであることなどを軽はずみにいつてはならない。イメージが大事だ。

022

ある夜、娘達にお話を読んであげた。娘達はベットの上で話を聞いた。

うそつき森の話だ。

「むかしむかし、あるところにうそつき森というところがあった。うそつき森に住む木々や花や動物たちは平気で嘘をつく悪い集団だ。

ある日、王子様がその森に迷い込み、多くの財宝とともに死んでしまいました。たくさんの人がその財宝を探しにいきました。

けど、だれもそれを見つけることも無く、また帰ってくる人もいませんでした。

ある日、貧乏な小作農でお酒の空瓶をいつまでも眺めているような父が娘二人にその財宝を探して来い！と怒鳴りつけました。明日飲む分のお酒を買うお金が無かったのです。

娘たちはちっともいきなくなかったけど、父はもう酒が切れておかしくなっていたし、いい加減、父の暴君振りには疲れ果てていたし、

財宝が見つかればこの現状を変えることが出来るかもしれない、と思った。

なんというかもう、我々はこれ以上落ちるところなんてないというくらい落ちぶれていた。近所の笑いものになるのももういやだ。

なんとか、暴れるこの無能な怠け者を寝かしつけた後、しっかり者の母は

私たちを小さな声で母の部屋に呼びました。

「うそつき森にはうそつきしかいないの」

私たちはうなずいた。

「絶対にどんなことがあっても、彼らの声を聞いてはだめよ、絶対に彼らの声に耳をかたむけたら最後、二度とここには戻れないわ」

私たちは不安になった。どうすればいいの？

母はにつこりと笑って、私たちにあるものをひとつずつ渡した。

「??」

I P O D ?

そして母は私たちにものすごいセンスの良い服を着せた。

ファッションモデルが着るようなゴージャスでシックな服だ。

私たちはわけのわからないままそれを身につけ、母は質問に一切答えず、

私たちを椅子に座らせ、髪の毛をブラッシングしはじめた。

「 一歩飛びぬけた進化的な美をめいいっぱい表現することは」

母は真剣な顔で私たちにゆっくりと諭す様に言った。ブラシが上下に動く

「それは、最大の攻撃であり、攻撃は最大の防御となる」

私たちにはさっぱりわけがわからなかった。つまりどうすればいいの？

「ずっと音楽を止めないこと、グループを肌で感じて、体でリズムを刻み

ずつとさっきの言葉を忘れないように心の中で繰り返しなさい」

わたしたちはまだわけがわからなかったけど、母の言うことを聞くことにした。

なんといつでも父やうそつき森の住人の言うことを聞くよりかは、はるかにまともだ。

” 一歩飛びぬけた進化的な美を

めいいっぱい表現すること

最大の攻撃となる

攻撃は最大の防御となる”

母は普段からセンスがよく、あらゆる芸術を愛した。なにより賢い。どうして母はこんな父と結婚したんだろう？

「私も父も若かったのよ」 母はつぶやいた。

若いということはどうということなんだろう？ 難しい話だ。

そして、あくる日の朝、私たちはめいっぱいのおしゃれをして、ポケットにIPODをしまい、うそつき森の入り口にたどり着いた。

二人で一緒に手をつなぎ、深く深呼吸を3回ほどした。とにかくやるしかない。

スイッチオン！

「FREAK OUT！」

私たちは覚悟を決めて、顔を見合わせた。そしてナイルロジャースのご機嫌なカッティングギターに手拍子を取り、シャウトした！

「FREAK OUT！」

曲はchicの「le freak」だ

手拍子を刻み、グループを肌で感じる。ステップを踏みながら少しずつ前進していく、最高だ。これはなかなか楽しい！

フリークアウト！

曲はあるDJによってリミックスされたファンキーなハウスミュージックで

つながっていた。曲をとめることは絶対にだめなのだ。

私たちはファッションモデルに完全になりきってセクシーに腰に手を当てて、ゆっくりと優雅に踊りながら前へと進んでいった。

うそつき森住人らはそれをポカーンとした表情で見ていた。

でもそんなことに気を取られてはいけない。飛びぬけた美をめいいつぱい表現しなくてはいけない。そういう場合じゃない。

木々はその深い皺を寄せ、黙って私たちをみていた。かわいいもんだ。

狐やたぬきはなんとか私たちに近づく努力をしている様にも見えたが、

結局、口をひらいたまま、たちどまっていた。このパターンは初めてなのだ。時代の最先端なのだ。

ミュージックはロックンロールと変わった。チャックベリーのソロにあわせて私たちも一緒にダックウォークのマネをした。楽しい！

花たちからは拍手までもらった。すっかり魅せられているのだ。

私たちはそれをクールに無視し、前へと進んだ。

母の選曲はかなりセンスが良く、様々なジャンルが収められていた。どうしてあんな父と結婚したんだろう？

ご機嫌なオルタネイティブロックがかかる。ハードでワイルドなギターに乗ってジャンプしたり、ギタリストの真似事をしたりする。

ロックはつまらない意味の無い物事を簡単に蹴飛ばしてくれるように思える。もともと邪魔なものなんていないのだ。

実のところ、私たちはすっかり気分が良くなっていて、財宝のことなど

忘れていたりしていた。もう怖いものなんてなにもない。

大事なのはどこに耳をかたむけるかなのだ。とりあえず楽しもう！

疲れたときには木陰で静かな音楽に切り替えた。印象派のクラッシクピアノとか、

古いピアノトリオジャズとか、アンビエントなエレクトロニカとかを聞いた。それは木漏れ日が美しい午後の森の色と調和していた。これはなにかの儀式なのかとわたしたちは考えた。母はなにかを伝えようとしているのだ。おそらく、

すっかり落ち着いたところでソウルでディープなハウスミュージックに

切り替えた。ともかく思いつくまま直感で前に進んでいこう。

呪文を唱えよう！ めいいっぱいの美を表現するのだ！

ズンカッカツ！ズンカッカツ！というリズムを刻む、
ともかく心で感じよう！フィーリングと強い目的意識が
最高に信頼のおける宝の地図なのだ。ソウルだ！

この時点でわたしたちは現在において良質な音楽をたくさん聴いていた。

新しい世界だ。なにか見えるものがすべて美しく見える。
ディープなシンセサウンドが私たちに落ち着きを与える。

私たちはどんどんこのフリークなステップを深く刻む、
前へと進み続ける。もうだれもわたしたちを止められない、

私たちは夜遅く、両手にいっぱいのお宝をかかえて帰ってきた。これだけあればIPODがたくさん買える。

父は大喜びで向かえた。早速、私たちにお酒を浴びれるほど買って来い！と

言った。だがそれには応じない。

私たちは父が座っているイスを思いっきり蹴飛ばした。母は一瞬驚いたが、後に続いた。なにかがパチンとはじけたのだ。

母は今まで溜まっていたものをとてフリークに叫び始めた。にわとりよりも大きな声だ。そして激しい。ロックンロールだ。近所の人たちがびっくりして鍋を片手に集まってきた。

父は明らかに怯えていた。母が怒鳴るなんて初めてのことだった。

私たちは集まってきた近所の男どもに銀貨を配り、あの男をアル中更正施設へと運ぶように命じた。ポカンと口を開いたまま事態がうまく飲み込めない頭の悪い連中だったけど、そんなことで銀貨をもらえるなんてかなりラッキーなので、喜んで父を縛りつけ施設へと運んでいった。銀貨一枚あればあの人たちでは計算も出来ないほどのお酒を飲む事が出来る。父は立ち直れるのだろうか？そんなことは彼が自分で決めることだ。

「お母さん、」

わたしたちは声を上げて泣いた。こんな気持ちになったのは初めて

だ。
母はわたしたちを抱きしめた。わたしたちは結構良い子だと思う。
ファンキーでロックだ。

、、、というわけで、、めでたしめでたし、、

こうして私は自作の無茶苦茶なグリム童話風おとぎ話を終えた。

「ぱぱはいつも、、」マコが言った。

「どこかめちゃくちゃだ！」ミコが続いた。

私は笑った、、はははは、、

「、、でもあいぽつどはいいなー」ミコが言った。

「ぱぱ まこあいぽつどほしい！！」マコが言った。

「いつかね、」と私は言った。ふたりはもうすこしIPODについて
粘ってみようと試みたが、眠気が訪れたようだ。

そしてふたりは眠った。おやすみ 夢にIPODがでてくるのだ
ろうか？

そして、我々は週末に近所の家電ショップにIPODを買いに行った。

私も時々うそつきになる。 以下は少し前の某音楽雑誌のインタビュー。

Q 前作のファンキーなサウンドから一転して、今度はおとなしめのダークなコードが印象的なサウンドとなりましたが、その辺については？

A いやー別になにっていうもんでもないですけど（笑）
単に気分の問題ですね。

Q 不思議な和音構成にとっても魅力を感じます。ジャズでもないし聞いたこと無いサウンドなんですけど、どこからインスピレーションを受けたのでしょうか？

A それは奥さんのおかげかな？ ははは。

Q 奥さんはなにか楽器をやられるのですか？

A いや、うちの奥さんはドがどこにあるかもわからない（笑）
そうじゃなくってもっと普通の援助ですよ。食事とか。

Q 食事は確かに大事ですが、作曲される時はいつもどんなことを考えていますか？

A 今日の晩御飯はなんだろうとか（笑）なにも考えてないですね。
猫と遊んだり。

Q おおくの若いミュージシャンがあなたの作曲法について聞きたがっているみたいですが、なにか助言をお願いできますか？

A うーん、私は実際の生活習慣からかなり外れて音楽を作るという

ことには賛成しないですね、きちんとした食事をして、ちゃんと夜には

ベットにはいつてしっかり睡眠をとるとか、なんというか生活の中から

なにかをしつかり見る習慣がないといけないかと思います。たぶん。

Q なにかおすすめのメニューは？（笑）

A ピーマンかな（笑）

、、、、以下省略、、どうもインタビューは苦手だ。うまい言葉がない。

翌々日、我が家にたくさんは無農薬できちんと育てられたおいしそうな

ピーマンが届けられた。生産者はまだ若く私のファンらしい。

雑誌を読んでなんだかうれしくなって送ろうと思った、

喜んでいただければ幸いです、新作良いですね！と書いてあった。

私はお礼状を書いた。ありがたいことだ。その好意がともうれしい。

もちろん娘たちがその生産者に対して激しい怒りを感じているということ、お礼状に書かなかった。なにしろピーマンは箱にぎっしり

詰まっていたのだ。我々はご近所にも配ってまわった。なかなか喜ばれた。娘たちは必死だった。いつになったら喜んで食べてくれるのだろうか？

そして、うちの奥さんはもちろん作曲に相当なレベルで関わっている作曲行為とはあらゆる意味において非日常的な行為だ。私の場合。秘密だ。

024

よく学校をさぼった。本人は社会見学と言った。教科書はいつも学校の机に置いていたから身軽なもんだ。

学校へ行く途中に長い坂道があった。学校に行くのでなければ緑に囲まれた素敵な坂道だ。生活の音がまったくしないこじんまりとした

家がぼつぽつと立ち並ぶ。

途中まで登って立ち止まり、振り向く、完璧な遅刻なので他に誰も歩いている学生なんていない。わたしひとりだけだ。

私は一気に今来た坂道を降りていく。重力にはさからえないのだ。そう重力にさからってはいけない。そうつぶやいてみた。なにをやるにしても多少なりとも理由が必要だ。

なだらかな道をゆっくりと歩く。急いでいない。暇なのだ。誰もが会社に行き、学校に行き、店のシャッターを空け、主婦は掃除をしたり、テレビのスイッチをつけたりする。静かだ。

もちろん、本当は私も学校にいつて興味のない教科書を見るふりをしたり、

ノートに落書きをしたり、体育の授業のサッカーゲームでやる気のないプレイをしたりする。サッカーゲーム

ゴール前でキーパーと一緒にぼけつと立っている。

やる気のある人間は果敢に相手ゴールに

向かっていく、大声をあげて真剣なやり取りをする。幸いなことに我が軍はとても強い。誰も私に期待なんかしていないし、

その方が私にとってもありがたい。そもそも小さい子供レベルのサッカーだ。

ボールがこつちに転がってくる。私の出番だ。

私は急いでボールの方へと走っていく。敵が来る前にみんなにボールを

渡さないと非常に面倒なのだ。えい！

ボールは高々と前にあがる。私は別にひどい運動音痴というわけでもない。

やる気が無いだけだ。ボールはうまいことに転がる。

誰かがナイスパス！と叫ぶ。ありがとう！

すたすたと元の定位置に戻る。先生は私に渋い顔をする。

ゴールキーパーは明らかに暇をもてあましている。

なにしろ私とふたりだけで事足りるくらい相手チームは弱い。

昼休みになると元気なサッカー少年は昼ごはんをとくに食べ終えていて、

チャイムがなると同時に校庭へと走っていく。授業時間も昼休みも彼らにとってはなにひとつ変わらない。ほっておいても彼らの

基本的な身体能力は社会に出て行くには十分の能力を概に得ている。やる気があれば人は自然に勝手になにかを学べる。強制的になにかをやったところでなんにも得ることなどない。一見賢そうに見えるだけだ。

私は静けさにどっぷりと染まる街の中を歩いていく。

気づくと雨が降っていた。

六月のことだ。傘は無い。私は自分みたいな特に不良らしい格好をしているわけでもない普通の高校生の姿をした人間をきちんと放っておいてくれるテリトリーをいくつも知っている。社会見学の成果だ。大きな木々が雨をさえぎってくれるあの場所へと向かった。

雨の日が好きだ。雨の降る日は仕事を休むべきだと思うことがある。むかしむかしの人々の多くはそうだったんじゃないかと思う。本当の事は知らない。だけど今でも雨の日に仕事をしない人だってもちろんいる。

野球選手だって雨の日は休む。

10回に2本しかヒットを打てない選手には過酷な人生が待っている。

監督にいろいろ言われる。球場で観客にやじられる。チャンスに代打をおくられる。給料はあがらない。それどころかトレード候補にあがったりする。あるものは野球選手としての人生をやむなく終える。

10回に3本近く打てる選手はまあ大丈夫だ。3本以上打つとなると観客からめいっぱいの期待を込めた拍手が鳴り響く。球団は彼をどこにも渡さぬようにせいっぱいの誠意と高い給料を提示する。

スーパースターだ。カメラや新聞記者は彼の足取りをずっと追いかける。
ランナーをためてしまったピッチャーは彼の出番でリリーフに代えられる。

たかが来た球をバットに当てるだけなのに当たる人はきちんとあたり、
当たらない人はきちんと当たらない。なんとしてもあてなくてはいいけない。
結婚したし、子供も最近生まれた。かわいい女の子だ。もちろん野球を
続けたい。純粹に。好きだからだ。まだ引退する年じゃない。体力もある。
しかし、私の人生のほとんどすべてはヒットの数に左右されてしま
う。
過酷だ。涙があふれる。

よく考えると人の人生の浮き沈みの最大の要因は、実はそういう
小さな事によって動かされているのではないか？とも思う。だれも
みんな。
もちろん、立派な野球選手になるにはヒットだけが要因ではないけれど、
これは例えだ。私はちゃんとこれから10回に3回以上はヒットを
打ってなんとか生き残っていけるのだろうか？

、と、なんだかよくわからないことを考え、ポケットに安い
ウォークマンをつつこんでぼけつとポリスを聞きながらたばこなんか
吸っていたりするあんまりまともでない高校生の肩を誰かがたたいた。

彼女は安いビニール傘をさしていた。水色の傘だ。もちろん雨が降っている。

年は20代くらい、大学生にはみえない。水色のワンピースを着ている。

きつと水色が好きなのだ。髪の毛はいくぶんだらしく肩の下辺りまで

伸びていた。私は完全に外界に対しての注意を払っていなかったのだ、

ちよつとびっくりしてしまった。すこし緊張していた。

「さぼり？」にやつと彼女は笑う。

私はうなずく、イヤフォンを耳からはずす。見たことない人だ。

「私もよくさぼってここにいたのよ、ねえわたしにもたばこ頂戴」

私は彼女にセブンスターを一本渡し、火をつけてあげた。

あんまりたばこ吸う人には見えなかった。けど彼女は吸った。

「たばこなんて体によくないよ、とくに高校生は」 彼女が言った。説得力はない

「なに聞いているの？」と聞いてきた。ポリスと私は答えた。

「私も好きだよ、ポリス。ねえちよつと聞かせて」

我々は雨の街をぼけつと眺めながら右半分のイヤフォンは彼女の左耳に

左半分のイヤフォンは私の右耳に、ポリスを聞いた。あんまり

この風景と合っているようにはとも思えないけど、仕方がない。

それしかテープを持ってなかったし、時代はなんといってもポリスだった。

彼女はいろいろあつて今、失業保険でなんとか生活していた。とくに、今急いで仕事を探しているわけでもなさそうだった。彼女は前に勤めていた大手の会社の事務のことについて話した。ちよつとした愚痴だ。私もアルバイトをしていたので多少のことは理解できた。でもまだ見ぬ世界だ。

「そんなに慌てることなんて本当はないんだと思う。

どんなに完璧に片付けても、すぐに散らかるの。物事とは。そこに気づかないといつもいらして、他人に当たるだけ当たってルールがどんどん複雑になっていって、ため息が増えるだけ」

彼女の部屋はなかなか程よく散らかっていた。神経質な性格じゃないし、かえってその方が私にとつては居心地が良かった。

私の部屋だつて自慢じゃないがなかなか散らかっている。カオスだ。

彼女はラジオをF E Nに合わせた。ステイービーワンダーが歌っていた。

小さな古いラジオだ。狭い部屋だったが、あんまり物が無いせいか広く感じる。本が散らかっている。あんまり生活感が感じられない。

「どうして今日は学校さぼったの？」と彼女は言った。

灰皿を真ん中にふたつのコーヒークップと壁に寄りかかるふたりがいた。

「今日の体育が柔道だったんだ。」と私は言った。

「柔道は嫌いなのか？」と彼女は言った。

「雨の降る午前中に、柔道着を着て受身の練習したり、試合で投げられたり

なんて誰が好き好んでやるんだろう？ もちろん好きな奴もいるけど」

彼女はうなずいた。

「でもみんなそれなりに我慢してやっている。なんとか楽しむ努力をする。」

「でも自分は我慢しなかった。」 私は言った。

「もちろん、責めてるわけじゃないのよ、私だって同じだしね、人のこととやかく言える筋合いじゃない。でもね、」

でもね

「そういうのって儀式みたいなもんなのよ、ある意味ね」

「儀式？」と私は言った。

我々はベットの上でお互いの顔を近づけてしゃべった。儀式だ。おしゃべりはとても面白かった。私は無口なほうだけど、彼女はなんというか人から話を引き出す能力に優れていたし、彼女自身も良くしゃべった。彼女はどんな話もちんと最後まで聞いてくれた。そういう人に出会えるって不思議だけどなかなかないことだった。

昼間から缶ビールを飲んだ。私はまだビールがおいしいなんて思えなかったけど黙って飲んだ。彼女は笑っていた。

「そのうちにわかるわよ、誰だって同じ、かえってわかったふりして変に納得しようとするより、正直になっただけのほうがいいのよ、」

なんでも。

そのうちにいろんな出会いがあつて、なんというか突然わかるの」

我々はベットの上で抱き合つた。耳元で彼女がなにか小さな声でいったんだけど、なにを言つたかは忘れてしまった。

私は初めてだったけど、彼女はなにもかも理解していたし、神経質でもない

半分は実地訓練みたいなセックスとなつた。恥ずかしい。

「こういう授業があればみんな学校にいくのかな？」彼女は笑つた。私は夢中になつて何度もした。なにしろ性欲はありあまつているし彼女は素敵だった。学校の若い女教師のなかに彼女みたいなタイプはいない。

一ヶ月ほど、私はかなり頻繁に彼女の部屋に行つた。いない日もあつた。

なかなか割り切れない気持ちになつたけどしょうがない、彼女にも人生がある

そういう時はありあまる性欲が私をいらさらせた。そして不純だと言つて

その考えを止めた。彼女としゃべるだけでも十分に楽しかつたし、なにより彼女の気持ちを傷つけることだけは絶対にしたくなかつた。なんというか彼女は素敵なお姉さまだった。わたしにとって。

運良く彼女の部屋に入れるとすぐに我々はなんの迷いもなく裸になり、

ベットの上で無邪気なおしゃべりをしたり特殊な訓練をしたりした。彼女も基本的には暇だったし、特定の彼氏はいないようだし、

なんというか彼女もなんらかの儀式を求めていたのかもしれない。あるいは単に寂しかつただけかもしれない。わからない。

7月の中頃、彼女はどこか遠くに引越した。なにも言わずに、きつとうまくさよなら出来なかったんだろう。私もそうだ。

どこにいてもなんとかうまく楽しくやっていて欲しいと心から思う。

今も。彼女は幸せになるべきだ。だって彼女は私の素敵なお姉さんなのだ。

こうして私は夏休みにアルバイトをしたり、バイトの同僚と遊んだり作曲したり、本を読んだりして暑い夏を乗り越えた。夏の終わり、溜まった宿題を払いのけ、何かが終わり、静けさの中響きわたる虫の音の

中でじつと黙っていた。彼女のことを思い出す。人生とは選択の連続だ。

あの時、あの雨の中でポリスを聞いているのといないのとはかなり差がある、誰もが大きな木の根っこから出発して細分化された枝の先までたどり着く。世界の果てだ。世界の果てに柔道着はない。ポリスには感謝する。時々、彼女の髪をくしゃくしゃにしたいと思っただけだ

二度と会うことはなかった。

025

人生とは選択の連続である。我々は横浜ベイスターズを選んだ。

試合は9回表、9対2でベイスターズはスワローズに負けていた。どう考えても勝ち目はない。ピッチャーは木田で金城は外野フライ村田はファールフライを取られてしまった。2死ランナー無し。

バッターは佐伯選手だ。

「いけー！さえきぎゃくてんだー！」マコが叫ぶ

それは無理だ。

我々（私とミコとマコと猫だ）は全員ベ이스ターズファンだ。奥さん以外。

我々はテレビの前をソファーに座って囲む。私が真中でむすめたちに挟まれる。

むすめたちはメガホンを手に叫ぶ、マコは佐伯選手のファンだ。ミコはクルーンファンだ。猫はどうも佐伯選手が嫌いらしい、試合をあきらめどこかにいつてしまった。

ねこは種田選手のファンだ。もちろんどうしてかはわからない。

佐伯選手は三振にたおれた。ゲームセット どうしてヤクルトなんか簡単に

負けてしまうのだ？

「あーあ、」マコが悔しがる。

「にしならほーむらんったのに、」ミコが言う。マコがにらむ。

仁志選手は今日ノーヒットだ。

「もういつもさえきのせいでくるーんがでてこない、」ミコがメガホンで膝をたたく。

そんなことはない。

「ねえぱば どうしてうちはべいすたーずなんかおうえんしてるのー?」
やくるとのほうがつよいよー」 マコが言う。

ヤクルトはもつと負けてる。

「たくさん負けても、そのほうが勝った時に何倍もうれしいだろ?」
私は言う、これでも強くなった方だ。

「あーもう、きょじんなんてだいいいいきらいだー!」
ミコが叫ぶ。

全然関係ない。

うちの奥さんがいつものようにこっちに厳しい顔を向けている。

彼女は野球なんて全然興味がないのだ。しかもこのありさまだ。

私はうまく視線をそらし、缶ビールの飲みほす。私だって落胆しているのだ。

いくらなんでも2回までに9点も取られるなんてあんまりだ。ひどい。

佐伯選手は渋い顔をしてさがっていく、ねこは試合をあきらめる。奥さんはうしろで渋い顔を変えない。むすめたちはふてくされてる。

四面楚歌だ。どうして私はベイスターズの為にみんなに気を使っているのだ？

これもみんなみんな佐伯選手のせいだ。きっとそうだ。

むすめたちはおやすみを言って自分たちの部屋へと戻った。

後姿に哀愁を感じる。おやすみ。夢で種田選手がホームランを打ちますように。

「どうしてうちのかわいいむすめたちはセサミストリートとか

どらえもんとか、のびた君とか、ジャイアンとか、シズカちゃんをみないの

かしら？」

彼女はドラえもんのファンだ。それだってちょっと変わってる。

テーブル越しに我々は向き合う。右手でこつこつとテーブルをたたく。

ベイスターズが負けた時はなぜか多少は機嫌が良い。いつもより。

「ドラえもんに頼んだら佐伯選手は毎日ホームラン打ってしまうじ

やないか、

「そんなの教育上よろしくない」 私は言った。間違ってる。正論だ。

「我が家はいつたいどういう教育方針なのかしら？」 いつもの展開が始まる。

これもなにもかもベ이스ターズが悪い。やっぱりヤクルトを応援するべきだった。

野球チームのお気に入りを決めるのに正しい選択はあるのか？ ない。

全試合勝てるチームなんてありえない。巨人がもつと今以上にお金をつんで

良い選手を強引にかき集めてもない。野球とはそういうものだ。よいカオスとグループを作るかどうかだ。バランスが大事だ。それを計算するには天文学的にごちゃごちゃした計算が必要だ。

正確な初期設定値データが必要だ。カオス理論だ。

いまよりももっと細かいデータを作らなくてはいけない。

そんなのは最新の高速コンピューターを使っても計算するのに多くの時間を

費やすことだろう。完璧に計算するには選手一人一人の今日の食事のデータ

まで調べなくてはいけない。無理だ。結局は賭けとか直感とか、経験的なもの

とかが必要なのだ。お金をたくさん払ったって無理だ。お手あげだ。そついう学問をだれかにやって欲しい。野球哲学、野球心理学、チーム構成理論。

コンピューターで試合展開予測をシミュレートする。試合前に様々な学者が様々な理論で試合予測を発表するのだ。当たった人は鼻高々で、

外れた学者が悔しがる。遊びとしては面白いと思う。真剣に遊ぶのだ。

真剣に真面目にやってはいけない。審判を買収してはいけない。ルールを守らないゲームなんてつまらない。正しきジャッチがあつてこそ

ゲームは面白いのだ。当たり前だ。でもそれは面白そうだ。選手に迷惑がかからないようにすればそれは面白い。私は興味がある。

「明日はきつと勝つよ」明日は三浦投手の出番だ。

「そういうことじゃない」彼女がいった。ごもつともだ。そういうことじゃない。

空白を夏の終わりの虫の音が埋める。これも人生だ。横浜ベイスターズだ。

026

最近、彼女が憎むリストに新たなものが書かれた。

IPODだ。

私と娘たちは近所の家電ショップでIPODを買いにいった。天気の良い土曜日だ。

当然のことながら娘たちははしゃいでいた。ふたりはかなりの間、

そのショーケース

の前で好みの色を選んでいた。やはりなんといってもおんなのこだ。

私はじつとまった。悪くない気分だ。うちの奥さんとインテリア系のお店に

いくよりかは何倍も気分が良い。あれは地獄だ。

さんざん迷ったあげく、マコはピンク、ミコはグリーンを選んだ。

幼児心理学専門家ならなにか一言興味深いことを言ってくれそうだが私にはわからない。やはりなんといってもおんなのこなのだ。

われわれは近くの店でソフトクリームを買った。家からここまでは歩いて10分だ。それを3人で食べながら家へと歩いた。

帰り道、娘たちは自分の選んだカラーのすばらしさについて言いあった。

もちろんどっちもゆずらない。まるで根拠のない論説が飛び交う。

ピンクは佐伯選手の好きな色らしい、どこからそんなことを聞いたのだ？

グリーンはクルーンと名前が似てるから なるほど。

それはなんだかおんなのこらしくない。

私は自分の部屋に戻り、パソコンの電源をいれる。むすめたちは待ちかねたように

それぞれの箱をこじ開ける。説明書をちらつと読む。もちろん娘は読めない。

まだ5歳だ。アプリケーションをインストールし、私はとりあえず

棚の奥に

しまつてあつた80年代のCDから適当に選曲しMP3に変換する。
なつかしい。

娘はまだ子供向きの歌とか、ベ이스ターズ応援歌しか知らない。それはあまりにも

不憫だ。なんとかしてあげなくてはいけない。教育上よろしくない。

ケーブルをつなぎ、まずはグリーンのIPODに音楽データーを送り込む

マコがそれについて文句を言う。私はクルーンは160キロの速い球を

投げるからだよといった。マコはしぶしぶ納得した。良い父だ。

こんなもんにCD何十枚分の曲が入るなんて信じられない。おじさんの意見だ。

時代はどんどんコンパクトで多機能になる。CDだつてちょっと前までは

十分にコンパクトだった。コンパクトディスクつて言うくらいだし。マコがちつとも高速じゃないじゃないかと言った。ロードには時間がかかる。

当たり前だ。200曲ぐらい選んだのだ。昔、LPレコードから46分テープによく録音したもんだ。もちろん一枚録音するのに同じ時間を必要とする。しかもいつも片面23分にきちんと収まるかどうか

しっかり計算したり、その残り少ない回転するテープをじっと見ていなくては

いけない。200曲もテープに収めるなんて無理だ。昔の話だ。おじさんの意見だ。

そんな話しを娘にしたつてどうしようもない。きつと一言で片付けられる。ふーん。

ようやくピンクのIPODのほうも転送が終了する。ふたりはなんとか我慢して

この瞬間を待っていた。えらい ベイスターズのおかげだ。

ふたりに基本的な操作をひととおり教える。こういうことはなかなか飲み込み

がはやい。さすがだ。あと何年もしたら私よりもうまくパソコンとかいじるんだろうな、とか思う。そういうものだ。おじさんの意見だ。

ふたりはパパありがとーと言ってふたりの部屋へと走っていった。いい子だ。

私はちよつとなつかしくなつてMP3に変換した、高校の時に良く聞いた

曲を何曲か聞いてみた。なつかしい バナナラマだ。おじさんの意見だ。

私はアーハのファンだった。 テイクオンミーだ。

ザサンオールウェーシャインオンTVだ。リビングデイルイツだ！

ひととおりなつかしがった後、居間に戻った。階段を下りる。居間は一階にあつて

私の部屋は2階にある。居間に戻った。

娘たちは踊り狂っていた。奥さんはテーブルに頼杖をついて私をにらむ。

いつものベイスターズ顔だ。むすめたちはどうやらうそつき森のなかにでも

いるつもりらしい。むすめたちなりの一番シックな服に着替えていた。

おそらく財宝のありかを探っているのだろう。なんであんな話を作ったのだろう？

わたしもしかたがなく奥さんと向き合ってテーブルについた。責任を感じる。

しばらく無言で娘達を見ていた。なんだかものすごく楽しそうだ。仲間に入れて欲しいくらいだ。3人そろってバナナラマだ。

マコはどうやらペットショップボーイズのニューヨークシティボーイが

お気に入りらしい。何度も繰り返している。にーよーしちーぼー！

ミコはマドンナのホリデーを聞いていた。なにが気に入るかなんてもちろん

わからない。むすめたちには80'sも70'sもたいしてかわらんだろう。

まあ、自分としては楽しいのはよいことで済むが、奥さんの手前そういうわけにもいかない。

「あのね」 私は言った。娘たちはイヤフォンをはずした。汗が飛び散る。

「あんまりずっと長い間大きな音で聞くと、ミコとマコの耳さんたちが

疲れちゃっし、IPOD君たちもへとへとだ。ほどほどにね」と私は言った。

「はーーーーーい！」と明るくふたりは返事をした。ホットだ。全

然聞いてない。

ふたりはまたすぐにイヤフォンをセットし、踊りながら自分たちの部屋へと消えた。

どうやら今、ミコはユーリズミックスのスイートドリームが流れているらしい。

たどたどしく口ずさんでいた。マコはカルチャークラブのミスミーブラインドだ。

あと一月過ぎたら、私と話があうくらい80'sフリークになるかもしれない。

あきたら、今度は70年代をせめてみよう。あんまり偏った聞かせ方すると

そのうちシンディーローパーみたいな格好になりそうだ。教育上よろしくない。

私はほほえましい気持ちで娘たちを見送った後、振り向くとそこに険しい顔のおくさんがいた。

「今度はチャイコフスキーもいれとくよ」私はいった。彼女は根っからのクラシックマニアなのだ。もちろんそれには応じなかった。そういうことじゃないのだ。

027

遠い遠い未来の話003

中身のない入れ物は意味がない。中身は素敵な入れ物を求めている。

入れ物は中身の熱狂を期待している。
中身は入れ物にデザインとか機能性とかの進化を求める。

2030年、ドイツのマイケル・ベッケンガー博士は反重力自動車の
一号を開発した。

理論上は10メートルぐらいまで浮遊出来るらしい。従来の舗装道路
でも、荒い道でも、チベットの山奥でも、しまいには海の上も走行
可能だ。

ようするにどこでも走れる。これならオンロードもオフロードもな
い。

タイヤがない。当たり前だ。当然動力モーターもない。CDウォー
クマンと

IPODの違いとなんとなく似ている。私は科学のことはさっぱり
なので、詳しいことは

良くわからないが、車の底側にはいくつかの発光ダイオードがつい
ていて

それが進行方向やらスピードを調節する。よって少ないエネルギー
で済む。

車の上には効率の良い太陽電池がついていて、大概はその貯蓄され
たエネルギー

で動く。足りない場合はどこかで電池を買えばいい。便利だ。

ブレーキとともに対物回避装置がついている。最悪なにかにぶつか
りそうに

なった時にそれは磁石の反発のように衝突をさけ、空に向かってい
き急停止する。

なにより排気ガスはゼロだ。ない。場合によってはそれは自転車よりも環境にやさしい。そして特に難しい運転技術はいらない。運転免許もちょっとしたペーパーテストで十分だ。

いろいろ問題もある。ベッケンガー博士はまだこの開発のことを発表していない。もちろんドイツ政府は知っている。何力国かのトップクラスの首脳も知っている。技術的な問題はない。すべて化学式で計算できる。しかもそんなに難しい技術でもない。物理学を多少学んだくらいで理解できるようなシンプルな構造だ。

しかし、この開発が世界の経済を一転させることぐらいは、経済学を知らない普通の人間でも理解できる。もちろん相当なレベルでのトップシークレットだ。ベッケンガー博士とその家族、親戚まで国家の監視状態にある。背後にはいつもニコラスケイジみたいな男がこっそりあたりに異変がないかどうか注意を怠らない。

2020年にはその予告編として、世界の反応を見るちょっとしたテストとして、反動カスニーカーを子供向けの商品として発表した。

これはものすごくヒットした。まずはアメリカで先行販売された。これはちよつと助走をつけてジャンプすると3センチほど浮き上がり、

そのまま約20mくらい浮いたまますすべるように進んでいく。これは楽しい。

テクニクを身に着けた最先端の子供はアイススケートのごとくうまく足をさばき、自由に浮き続けたまま進んでいく。これは楽しい。

生産が間に合わない。アメリカの子供たちは今まで握り締めて離さなかった

ビデオゲームのコントローラーを投げ捨て、必死の形相で親にねだった。

時はクリスマスだ。アメリカ中の販売店に、思いつめた顔の親達が長い行列を

作る。値段は安い。60ドルだ。ちょっとした高級な靴よりは安い。販売は子供用のみにした。理由は秘密だ。これはただのテストなのだ。利益は

求めていない。しかし少なくとも大人もどうにかそれを購入し、改造して

自分用にひとつもちたいと強く熱望した。しかしひとつネジをはずしたら

修復不可能なくらいにすべてが分解されてしまうようにうまく作られていた。

親達はインターネットで予約を試みたり、現在の在庫状況、どの店に

在庫がどれだけあるのか丹念に調べた。子供の喜ぶ顔もみたいし実は自分たち自身もものすごい興味を無意識レベルで持っていた。近年まれに見る

大ヒット商品なのだ。桁外れだ。

詐欺も起こる。だまされた哀れな親がテレビで叫ぶ。みんなが同情する。

いまだに手に入れない子供が泣き叫ぶ。あるものは両親に最高の賛辞と熱狂を送る。ヒーローの誕生だ。両親は神に感謝する。達成感が涙を誘う。

ようやく生産システムが確立され、もう並ぶ必要もなく買える様になる。

多量生産がおこなわれる。値段も40ドルに下がった。

アメリカ中の親達がほっと胸をなでおろした。混乱にはもううんざりしていた。

その頃にはもう、アメリカ社会では子供がこの靴で遊ぶ光景が普通になっていた。

子供のあいだではこの靴を利用した、子供なりのゲームがいくつか確立されていた。パフォーマンスもある。そういうテレビコンテンツ番組も

結構な視聴率を得た。驚くべき芸が子供によって披露される。スタンディング

オベーションで迎えられる。だが、たいていのちいさな子供の芸はマイケルジャクソンのビリージーンをバックにムーンウォークだった。

でも暖かい拍手が起こる。そういうものだ。子供たちがそれに応える。

街を歩く大人を器用にすり抜けていく子供が増え、ちょっとした社会問題も起こる。

びつくりした70歳のあばあさんが転んで病院に運ばれると言う事件も起こる。

しかし一方で家の中でビデオゲームばかりしているよりかはいいの

では？

という若い親の意見がだいたい世間では支持された意見だった。

実のところ、子供の基礎的な身体能力は明らかに良くなっていたのだ。

グラフで説明できるくらい。肥満の子供も減っていた。パフォーマンス向上の

為に子供たちは毎日の食事にケチをつけ始めたのだ。

それはブームに便乗した業者が仕掛けた。医者もそれを後押しした。悪い話じゃない。

12歳くらいになると卒業する。靴のサイズがなくなるのだ。お別れだ。

何人かの声の大きな大人は、どうして大人用のサイズを生産しないのか？

とインターネットやらテレビでおおいに叫んだ。しかしうまくこと黙殺された。そういうことじゃないのだ。子供は切なそうな顔をした。

が、しかし、子供はそれなりに事を理解し、思い出と一緒にそれを綺麗な箱にしまい

大事に物置の片隅にしまった。卒業アルバムみたいに、きちんと成長しているのだ。

もちろん、これはヨーロッパ、アジア、ともかく世界中へと販売網が確立され

遅れて大ヒットした。品薄による混乱を回避する為に入念な準備が整ってから販売されたが、それでも長い行列が出来た。

もちろん日本でもスーパーマーケットの中で子供がふざけていて、商品の白菜に

顔を突っ込むという事件がおきた。親がどうしてもつと高いところに

商品をおかないのだ？と言った為、ワイドショーでひと時、児童心理専門家やら教育学を専攻する大学教授やら小説家やらがいろいろな論説を説いた。

いつの時代も変わらないことがある。タフだ。

静かなところで、影が動く、もちろんわかる人にはわかる。こげた匂いだ。

これは予告編なのだ。実際の世界を舞台にした壮大なハリウッド映画なのだ。

ネット上では、あらゆる人間がそれぞれの仮説やら暗い未来予測やら様々な議論が巻き起こった。あるものは第3次世界大戦の必要性まで説いた。

ベッケンガー社に対して静かなパッシングも起こる。脅しもある。

新たな革命が起きれば、どうしたってあるものは熱狂するし、あるものには人生最大の試練が待っている。潜在的な恐怖心が湧き上がる。

国単位で最大の試練を経験するところもある。革命とはそういうものだ。

ベッケンガー博士は苦悩の毎日を送った。なにしろ24時間ニコラスケイジに

監視されているのだ。くつろげない。交替で15人くらいのニコラスケイジがいる。

まるでハリウッド映画だ。しかしいつまでたってもセリーヌディオンは歌わない。

ベッケンガー博士自体はなかなかシンプルな考えの持ち主でなかなか

か楽観的な

考えを持つ無邪気な科学者だった。今回の革命的発見だってかわいい一人息子

と遊んでいる時にふと思いついたのだ。彼は子供と遊ぶのことになよりの

楽しみとし、息抜きとした。基本的にやさしいひとりの良きパパだった。

今ではなかなか遊ぶチャンスはない。ニコラスケイジのせいだ。子供が怖がる。

しかし、さすがの博士もこの自動車がものすごい経済の混乱を巻き起こすことぐらい

きちんと把握していた。当たり前だ。考えればだれでもわかる。はつきりしている。

経済とはいったいなんだろう？と考える。なんといってもこれは経済がおこす

問題なのだ。より多くの変動にも耐えうる新たな経済ルールを作成しない限り

われわれは行き止まりの前で立ち往生する。抹殺される。

博士もかわい子を持つひとりの親だ。だれかがこの発明によって働き口を失い

幼きものを飢えさせることを決して望まない。純粹に悲しい。

もうひとつの問題はライセンスの問題だ。別に私はお金が欲しくってこの開発をしたわけではない。純粹な科学的好奇心による結果だ。もちろんなにも問題がなければ技術的な資料の公開を喜んでする。

しかし、特に軍事にこの技術を利用して欲しくないと願う。これは強力だ。

どのような世の中のしくみがこのような開発を喜んで受け入れるのだろうか？

博士は監視され苦悩し、トップは頻繁に秘密会議をおこない、ネットでは
終末論が飛び交い。世界の子供たちは無邪気にその靴で技を競い合う。

2030年、結局、博士は楽観的に事の展開時期を待つしかないな、と悟る。

それは一人の人間が考えたところでどうにもならない話だ。非常に天文学的に
複雑な問題だ。世界とはニューヨークヤンキーズだ。

デレクジーターの肩にすべてが託される。フランクシナトラの歌が聞こえるまで

ただ、この車が人々にいきわたれば、良くなる話だってたくさんあるのだ。

機能とはとてもイノセントに多くの可能性を秘めているだけなのだ。

心のあり方がそれを左右する。デレクジーターだ。

ガールジャストワナハブファンだ。みんなシンディーローパーにみたいになればいい
みんなみんなバナナラマになればいい。デステイニーズチャイルドだ。

それがいやならみんなでニコラスケイジみたいになるほかない
スーパーニコラスケイジ軍団の誕生だ。シンディーローパーを逮捕する。

トムクルーズと戦うのだ。ジョントラボルタももちろんやってくる。スタローンだってシユワルツネッガーだってジャッキーチェンだってやってくる。ブルースウィルスだってやってくる。スパイダーマンさえもやってくる。非常に混沌とした複雑にタフな戦いの火蓋が落とされる。あまりにも複雑すぎてだれも主題歌を作れない。エンディングクレジットも長すぎる。予算が足りない。

028

私はある山間にある小さな旅館で働くことになった。20代の頃の話だ。

私は安いギター一本を背負い、バックに少々を着替えを詰め込み、そのちいさな旅館の中に入っていく。

小さな駅だった。駅員はいない、ある夏の終わりの夜だった。どこにも空いているお店はなく、虫の音だけが響いていた。暗い。

フロントも静まりかえっていた。あまりお客がたくさんくるタイプの旅館じゃない。

部屋数は少ないし、私ともうひとりのアルバイトの人以外はみんなこの家の家族だった。別にそんなに気合いいれて商売しなくっても

やっていけるみたいだ。のんきなもんだ。私はお手伝いさんみたいなもんだ。

家族の人たちはちょっと変わったところもあるけど、なかなか細か

いことは
気にしない、いや、ちょっとは気にした方がいいのでは？といった
タイプで
なにはともあれ基本的に親切な人たちだった。ありがたい。

私はどこにも行きたくなかった、けど元の場所にいるのはごめんだ
ったし
どこかにいくしかなかった。しかたない、私の運命はまだ経験を求
めてる。

もう一人のアルバイトの人とはすぐに仲良くなった。新潟から来て
る人だった。
もちろん、彼は退屈していたのだ。同年代がいないのだ。

つくなり、調理場兼、従業員の食堂兼、洗い場兼、家族の食卓に通
された。

みんなと食事をし、ひととおりの自己紹介と質疑応答が行われた。

そして同僚にひととおり館内をぐるっと案内された。風呂はお客と
共同で使用。

なかなか良い温泉だった。そうじゃないところにだれもお客がきそ
うもない。

料理は平凡だし、館内は多少くたびれている。家族は接客に力をい
れない。

部屋は全部で20部屋あった。とにかく私と彼で手分けして、お客
を案内し、

部屋に料理を運び、お酒をはこび、布団を敷き、宴会場を片付け、
カラオケを

用意し、廊下に掃除機をかけ、シーツをかえ、風呂場をデッキでこ
すり、

朝には眠たい目をこすり朝食を用意する。ようするにほとんど全部だ。

そして、彼は私のすみかに案内した。旅館の外を出てすぐのところにそのうらぶれた部屋がある。部屋と言うよりはスペースと言った方がしっくりする。

しかし、ご飯は3食ただだし、おまけに良いお風呂がある。もちろんひとりで

寝る場所もある。旅館が暇だから仕事は楽だった。今まで勤めていた狂おしいほど忙しいレストランの仕事に比べれば楽なもんだ。給料は安いけど

お金を使うところがない。一番近いコンビニまで車で30分も走らなくっては

いけない。そんなのはコンビニとはいえない。全然コンビニエンスじゃない

外には一面畑があり、遠くにちいさな駅が見える。四方、山に囲まれている。

心地よい風がふくと草が静かにさらさらと音を鳴らす。それ以外の音はなにも

聞こえない。近くに車が頻繁に走る道路がない。哀愁のある心地よい音だ。

心地よくない音もある。 団体ツアー客だ。

私と同僚は手分けして部屋を案内する。この不幸な館に運ばれてきた哀れな

団体客が口々にもちろん私に聞こえるようになにかを言う。私は適当に聞いてない

ふりをする。私だってその意見には大賛成だ。団体ツアーを受け入れるべき
箱ではない。しかしそんなのは適当に笑ってごまかすほかない。

案内を終えて、ここの調理場兼その他なんでもスペースで、同僚と一服する。

今日はハードだったなー、と笑いあう。大阪から来た団体客だ。手ごわい。

宴会場に食事の用意を整える。100畳ほどの大広間だ。障子があちこちで破けてる。座布団がところ狭しと並べられる。舞台にはカラオケが設置される。

浴衣を着込んだ団体がぞろぞろと集まる。6時5分ごろ、みんな相撲を見てたのだ。

いつせいに団体客は料理の評価を行い、あちこちからいろいろな声が聞こえてくる。

いろんな意見がある。カオスだ。でも大賛成だ。基本は一致している。ひどい旅館だ。

不幸なこのツアー添乗員は私たちを捕まえ、聞こえるように責任者を呼んでくれと

告げる。私はフロント係りを呼ぶ。フロント係りは渋い顔をする。

なんのことは良くわかってるのだ。役割だ。しかも不幸な役回りだ。ミゼラブルだ。

添乗員はお客がきちんと事を把握できる位置でしかもあんまりシリアスにならない

絶妙な位置に立っている。クレームをつける。フロント係りはひたすら頭を下げる。

役割だ。ミスジャッチに怒りをぶつける監督と一緒に。世の中にはそういう役割を

与えられ生きている人もいる。大変だけどタフに演じる技術を身に着けるほかない。

我々はひと段落すると家族の人に宴会係りを押し付け、各部屋を合鍵であけ

布団を敷き詰める。あんまりだらだらやってる時間がないから大変
と言えば

大変だけど、少なくとも宴会場にいるよりはましだ。今日の添乗員
はちよつと

近寄り難い雰囲気のある、背が高くがっちりした男だった。もちろん
彼を

うまいことなだめてお酒でも出したら、愚痴のひとつやふたつ出て
くるだろう。

お互いを分かり合えるかもしれない。そういうもんだ。ツアー添乗
員は常に寡黙に孤独に

いつもシリアスなものにぶつかっていき、それなりの答えを出さな
くてはいけない。

大変だ。ストレスが溜まる。お酌のひとつもして、肩をもんであげ
るぐらいのことを

してあげたくなる。我々はわかりあえる。でもない。いつもつま
くいく保証はない。

そうしてこうして、あるものをうまくかわしたり、あきらめて頭を
さげまくったり、
フロント係りに責任を押し付けたり、同僚と飲んだりしているうち
に、

夏が過ぎ、冬は訪れて、何年かが過ぎた。

ある夏は2人の若い女性がペアで働きに来た。夏だけの短期間のアルバイトだ。

学生なのだ。なかなか楽しい夏が過ぎていったが、夏の終わりはなんにせよ

なにか哀愁の漂う時間だった。彼女達はめいいっぱいなにかを吐き出し、

すっきりとした表情で小さな駅から消えていった。雲ひとつない良い天気だった。

暇な日には我々はカラオケをしたり、飲んだり、いろいろと身の上話をしたりもした。

短期間だったけど、その分なかなかディープだった。二度と会うこともないだろう。

夜、私は一人で散歩に出た。昼休みに良くみんなで来た川辺に座り込んだ。

私は壮大な虚無感の中にいた。石をどこかに投げる。私以外はみんなうまいこと

楽しく生きているように見える。私はこの景色を好きだったけど、うまくは

染まれなかった。心だけがいつもどこかを彷徨っている。でもいく先はさっぱり

検討もつかない。小さい頃、私は漠然と人はだれも高校や大学を卒業し、

どこかの会社に収まり、貯金をして誰かと結婚をして子供が何人か生まれる、

そういうことは普通に誰でもやることである、と思っていた。

しかし、私は明らかにそのストーリーから外れかけていた。修復しようと思えばもちろん出来るだろう。なんといっても私はまだ25歳なのだ。

でも気持ちがない。私の気持ちは明らかに違うストーリーを漠然と求めている。

なにもかもが真っ暗だった。かすかに河の流れる音が聞こえるだけだ。

しばらくにも考えないようにしていた。私はまだこの風景の一部でしかない。

そんなに悪い気分でもなく、目に見えるものすべてが綺麗だったけどどこにもいけない。なにかに支配されている。新しいストーリーが必要だ。

しばらくはずっと草の間を駆け抜ける風の音だけを聞きながら過ごしていた。

今になってもこの私の歴史をどう評価していいのかわからない、わからない。空白だ。

結局はなんでもいいからもがいてみるしかない、というか結局それしか出来なかった。

029

我々はある提案をした。ここに来て3年目の冬だった。雪が止まらない。

「問題は団体客だ」同僚はそう言った。大賛成だ。しかもわかりや

すい。

「温泉旅館というある種のイメージに縛られていることが問題だ」

私は彼に続いた。彼も3回ぐらいなずいた。これで全員一致だ。

我々はたまにお互いの部屋を訪れあい、お酒をおごりあい、つまみを差し出しあい、ともかく話し合った。暇だったのだ。

もちろん団体客が悪いわけではない。当たり前だ。

この旅館にふさわしい客として団体客は当てはまらない。団体客にとって望まれる

旅館のあるべき姿はここにはない。明白だ。

団体客はある一定のレベルに達した料理を求める。というよりもそれは添乗員が

求める。四方、山に囲まれたこの旅館においても添乗員は新鮮な刺身の

盛り合わせなんかを堂々と要求する。そうじゃないとしめしがつかないのだ。

無茶だ。それはあからさまなステレオタイプという事実を棚に挙げ、理不尽に

正当化され、強引に世間の常識として広く普及させたイメージだ。誰かが広めた。

誰がなんと言おうとこの山の中に海の幸が新鮮にクールに歩き回っているはずがない。

そんなのは生物学者が許さない。そんなのを許したら、熊の親子がビーチで

日焼けしたり、海かもめが湖でブラックバス釣りを楽しんだりする

ことを

認めなくってはいけない。理不尽だ。社会が混乱する。

しかししかもちろん、一番理不尽なのはなんといってもこの旅館なのだ。申し訳ない。

誰にも文句いえる資格がない。我々は黙り込む。冗談はここまでだ。夜は長い。

我々はプランを話し合う。もう一度言うが、特にそんなに真剣に我々の構造改革案を眠れるとぼけた家族の頭をたたき起こし、プレゼンテーションを行ない、

この旅館をあるべき姿に改善し、家族や、関連業者から惜しみない拍手を頂くとか

そんなことはまるつきり考えてなんかいない。ようするに

暇なのだ。

そんなことは家族も考えていない。彼らは別どころできちんとした不労取得がある。

良くわからないけどそうなのだ。ただ、表向きに働いているという印があればいいのだ。

温度差が激しい。結局はこれはわれわれ自身の問題なのだ。

議論はクールダウンされた。

「これからどうするの?」と同僚が聞いた。言いたいことはわかる。

「検討もつかないな」 正直に言った。他にいきたい場所がない、
ここの居心地は
悪くない。ふたりともちゃんと働uksi、とくにだれも文句をいわない。

「実家を継いだって別にいいんだけど、」 彼の実家も旅館だ。

「どうもね、まだうまくいってこないんだよねー」

彼はばやいた。もう160回くらい聞いたけど 私はずなずいた。

「まだ継げるものがあるだけ羨ましいな、自分はなんもないしな、
もちろんそんなこといってもしょうがないんだろうけど」

ただこのままこの土地ですつと過ごすことだけは避けたい。そうなるくらいなら
裏の畑に植えられる大根にでもなったほうがいい。その方が幸せそうだ。しかし、

しみりとした会話だ。あとが続かない。

結局われわれはここにいってもどこにもいけないことぐらいはとづくに
知っていた。ここにしようとする限り、われわれはどこにも
いけない愚痴を言い合い、やりもしないプランを練り、笑い話にしたりして

時間を先延ばししてるだけだ。全然不愉快でもないし、楽しいと言えば

楽しい。同僚もなかなかいい奴だ。仕事だって無難にこなせる。
問題はこの先のイメージがないことだ。プランがないのが問題だ。

ここを立派に上手に胸を張ってさよならできるプランがないとだめだ。

キーワードはこの旅館の中にある。探すほかない。

「問題は団体客だ」 彼はまた同じ意見を言った。大賛成だ。

われわれはプランを練った。夜は長い、無限ループだ。

革命だ。抜本的構造改革だ。理不尽な暴挙に対する妥協を我々は許さない！

われわれのプランはともかく団体客を断固拒否することだ。

もちろんそれだけをするのはただの子供と変わらない。新しいアイディアを

きちんと文章化してわかりやすく提示しなくてはいけない。

アイディアとはこうだ。

この旅館が有一誇れるものはなんだ？ まず温泉だ。

事実、私はここに3年ほどいて、もちろん毎日温泉につかっているわけだが、

本当にそれは良く効いていた。もちろんそれだけが理由ではないだろうけれど、

わたしは疲れた体を引きずるようにしてここにやってきたのだが、今はものすごく体が軽い。スキップも出来る。元気な若い女の子とワイルドにうらぶれたカラオケ大会にも参加できる。同僚と

くだらない会話を延々と出来る。団体客の攻撃を身軽にかわすことも出来る。

あまりにも暇で全室のすべての障子を張り替えるようなこともした。

完璧だ。

われわれはこの温泉がもたらすあらゆるデーターを集めた。遠い街にある

うらぶれた図書館でいろいろ調べたりした。そのほか、この旅館からすぐに

いける様々なスポットも調べた。この旅館にまつわるあらゆるデーターを集めた。

やる気になればそんなものは簡単に集まるのだ。今ではこの家の住人よりも

この旅館について詳しくなっていた。われわれはご近所の暇そうなおばあさんまで

つかまえていろいろ聞いてきたのだ。彼らは完全に包囲されている。

そして、暇のなかでうとうとを繰り返すフロント係りを横目に、今まで来ていただいた

顧客リストをこっそり持ち出し、不便なコンビニエンスストアまで行って

コピーをし、またそれをこっそり返した。今までよく泥棒にあわなかったもんだ。感心する

そしてわれわれは昼休みに一枚一枚一枚、新しいプランを印刷した

チラシを封筒につっこみ、そして一枚一枚一枚一枚、手書きで住所を書いた。腕が痛い。

いったいわれわれはなにをやっているのだ？ そうだ思い出した。

革命だ！

そして最後の砦、われわれはまず団体客のかわりに定年を迎えて暇

をしている

老夫婦の長期滞在者を呼ばうと、寝ばけた家族に不意打ちをかけ説明した。

家族はポカンとしていた。長期滞在者にきちんとした明確な料金プランを提示すれば

多少高く感じたって来るだろう。そして冷凍のマグロを切ったり、まずい冷えた

てんぷらをだしたり、すのたっている茶碗蒸しをだすのをやめて、山の幸

（それは近くをぐるぐると周り、すでに発注可能にしてある）を中心とした

健康を売りにした料理を提供するのだ。一月も温泉に入り、この料理プランを

実行すれば多少は効果があらわれると思う。そうじゃなくっても一月ばけつと

何も考えず、奥さんも料理の心配もせず過ごせるだけでもいいものだ。

その年頃の両親がいる人にも良いプランかもしれない。よいプレゼントにもなる。

ついでに、暇がないように歩いていける範囲のありったけの自然があるスポット

とか（もちろんちかくに腐るほどある）をパンフレットに書き込む。ちよつと遠くの観光スポットだったら、暇なフロント係りが旅館のバスで

連れて行けばいい。でも基本は暇を売るのだ。それしかない。なにしろ暇ならたくさんある。

ほうきで掃いて捨てるほどある。また暇だからほうきでそれを掃く。掃き終わるとまた暇になる。

無限ループだ。

あとは、この近くにはなかなか良いスポーツ施設があることを発見した。

若いスポーツ団体プランを作るのも良い。こっちは安く料理は質素でいい。

近くにゲートボールができるところもある。老人会をよべばいい。かれらは純粋な団体客ではない。彼らには立派な目的が存在する。純粋な団体客とは純粋に旅館そのものが目的なのだ。目的はすべて添乗員に託される。

提示された目的の質が悪いと文句を言う。文句を言われた添乗員はわれわれに文句を言う。

だがそれには応えられない。わらってごまかすしかない。

しかし、メインは長期滞在者を集めることだ。われわれは間髪いれずに

家族にまくし立てた。それは10日間ぐらい続いた。タフだ。

フロント係りをお酒でまるめ、調理係りにめいめいっぱいのお世辞を振りまき

チャンスをつかがう。この旅館のを動かすには調理係りの承認が必要だ。

なんといつてもこの調理係はこのオーナーでもある。小さな旅館なのだ。

もちろんわれわれは正しい行動をした。われわれはこの調理人のデーターを

隅から隅まで調べ上げたのだ。もちろん弱点も。ご近所の人間はともとても

愉快そうに隅から隅まで話してくれた。そついう土地柄なのだ。わかりやすいし、

われわれのような愛想の良い若いよそ者にもやさしかったりする。息子や娘たちは

都会に行ってしまった。寂びしかつたりもする。単に噂話が好きでもある。

そういう土地柄なのだ。われわれは徹底的に攻めた。落城はもはや近い。

ほとんどみんなが渋い顔をしつつも明らかに白旗を揚げそうになった時、

われわれはスタンバイ済みの食材業者を呼ぶ。業者がオーナーを囲む。

めいめいっばいのお世辞が飛び交う。彼の弱点だ。世界中誰もが知っている。

フロント係にチラシ同封済み、住所記入済みの、山のような封筒を強引に押し付けた。

彼には間髪いれず、有無いわず、強引にことを運んだ方がいい。そんなのは

初めて彼と話した時から把握していた。わかりやすい性格なのだ。誰にでも把握できる。

あとはあとは、天に祈り、勝利を確信する以外やることは無い。結局最後は神頼みだ。

われわれの夜の革命会議は終了し、今度は雨乞いのダンス大会へと変わった。

なかなか真剣だったが、なにはともあれ楽しかった。われわれは良いチームだ。

そして良き友人だ。なんでも話し合えるし、一緒に運命を共にしている。

数日間は反応が無かった。多少は居心地が悪かった。けどオーナーはまんざらでもなさそうだった。なにしろご近所からめいいいっばいの賛辞が起きてたのだ。だれがそんなこと計画したんだろう？ きつと神のご加護だ。

第一号がいらしたのは20日後だった。われわれはせいいいっばいのおもてなしをする。お客様が帰りそうになるくらい。もちろん帰さない。じつのところ、われわれはフロント係りから毎日のように、切手代と囁かれていたのだ。辛い。でも耐え忍んだ。気持ちわかる。なにしろ3000筒くらいあったのだ。そんなに安くは無い。

第2号もすぐに訪れた。しばらくするとロビーで第一号様と仲良く談笑する姿が見られた。感動的だ。評判も良い、団体客はいないし、そもそも家庭的なところだし、建物はどうしようも無いけど、料理はよいし、温泉はばっちりだ。われわれも親切だし、フロント係りも特に余計な気遣いしない。もともとしないだけだ。自宅のごとくくつろげる、とお客様から喜びの声を頂いた。ガッツポーズだ。

われわれはいかにも温泉旅館でございますみたいな顔をした飾りやらなにやらをすべて取り外した。もはや誰もわれわれに文句を言えなくなっていた。じつのところ、この方が彼らの生活スタイルに合っているのだ。そ

れにご近所からの評判もよろしい。完璧なのだ。まだなれないだけだ。本当にみんな良い人たちだ。

口コミやらなにやらの評判が世界を駆け巡った。地元やら全国紙の旅行雑誌

の取材なんかも殺到した。実際に体験した人の記事なんかが掲載された。

フロント係りは一時期一向に鳴り止まない電話に対してこっちに文句を言ってきたが、いくらなんでもそれくらいなれて欲しい、普通の旅館はそれくらいやる。

長期滞在者が旅館の部屋を埋める。延長するものもある。あとで丁寧な

ありがたいお礼状が届いたりする。アルバイトが何人か追加された。みんななかなかいい感じの人たちだった。仕事もそんなに難しくない。

ただ、お客の要望に対してできるだけ融通をきかせればいい。マニュアルはない。

人として普通に親切にすればいい。簡単だ。ちゃんとわれわれの趣旨を引き継いでく

れている。彼らもそのうちに革命を起こすかもしれない、わからない。

そしてわれわれの任務は完了する。完璧だ。ハイタッチだ。

われわれが辞めることに対して、家族や新しい同僚から疑問や引き止めの言葉が

あった。そんなことは口で説明できることじゃないし、もう初めか

らそんなことは

決まっていたことなのだ。でもともかくありがとう、体に気をつけてといわれた。

最後の給料にはありったけのお札が詰まっていた。銀行振り込みじゃない、手渡しだ。

ありがたく頂く。なんだか涙が出てきそうだった。われわれは実に良くやった。

そしてわれわれは最後の飲み会を私の部屋で開く。もう会う事はないことは

お互い良く知っている。ふたりともまだ発展途上なのだ。旅は続く。最後の最後のしんみりした夜だ。われわれはちよっと値のはるワインのコルクを

抜いて、乾杯した。うらぶれたこの汚い部屋で。それはおそらく次の革命軍が改善してくれるはずだ。たぶん。

「まあ 寂しいけど、楽しかった 元気でな」と彼は言った。あとが続かない。

私は駅で、先に彼の旅立ちを見送った。私のいく方向は逆だ。どっちだっていいのだけど

そういうことにした。また草の中を駆け抜ける風の音が聞こえる。

恐ろしいほどの孤独感が私を襲う。風景と実に見事にマッチしてる。予想通り。

いったいなんのための革命だ？ 風の音が聞こえるだけじゃないか？ どうしてどうして私はこんなに考える時間が必要としているのだ？

「さて、どこにいくのか？」 と私は言った。旅の途中なのだ。行く先ぐらいきめなくてはいけない。電車が来るまで私がなにを考えていたのかは今となつては

思い出せない。なにはともあれ さよなら たのしかった げんきで

030

私はねこを膝にのせる。パソコンの電源を入れる。データ入力用のMIDIキーボードをセットする。うちの奥さんが後ろでスタンバイしている。作曲だ。

6畳の部屋の真ん中に机がある。ソニーのノートパソコンがある。音楽用のプログラムが開かれている。前にはEDIROLのMIDIキーボードがある。

ノートパソコンの左右に小さなモニタースピーカーがある。とりあえず電源は入っていない。

私はふかふかの回転椅子に座っている。私は裸である。何もつけない。決まりだ。

ねこを膝の上に載せる。ねこがこっちを向いている。イノセントな瞳を浮かべる。

決まりだ。奥さんは私を細長い布で私の目を隠す。奥さんもなににもつけてない。裸だ。

決まりだ。部屋の小さな窓を閉め切って、分厚いカーテンで光を遮断する。

キャンドルをひとつだけ小さな林檎型のグラスに入れてあたりをほのかに照らす。

ノートパソコンの画面が光っている。奥さんがソニーのヘッドフォンを私の耳にセットする。

プログラムはエレクトリックピアノをすぐに鳴らせるようになってる。決まりだ。

奥さんは私の頭上を3回右の手のひらで軽く叩く。合図だ。

ここからは私はなんにも考えてはいけない。なんにも想像してはいけない。

なんにも言ってはいけない。なんにも怖がってはいけない。でもそれはなかなか難しい。

そうするたびに奥さんは私の意識の中で容赦ない罵声を浴びせる。

ひどい言葉で

私の心をずたずたに引き裂く。ことごとく私が無力なひとりのちっぽけな人間だという

ことをひっぱたいても何してもいいから強制的に理解させる。決まりなのだ。

奥さんが私の背後にある奇妙な形をした椅子に座る。なんでも代々家に伝わる

ものらしい。魔女にもいろいろなパターンがあるらしいが、どうやら彼女の場合は

ほぼ遺伝として継承されている。もう100代を越えているらしい。意志を引き継いで

いる。昔はヨーロッパ人だったけど、ある時、誰かが日本人と結婚したらしい。

必ず女の子が生まれる。女系だから姓名はばらばらだ。うちの奥さんは外見は

完全な日本人だ。もちろん遠い昔の話だ。ヨーロッパにも遠い遠い彼女の親戚は

どこかで存在しているはず、ということらしい。結構な割合で双子

が生まれる。

奥さんは私の頭を両手でそつと押さえる。水晶でも持つみたいに。あたりはしんとしている。この部屋はかなりの高いレベルで防音されている。

とびきりのポリウムでデスメタルを聞いたって苦情はこない。

目の前は暗いのだがやがてほのかに小さな星のような光る粒があちこちに現れる。

なにも考えてはいけない。「しつかり前を見る！」と奥さんが怒鳴りつける。

私の意識の中で怒鳴りつける。実際の音ではない。

突然、すーと頭からなにか濃度の濃い空気の中をすり抜けるような感覚が起こる。

「臆病者！ー」彼女が怒鳴る。どうしたってこの瞬間はちょっと怖い。いつも怒鳴られる。

気づくと私は海の底のような世界の中にいる。やけに濃い水の色だ。ほんのすこし

青の絵の具で着色したような濃い水の色だ。海の底で私は立っている。

緩やかな波が全体を歪ませている。心の動きと同調している。ここにくるには

私の世界の果てを越えなくてはならない。世界の果てのずっと向こうに世界の中心が

ある。つまりは位置と時間の関係がひとつひとつの小さな感情やら思想やらと

繋がっていて、ひとつが全体となり、全体がひとつとなったりする。全体を包む殻を

意識的に破壊することによって、それは自由を得たひとつの塊となる。コップに水を注ぎ

続けるとやがて水が溢れ出すみたいに。蟬が脱皮するみたいに。塊はより大きい

箱を求める。やがて塊は現実という名の空気との境界線で摩擦しあい、新たな皮を得る。

新しい箱の完成だ。それが現実の私にとってよいことかどうかはわからない。だれも

答えることは出来ない。ただひとつ言えるのは。わたしがそれを強く漠然とでも

望んでいるということだ。自分の身を身代わりにしてでもそこにいったらどうなるのだろうか？

という純粋な好奇心を私はとめることが出来ない。普段は別にやかましくもない

奥さんに狂おしいほどずたずたに罵倒されても。普段は素敵な奥さんなのだ。本当に

魔女だろうがなんだろうが、普段は彼女も普通の女性だし、普通に素敵な夜を過ごすし、

われわれはきちんと快適な共同生活をしている。かわいいの娘たちもいる。猫もいる。

好きな音楽でなんとか家族を養うことも出来ている。余計な仕事はすべてキャンセル

しているから他の音楽家より稼いでいるわけでもないけど、ありがたいことに不自由ない。

娘たちにIPODを買い与え、奥さんのあまりまともと思えないインテリアの趣味に

お金を出すことくらいのは出来る。ゆつくりとソファに寝ころび夕日を眺める

時間があればいい。私はそもそもそんなに欲しいものはない。私自身の中にある

なにかに興味がある。家族が大事だ。そこにはもちろん私自身もいる。

他人のようになるなんて卑怯だ。きちんと自分も含まれるのだ。自分のとっておきの

いやな性格さえも。ベ이스ターズも、IPODも。

「右足を一步前に！」僕は右足を前に出す。

「違う！両手を上にあげるのよ！ちゃんと聞いているの？」そして両手をあげる。

「さっさと右足を元にもどしなさい！」奥さんは私の意識の中で罵声を浴びせる。

私は右足をさげる。理不尽なのだ。強烈に。決まりなのだ。

「またなんか考えてる！私の言うことが信じられないの？」と怒鳴る。

そんなことない。でもわずかなエゴが私のこころの片隅で小さく騒いでる。

頭でわかっていても、心で把握できていないこともある。そこをすらどく突かれる。

「私のこと愛してないの？ちゃんと左足を前に出しなさい！」

「口ではえらそうなこといってもなんにもわかってないんじゃない？そんなのは子供でもわかることなのよ！ほら右足をあげなさい！」

わかっていても言葉はわたしに重くのしかかる。なにかの影がかす

かに揺れる。

涙がぼろぼろとこぼれてくる。わかって欲しい、私は彼女を愛している。

「ほら！目をつぶるのよ！何度やったらいわれなくても出来るようになるのかな？」

やる気あるのか！ぼけ！」それに答えてはいけない。思ってもいけない。

ひたすら受け入れるのだ。受け入れるほかない。どこにもいけない。例え理解できなくても

受け入れるほかない。そういうものなのだ。結果をみてはいけない。ステップパターンを

なんとなく漠然と直感的に理解すればいい。視点の角度によって物事とはがらつと

印象を変えてしまうものなのだ。平面で物事を捉えてはいけない。本当の美とは

360度どこからみても魅力的なものであふれているものだ。中心に原動力のコアがある。

形とは中心にあるコアが増幅されたものだ。現在進行形でそれは形を変えていく。

中心は全体に含まれ、全体は中心に含まれる。

「両腕を横に！」そう彼女が言ったとたん、いつものごとく地面が落ちる。

砂は少しずつ下方にずり落ちていく。これもかなり怖い。でも言うてはいけない。

命取りになる。いつでもどこでも落ち着き払ってなくてはいけない。そう心から

信じるほかない。人は結局のところ多大な努力をしたところでだれも本人の安全を

保障してくれるわけではないのだ。巨大な分厚いコンクリートの上に立っていても
小さなネジをはずしただけで、簡単に崩れ去ってしまうものなのだ。
小さなネジが
すべてを支えている。もちろん現実には崩れないと思うけれど、これはたとえだ。

結局、最終的に人は神様だとか仏様だとかアラアの神とかなんだっ
ていいけど
強い信仰の対象が必要なのだ。自分の純粋な好奇心を信じるしかない。

祈るほかない。なにもない。考えても無駄なのだ。無限ループだ。

砂は舞い落ちる。轟音があたりに響く。わたしは両手を広げたまま
この濃いブルーの
水の中を浮かんでいる。なにも考えるな、無条件で降伏しなさい。
心の中心に
ちいさなちいさな原動力のコアのみをのこして。忘れなさい。あなたの恐怖は
あなたの安全を保障しない。その小さなネジをはずすようなものだ。
してはいけない。

しばらくにも聞こえない真剣に残酷に超現実的な孤独の中を浮か
んでいる。
わたしの体はすこしずつ水に溶けていく。濃いブルーはだんだんと
薄くなっていく。
ほとんど透明にちかい色へと変わっていく。だんだんと夕日は沈み、
やがて
完全な夜になるみたいに。すべてはわたしとともに真っ白になる。
完璧ではない。

かすかな色が残っている。時間の感覚が失われる。位置の感覚が失われる。

なんにも疑問に抱いてはいけない。そういうものなのだ。決まりだ。

気づくと私は裸のまま椅子に座っている。ねこも奥さんもここにはいない。

キャンドルがあたりを照らしている。パソコンの音がだんだんと聞こえてくる。

現実に戻るのだ。プログラムには新しい生まれたてのアイデアが入力されている。

ただのメロディーと和音がエレクトリックピアノによって自動演奏される。

悪くない。ここからは私の仕事だ。これにしかるべき編曲をつけ、この曲に

もつともふさわしい名前をつける。名前は大事だ。その曲が一生抱えて生きていく為の

大事な名前だ。どんなによいメロディーを作ってもそれを聞く私自身に聞く耳がないと

意味がない。宝は宝にならない。私は何度もそれを繰り返して聞く。なんとか

それを立体化するのだ。良い美とはそうでなくってはならない。それには多くの

経験がものを言う。耳と直感の解像度を意識的に広げる訓練をしないではいけない

そんなに難しいことでもない。よいものに耳をかたむけていればいい。いつも。

この作業が長い時間続く。孤独な作業が続く。私は奥さんが用意してくれた服を

着て作業にとりかかる。サンドイッチとか、いろいろな作業しながら手軽につまめる
ものが置いてある。ワインが置いてある。私はそれを用意されたグラスに注ぎ
チーズがはさんであるサンドイッチをひとつつまみ、ワインを一口飲む。

しばらくは非日常的な時間が流れる。もちろんいつもこんな時間を過ごしていたら
頭がおかしくなる。ささやかな日常を支える為に非日常的な時間がある。

非日常的な時間のために日常を犠牲にしない。当たり前だ。頭がおかしくなる。

さあ、仕事だ。

私はやって来た2両編成の電車に乗り込む。席はがらがらだ。地元
の人はあまり電車を
利用しない。車の方が便利だからだ。まだ地元の学生がやかましく
占拠もしてない。
観光客もまだまばらだ。良い気分だ。私は適当な席に座る。さて、
どこにいく？

電車は山の中を進む。ゆつくりと。あんまりスピードを出せるよう
な環境ではない。
天気の良い日だった。しかし季節は涼しい風を用意していた。シャ
ツ一枚では
少々肌寒い。おそらくもう二度と見ることもない景色がどんどん過
ぎていく。
巻き戻している。さて。どこにいく？

思いつくままに私はそれなりに大きな街の駅で降りる。小さな街で
はなにもかも
騒がしくもてなされる温泉旅館しかない。そういうのはお断りだ。
空間だけでいい。

私は適当なビジネスホテルでとりあえず三日間の宿泊を申し込む。
問題は無い。

部屋はちゃんと空いていた。ありがたい。

古びた鍵を受け取る。安いホテルだ。特に問題はない。そういう目
的ではないのだ。

荷物をこじんまりとした机に置く。リュックサックとギターケースだ。

私はほとんどの時間ギターを弾くこともなかったけど、まあ、持っていた。重い

わたしはそのまましばらくベツトに寝転がり天井をぼけつとみつめる。

天井をぼけつと見つめても答えなんて出ない。天使も降りてこない。でも天井がないと

雨が降ったら大変だ。やすらかに寝ることは出来ない。必要不可欠だ。どこのホテルにもある。

ひとしきり時間が過ぎる。相棒はいつたいどこにいったんだろう？隣の部屋にいるかもしれないけど、それじゃどこにもいけない。笑い話にもならない。

もちろん元気でいて欲しい。どこかでまた革命を起こして欲しい。今度は自分自身の為に。

旅館はきつとなんのかんのいってそれなりに楽しくやっていくだろう。心配ない。

こうして寝転がる以外になにも思いつけない。情けないけど適当に今はやり過ぎすしかない

いつもいつも目的が明確に完全に用意されている人生よりはましなはずだ。それはハードだ。

わたしはCDウォークマンをバックから取り出しザ・カーディガンズを聞いた。

このところずっとこればっかだった。90年代はこのバンドが一番だ。素敵なギターだ。

しばらく聞いてからわたしはギターをケースから取り出し、しばらく

く一緒に

リフをコピーして弾いていた。多少難解なテクニックが必要だけどまあ、暇だ。

そしてギターを弾くのを止めてベットの横に置いた。そしてしばらくそのこわれそうな

ボーカルを聞いた。バンド全体がゆるい、下手と言えば下手だけど、心地よい。

何事も腹八分目くらいがいい。気合の入った音がうっとおしいこともある。

なにかをゴージャスに付け足すより。多少心細くともなにかを抜いた方がよい場合が多い。

さあ、わたしはこれからしばらくの間、暇を買うのだ。お金を払って暇を買うのだ。

わたしはわたしになるのだ。今はなんにも肩書きがない。もともとそんなものはどこにも

存在しない。名前がないと整理がつかないからしょうがなくついているだけだ。

音楽ジャンルと同じだ。全部ごちゃまぜにされるとレコードショップの店員がどうやって

たくさんCDを並べていいのかなくなる。新しいルールが必要になる。

でもそれも、本当は存在しない。ややこしい話だ。無限ループだ。私の頭が一番の問題だ。

わたしはたばこに火を付けた。お金はある。しばらくは贅沢してもなくっても

ともかく働かずに過ごせるお金がある。ありがたい饒別だ。結婚式の引き出物みたいな

ものを持たされるより5億倍ありがたい。でもわれわれは頑張った。しばらくの間
不自由しないくらいのお金を受け取るくらい価値のあることをやり遂げた。
もちろん、オーナーも素晴らしく気が利いていた。ありがたい。

わたしは風俗にもいかないし、パチンコもしない、競馬もやらない、昔つきあいで
ごくたまにマージャンをしたくらいだ。たまに不思議がられるけどしょうがない。性格だ。

しかもあんまりテレビもみない。野球しか見ない。しかし趣味がない。

音楽は好きだ。作ってるくらいだし。でも趣味のレベルをとくに超えている。

音楽は、わたしをうらぶれた旅館やら、忙しいレストランやら、夜の川辺やらに
無意識的に引きずり回す。よくわかんないけど、黙ってついていくしかない。暗い。

わたしは時々、音楽とはなんだ？というどこにもいけない問いかけをする。

ある日にはそうだ！とか一瞬思うこともある。明日には意見が変わる。常に変わる。

飽きっぽい性格だ。広く浅い考え方をする傾向がある。より複雑に進化する。

自分がもたらす記号をすべて集めたらなにかわかるかもしれないと思っただけもある。

名前、出身地、誕生日、血液型、生まれた病院、両親の性格、祖父
母の性格、
育った家の間取り、生まれて初めて言った言葉、どんな子だったの
か？

生まれてからいままでの写真、小学校の成績、受け持ちの先生の
率直なコメント、
好きな科目、嫌いな科目、毎日どんなものを食べてきたかの記録、
趣味、

金銭感覚、付き合った女性の数、その傾向、今まで出会ったすべて
の人のわたしに対する

率直なコメント、身体的な成長の記録、病歴、虫歯の数、通院歴、
職歴、学歴、

今までに描いた絵、披露した歌、楽器演奏、作文、演じた役、運動
会の成績

今までいったところ、今まで購入したすべての商品、読んだ本、聞
いた音楽、見た絵画、

いったコンサート、映画、演劇、旅行にいったところ、きりがなし、
ともかくすべて

すべてをそろえたらわたしの人生も一冊の分厚い本になるのかもしれ
ない。膨大な

ビデオの数にもなる。ある学者は欲しがるかもしれない。あと10
0年も経てば

貴重な民俗資料になるのかもしれない。今はきつと役に立たない。
自分のためにはならない

そんなの见ている時間がない。きつとページをめくる気力もない。
あとが続かない。

いつもいつもくだらない妄想やら勝手な仮説やらなにやらが頭を支

配する。

わたしは起き上がって服を脱ぎ、シャワーを浴びた。ドライヤーで簡単に乾かし

服を着て、バックを背負い、鍵をかけ、エレベーターでフロントまでいき、

鍵を預けて外出した。時刻は午後3時を過ぎていた。

街はなかなかにぎやかだった。もう学生達も授業が終わったらしい。観光客もいる。一目でわかる。わたしは本屋を探していた。なかなか見つからない。

わたしはふらふらとゆっくり歩いてまわった。暇なのだ。そして暇をお金で買っている。

本屋はあるスーパーマーケットの3階にあった。CDショップの横にあった。

そこでわたしは適当にいろんな本を選び、それをレジに運んだ。カバーはお付けしますか？

と店員は言った。私は断った。20冊くらいあった。店員はありがとうございました。

と言った。20冊もカバーを付ける作業は大変だろうな。私はそういうことには妙に

気を使う。全部で1万2000円だった。重い。いくつかをバックにしまった。

全部は入りきらなかった。まるで登山にでもいくみたいになった。本当は登山にでも

行くべきなのかもしれない。でもいかない。そんな気分じゃない。

CDもなんか買おうかと思ったけど、やめた。重い。また今度にすればいい。暇なのだ。

近くの喫茶店に入った。わたしはアイスコーヒーとサンドイッチを頼んだ。

とりあえずたばこに火をつけた。アイスコーヒーが運ばれてきた。店はそんなに

混んでなかった。わたしはそういう店を選んで入ったのだ。アイスコーヒーは

そんなに重要な目的ではない。そういう視点を見逃すと商売は大概失敗する。

変わった味のするアイスコーヒーがエキセントリックに増えるだけだ。宇宙の崩壊が始まる。

とりあえず適当に一冊手にして読んでみた。わたしは熱心な読書家ではない。

若いときにまとめて読みまくっていた時期があつたが、最近は忙しくって読む暇がなかった。

ご近所のおばあさんの肩を揉んだり、エキセントリックな飾りを片っ端から取り外す

のに忙しかったのだ。今がチャンスだ。暇だから読書をする。立派な理由だ。

わたしはアイスコーヒーのストローに口を付けたり、文字を読んだり、サンドイッチを

つまんだり、ストローに口を付けたり、文字を読んだり、食べ終えた皿を眺めたりして

ひと時を過ごした。そうしているうちに少しずつ店内が騒がしくなっていた。

わたしは本をバックにしまい、店を出た。外は薄暗くなっていた。夕方だ。

別の店でスパゲティ・カルボナーラと野菜サラダを頼んで食べた後、

お酒の売っているお店に入り、簡単なつまみとウオッカとグレープフルーツジュースを買った。それを強引にバックにしまい、ホテルに戻った。

部屋についているラジオをつけて、ベッドの上で楽な格好になり、寝転がって

本の続きを読んだ。ライトは薄暗くしておいた。眠気がある。思えばハードな一日だった。

昨日まで、わたしはあの旅館で忙しく抜本的構造改革を一切の妥協を許さず実行していた

のだ。当然だ。疲れている。今になって気づいた。でもとりあえず本を読む。

なかなか面白かったのだ。しかし早い時間にわたしは寝ていた。起きたら

午前3時だった。灯りはそのままだった。照明を落として真っ暗にした。

のどが渴いたので買ってきたジュースを飲んだ。そしてまたベッドに戻った。

まだ寝たりない。しばらく真っ暗な天井を眺めて、そしてまた寝た。

起きたら朝の9時を過ぎていた。曇り空だった。良く寝たようで、寝てないような

そんな目覚めだった。微妙な気分だ。とりあえずなんにも計画も義務もない。

落ち着かない。何事も慣れるには時間がかかる。でももうあの旅館にいた事実が

遠い過去になっていた。ものすごい遠い昔の出来事に思える。微妙な気分だ。

わたしはとりあえずシャワーを浴びた。髭を剃った。髪が長くなっ

ていた。

わたしはなんにも持たずホテルを出て、適当なところで簡単な朝食を取り、

床屋さんに行った。あんまりセンスの良い髪型をしている理容師でなかったけど

まあいいや、そもそもわたしもたいしてセンスも良くないし、髪質も良くない。

普通に切ってくれればいい。多くを望んでいない。あきらめている。

ラジオで誰かが誰かの人生相談をしていた。旦那が働きもせずパチンコばかり

していて、いっこうにまともになる気配がないらしい。ふたりの子供もいる。

小さなアパートで暮らしていても、奥さんのパートだけではなかなかきついらしい。

どうしてそんな人と結婚なんかしたんだろう？わたしはまだ独身だからよくわからない。

きつとわたしの知らない様々に入り組んだ複雑な理由があるのだろう。

そういうものなんだと思う。けど確信がない。知らない分野に対して、どこかと

強引に割り込んでいって、無責任に、適当に定義づけてむちゃくちゃな結論を

言うのは私は良くないことだと勝手に思っている。でも少なくともわたしはその家の

子供になんかなりたくないと思う。ご飯くらいきちんと食べさせて欲しい。

育ち盛りなのだ。

わたしはレジで3000円を払ってお礼をいって店を出る。全然手

持ちのお金が
減ったような感じが無い。ありがたい。まだしばらくはばけつと出
来る。

いつものことだか仕上がりには不満がある。でもそれは理容師のせ
いじゃない。

わたしの髪質に問題があることくらいはすでに承知している。
もう20年も床屋に通っているのだ。だれでもわかる。無限ループ
だ。

適当に街を歩く、ゆつくりと歩く。昨日来た喫茶店に入って、今度
はホットコーヒーと
そしてサンドイッチを頼む。たばこに火を付ける。禁煙したいなと
思う。不健康だ。

別に取り立ていいところもない平凡な喫茶店だし、コーヒー
は2種類しかない。
ホットコーヒーとアイスコーヒーだけだ。でも落ち着く。いろいろ
理由がある。

まだ、一人という現実にくまなく染まってないんだと思う。頭が現実
に追いつていない。
ともかくコーヒーを飲む。わたしは誰にも人生相談なんかしたくな
い。でもわからない
ことがたくさんある。でも誰も的確な答えを出せないと思う。しば
らくはだまって
本を読むくらいの事しか出来ない。考えうる限り、それがベストな
答えだ。

レジで清算をする。コーヒーは350円で、サンドイッチは500

円だった。

わたしは1000円だしてお釣を受け取った。お礼を言って店をでた。

わたしはそのようにしてしばらく朝遅めに起きて、ホテルを出て、どこかで朝食を取り

コーヒーを飲み、ホテルに戻って本を片っ端から読み漁り、飽きたらギターを弾いたり

音楽を聴いたり、禁煙に挑戦したり（とりあえず成功する）どこかで夕食をとり、

何日かごとにホテルを移り、駅前のベンチで鳩を眺めたり、とにかく暇な日々を過ごした。

どうしても集中出来なくて読めなかった本もあったけど、大体は読んだ。

小説でも実用書でも自己啓発書でも音楽家の自称伝でもノンフィクションでもなんでも

読んだ。内容は見事にばらばらだった。足りなくなったら本屋に行つてまた適当に

選んで読んだ。暇を買うために。まあ、人生たまにはこんなことがあってもいいと思う。

そんなに悪い気分でもなく、なかなか現実に戻りたくないと思うくらいに楽しんでいたし

今まで散々身を粉にして働いてきたのだ。たまにはいいだろう。

そついう生活が三ヶ月以上続いた。微妙に財布が心細くなっていった。

さて、、、、、、憂鬱が夕方を駆け巡る。本を気楽に読めるような雰囲気はない。

わたしはとある町でアパートを借りて、近くのタフな工場で働くこととなった。

032

仕事が一段落つく。もうおおかたの形は完成した。ワインも空いてしまった。
つまみも空だ。腰が痛い。頭の中も空っぽだ。もうなにも出てこない。

軽く背伸びをする。腰を回転する。なにはともあれ、この曲はいずれしかるべき
時期に公開する。楽しみだ。なかなか出来が良い。我ながら大絶賛だ。

部屋のカーテンを開ける。窓を開ける。もう外は真っ暗だった。何時だろう？
空いた皿を重ねて左手に、瓶とグラスは右手に持ち、ドアを不器用になんとか開けて
階段を下りる。リビングではうちの娘たちと娘の幼稚園の同級生でお隣りの
よしのぶ君がテレビの前で野球を見ていた。いつもの光景だ。現実に戻ったのだ。

よしのぶ君は大のジャイアンツファンだ。もちろん父親がファンなのだ。

名前の由来は聞くまでもない。よし君といつも呼んでいる。でもわれわれは

ライバルだ。今日の試合は巨人対横浜なのだ。そういう日はいつも私の

ポジションをよし君が埋める。両手に花と言いたいところだが、現実にはタフな

ベ이스ターズガールズに包囲されている。火花が舞い散る。だけど一応仲が良い。

あんまり幼稚園に熱心に野球を執拗にワイルドに観戦する園児は少ない。

普通の親はそんな風に教育しない。でもわたしはした。悪い親だ。

「いらっしやい よしくん」 ご挨拶する。いらっしやい

「あ、おじさんこんばんわ」 丁寧な挨拶する、礼儀正しい。

ジャイアンツは6対4で勝っていた。よしくんにこにこだ。うちの

こは

執拗にジャイアンツの悪口をステレオ状態でよしくんにぶつける。

しつけが悪い。

でもよしくんはなかなかめげない。タフだし今年のジャイアンツはなぜか強い。

いつもの喧騒の中、私はキッチンで皿を洗い、かごに立てかけておいてグラスを

洗い、ワインの瓶をゆすぎ、しかるべきところに置いた。明日は瓶の回収日だ。

私の与えられた仕事でもある。うちの家事は分担制だ。子供もお皿洗いくらいはする。

いろいろ家事を子供にも与える。そのかわりipodも与える。テ

レビの前で馬鹿騒ぎもする。

私はリビングに戻り、奥さんと並んで座って、しばらくちびっこ軍団の成り行きを見つめる。

こういう時の奥さんはそんなに機嫌が悪くない。結局のところ寂しいだけなのだ。

私だって四六時中、ベイスターズのことばかり考えて生きてるわけでもない。

別に見せてもらえなくても騒いだりしない。子供との交流に半分目的がある。

奥さんに仕事の進み具合を報告する。彼女はにこつと笑う。さつきまでの激しい彼女はもうどこにもいない。いたら困る。しばらくは勘弁だ。命はひとつしかない。

村田が逆転スリーランを打った。ステレオツインズのボリュームが上がる。

私も控えめにガッツポーズを取る。よしくんは頭を大きく振る。一番して欲しくない

展開なのだ。こつちとしても一番からかいやすい展開だ。娘たちの言葉が踊り始める。

よしくんは原監督のピッチャー起用法に対して文句を言い始める。

細かい指摘だ。5歳児

とは思えない。彼のパパもたまにうちに来てみんなで観戦するのだが、おんなじことを言う。

遺伝じゃない。教育の賜物なのだ。よしくんママさんも来る。一家で仲が良い。

しかし、隣のママさんも野球に興味がない。よって後ろの厳しい顔

が2倍になる。

厳しいふたつの顔がお茶を囲んで楽しそうに愚痴を言い合う。複雑な表情だ。

無言のシンパシーをよしくんパパと投げ合う。いずこも同じ秋の夕暮れだ。ビールが進む。

たいがいはいひとりですくくんは来る。というかうちの子たちが半ば強引に連れ込んでくる。

結局は楽しんでいるだけだ。よしくんは多少臆病なところもあるがなかなかナイスガイだ。

ジャイアンツのファンていうとこだけが彼の最大の欠点だ。彼は上原投手のファンだ。

私はお茶でもものむかい？と奥さんに聞いた。ありがとうと言う。お茶を用意する。

よしくんにも聞く。なんかのむかい？ マコがすぐに目でよしくんに確認する。

よしくんがうなずく。マコが3人分のお茶を用意する。たどたどしくクールに。

マコはすこーしよしくんのが気に入っている。わたしは知っている。誰でもわかる。

3人はまるで家族のごとくお茶をすする。少し年の取り方を間違えてるような気もする。

妙なところが大人っぽく、妙なところがやっぱり子供だ。面白いといえど面白いけど、

子供は大人の目を楽しませる為に生まれてきたわけじゃない。教育は難しい。

われわれももちろんお茶を飲む。我が家はコーヒーよりお茶の方がシエアが大きい。

これは奥さんの教育の賜物だ。彼女はあんまりコーヒーは好きじゃない。

彼女が今度みんなで野球見に行こうか？と言った。めずらしい提案だ。

いいね、とわたしは言った。隣も誘ってみよう。あんまりテレビだけの観戦も

良くないと思う。大賛成だ。教育上よろしくない。

そしてひとしきり仕事についての具体的なお話をしたり、今度ある国際魔女倶楽部の

会合について話した。そういうのが世の中にある。彼女はその日が近づく

頭の中がそればかりになる。楽しいのだ。国際といっても日本人しかない。

10人くらいしかない。3ヶ月に一回、順番で自宅を会場にする。うちにも

魔女たちが押し寄せたこともある。大変だった。私はつまみを用意し、お酒をくばり

足りなくなったものを買出しに行く。ウェイターになる。経験上、それは

得意とする分野だけど、誰もおしゃべりに夢中となって私がこのご主人であることすら

気にかけない。誰もが少しずつ体の中に溜まってきた魔女的ななにかを吐き出す。

もちろんきついことがあるんだと容易に理解できる。でも普通の奥さんの会合と

どこも変わらない。しかも激しい。うちのむすめたちもこの日ばかりは一味違った

雰囲気醸し出す。子供はうちだけだがきちんとそこに違和感なく

溶け込んでいる。

たいしたものだ。そしてひととおりボルテージがあがるとカラオケとかボーリングとか

そついうところに流れていく。私は運転手となる。みんな飲んでい
るから運転できない。

3ヶ月に一度だし、みんな本当に楽しそうだから別にいいんだけど、
国際魔女倶楽部

という名前から想像されるような雰囲気はなにもない。そこら辺の
主婦の集まりと

変わらない上に、そこら辺の主婦よりかなりワイルドに盛り上がる。

そして家に戻るまえに私は所狭しといろいろな部屋に布団を敷き詰
める。

帰ってからまだまだまだワイルドにタフに盛り上がる。団体ツアー客
のそれをはるかに

ワイルドに越える。もちろん朝食も用意する。みんなより遅く寝て、
みんなより早く

起きて、ご飯をたいたり、お味噌汁をつくったり、玉子焼きなんか
作ったりする。

ワイルドな朝食風景が眼下いっばいに広がっている。たいがいの人
間は立派に

二日酔いだ。はてしない宇宙だ。来年のうちの番の時にはわたしは
アルバイトを雇おうかと

思うくらいワイルドだった。でも雇えない。これは国際的に重大な
機密事項なのだ。

雇うにはCIAだとかFBIだとかそういうところにいるいろいろ調べ
てもらわないと駄目だ。

そんなことするくらいなら、わたし一人が努力すればいい。ほかに
良い案が浮かばない。

「今度は佐々木さんのところですから。9月の第一土曜日ね、またそこに泊まってくるからよろしくね」と彼女はにこにこして言った。

世の中は広い。狭いようで広い。私はうなずいた。一度、佐々木家旦那と電話で

話したことがある。一瞬で言いたいことが理解できたことがある。テレパシーみたいだった。

ゲームセット。しかしジャイアンツは逆転に成功していた。上原投手がそれをクールに締める。

「うえはらなんて、だいいいいいいきらいだー！」とミコが叫ぶ。

いつものことだ。よしくんがなれたしぐさで偉そうにふんぞり返って

ふたりを軽く見下ろした後、家に帰った。そういうのはジャイアンツファンじゃないと

身につかない。おやすみなさい、おじやまりました。とよしくんはわれわれに言った。

礼儀正しい、よしくん おやすみなさい 夢で原監督が渋い顔をしていますように

うちの奥さんが私の頭を軽くこずいた。よくわかっている。テレパシーだ。

そしてそして、9月の第一土曜日、3人とねこは国際魔女倶楽部に行く。

ねこにもかわいい水色のリボンが付けられる。なんだか嫌そうにも見える。

でもねこでも事をしっかりと理解している。なんだか賢く見える。頭が下がる思いだ。

奥さんは黒を基調としたドレス。むすめたちは白いドレスを身に着ける。

知らない人が見たら結婚式にいくのだと思うだろう。なんとなくフリートウッドマツク

みたいな雰囲気だ。私は記念にデジタルカメラで写真を一枚とる。優雅にポーズを

とる。いつもはロックンロールの洗礼を受けた娘たちもどこかしら誇らしげで

よい上品な緊張感を保っている。うちの奥さんは腕を組んで勝ち誇った表情を

私にアピールする。これが正しい姿なのだ。正しい教育のあり方なのだ。

といわんばかりの表情を浮かべる。テレパシーだ。悟りの境地だ。

ネコをキャリーバックにいれる。奥さんがそれを持つ。特にたくさん荷物を

持っていない。ワイルドな集会にあんまり荷物は必要ない。この日ばかりはIPODも禁止だ。

今日は奥様ごの上品なクラシックスタイルデーなのだ。クラ

シカルにお酒をあおり

クラシカルにワイルドな話はずみ、クラシカルなカラオケ大会で盛り上がる。

クラシカルなボーリング大会でストライクをだしてクラシカルにガッツポーズを取る。優雅だ。

ひさしぶりにひとりになった。思えばうちはあんまりお出かけしない。

してもいいんだけど、うちの家族構成的にあんまりニーズがない。

本当はデイズニードとか行けばいいんだけど、今度行くところは横浜スタジアムだ。

ミッキーマウスの代わりを佐伯選手がしてくれる。ドナルドダックのかわりに

ホッシー君がいる。完璧だ。隙がない。崎陽軒のシウマイ弁当で乾杯だ！

寂しい。悪くない気分だけど、寂しい。

ずっと昔は寂しいなんてあんまり思ってた。ひとりでもうまくやってきた。

でも気づいた時には横に奥さんがいて、ふたごのおんなのこが生まれた。

でももうあの頃には戻りたくない。今だっているいろいろ考えてしまうことがあるけど

ちよつとその種類が違う。幸せなのだ。私は家族を愛している。特殊な

関係だけど、うまくやっている。あの頃は想像すらできなかったけどなんとか父親らしいこともちゃんとやれている。と思う。いや、やっつてる。

感傷的だ。これもなにもかもクラシックでワイルドなスタイルのせいだ。

しばらく、さつきデジタルカメラで撮った画像を眺めていた。

無言になる。テレパシーだ。悟りの境地だ。フリートウッドマックだ。

034

毎日毎日毎日、残業が続く。いったい日本はどうなっているのだ？

私はとあるタフな工場で働いていた。朝からとか、昼過ぎからとか、夜中からとか

特殊に入り組んだ勤務体系の工場で働いた。しかも労働はかなり単純で、私のような

どこの角度から見ても全然理系でもない人間でもすぐに出て来る仕事だ。

眠い。お客様の前だと緊張が続くから、多少夜更かししても眠くはならないけど。

眠い。睡眠不足は危険だ。けがをする。私は睡眠をしっかりとることを心がける。

でもお客がいないのは楽だ。自分のペースで仕事ができる。給料も悪くない。

私はアパートを借りて、パソコンを買った。ADSLを引いてインターネットをはじめた。

音楽機材もそろえた。ネット上には様々な情報が満ち溢れていた。しばらく

それに夢中になっていた。音楽を気軽に発表できるサイトの存在を知った。

時代は変わる。より線が短くなり、より高速に、コンパクトになる。

私はタイミングを見計らって夏休みに作った最初の楽曲を発表した。特に時代をリードし、熱狂的な反応を期待できる曲ではないけど。まあ感慨深い。

私は楽曲の製作を繰り返し、タフな工場ですっと同じ動作を繰り返した。

少しずつ私の評判は上がり、なんとなくの予感として結構いいポジションを

とれるのでは？という漠然とした感覚を持ち続けた。タフな日々が続く。

ひどい工場だった。どんどんスピードは加速していく。何年か過ぎていた。

漠然とではなく、明確にずっとここにいたら体を壊すだろうという思いがあった。

私は生活をコンパクトにまとめた。無駄使いが多すぎる。コストミニマムだ。

貯金、貯金とつぶやきながら働いた。音楽の方はなかなか順調だった。

いずれまとまった貯金が出来たら、ここを辞めてまた集中するべき

ものに
集中するのだ。30過ぎてそれはなかなかきついがやるしかない。
そもそも、もう修復不可能なストーリーを歩んでいる。しかたがない。

なんとか1年くらいは食べていけそうなくらいの金額をためることが出来た。

しかし疲れた。運動不足のせいかお腹が出てきた。健康状態が非常によろしくない。

辞めるべき理由がたくさん出てくる。もう少しだ。チャンスを伺え。

ここは経済効率至上主義社会のもっともホットなスポットだ。みれば私にもわかる。

どんどんぐるぐると回転してやわにされる。タフにしてないとつけこまれる。

真面目に働くと回転が速くなる。だからだれも必死にそれに抵抗する。無駄な抵抗だ。

上司は常に効率至上主義社会の正しき理念を胸にタフな計画をたてる。

蟻地獄だ。同じ格好をさせられ、名札の装着が義務づけられる。ノルマと目標がある。

しっかり管理されている。疲れたらわざとでも故障するしかない。

病院が休憩所だ。

私も相当やわになっていたけど、一切無視するほかない。タフに無視をするのだ。

でも確信がもてない。毎日毎日、同じメッセージを反復させられるというのは非常にタフで

確実な教育だ。洗脳だ。きっとそういう効率至上主義社会的プロパガンダ手法というのが

確立されているに違いない。悲しいけどそれは強力だった。だれかが台本を書いた。

私のスケジュールはぎっしりと詰まっていた。普通じゃない。

こんなのはふつうだよ、どこでもそうだが、うちよりひどいところもある

失業するよりかはまし、今月はいそがしい、そして来月も、だからがんばりましょう 残業代でかせがないと、贅沢いえない 土曜日でれる？

メッセージがこだまする。頼みもしないのにあちこちで聞こえる。プロパガンダだ。

機械音がおおしく鳴り響いている。毎日休むことなく。プロパガンダだ。

週休3日制、一日6時間労働がいいとかほざいたのは見事に私だけだった。

当たり前だ。みんなタフなのだ。笑われたけど、本人はなかなか本気だった。

コストミニマムだ。その願いが却下されるのならタフを演じながらハードに

コストミニマムするほかない。そうした。そしてチャンスは訪れ、一応、円満に退社することとなった。3年目の秋のことだった。

願いは叶えられた。それだけがここで働く原動力だった。神はわれを見捨てなかった。

このコストミニマムなアパートで、装備で、私は私自身と向き合うことになる。

思ったよりタフな時間だった。働いていた方がいいかもしれないと思うようなタフさだった。

035

肌寒い10月の終りの夜だ。

しばらくはなにも考えなくなかった。ともかくなんだか健康状態が悪い。非常に悪い。

体を休めることが先決だ。なにもかも放っておいた。いろいろなと会社にトラブルがあって何人かの同僚も一緒に辞めた。私にとっても

彼らにとってもそれはラッキーチャンスだった。しばらくは祭りの後の空白を

みんなでしんみりと埋めていた。そして私以外はこの土地を去った。

私はちょっと生真面目過ぎるところがある。そして生真面目にタフである。

箱が狭い。防衛能力は国家レベルだが、攻撃能力に乏しい。塀が厚い。

信仰が足りない。

人は内側からくる自信が乏しいと格好が派手になる。

声が外に大きくなる。無駄な知識をたくさん集めて、それを自分のまわりに積み上げる。

一見賢そうに見えるが目は怯えている。怯えがさらに知識を要求する。ルールを

他人に強制する。偏見に市民権を強引に与え、権威の身分階級を作る。団体を操り
自身を隠匿し虚像を増幅する。自身が生み出す増幅された虚像と自身の隙間を

を恐怖心と無知が埋める。団体は増幅された虚像が生んだ妄想の砦の中で

歪んだ社会という名前の市民権を与えられたある誤解の集約に向かってヒステリックに叫ぶ。

わかりやすい敵を強引に作ることによってより団体の砦が大げさになる。

ヒステリックな攻撃部隊が誕生する。世間の目が冷ややかになる。でも発展する。

それは信仰を高める。しかし、その信仰を高める最大の原動力は、権威が持つ

隙間に埋められた恐怖心だ。それを強引に理屈に価値変換する。権威が毎日それを

復唱し、それを団体にも義務付けることによって、よりその妄想が強化される。

その権威が巨大化しているようにみえる。錯覚をおこす。幻想が加速していく。

世界の果てににいることを理解できずに彷徨う団体がもたらす潜在的な苛立ちが

さらに加速度を高める。頭の回転が鈍くなる。権威なしに自分を正当化できない。

団体は外を憎み、権威の階級をあげる。権威に依存している。権威も団体に依存する。

依存レベルを上げる為に権威はどんどんでっち上げた神話を作成する。

それが団体を熱狂させる。熱狂が権威を熱狂させる。どんどん加速して

熱狂の無限ループが生まれる。台風みたいだ。もうそれは止まらない。

権威もそれを拝む。みんなで拝む。初めの一步が思い出せない。もう元には戻れない。

それはたんなる薬物中毒者だ。

自分自身を見つめる。冷静に、クールに、非常に、タフに、コストミニマムに。

日々、私は思いついたことをノートにまとめたり、ネットでわからない言葉を調べたり

きちんと長く睡眠をとり、部屋を掃除したり、散歩したり、音楽のきいたり

本を読んだり、きちんとした食事をとったり、ともかくいろいろした。ともかく

部屋が汚かった。せめてだれかが突然訪ねてきても恥ずかしくないくらいの

部屋を維持しなくてはいけない。ふとそう思った。

ずっと天井を見ていたりもする。かえって余計な知識を身に付けるよりかは

天井でも眺めていた方がずっと真実に近いかもしれない。そういう考えもある。

なぜか音楽製作はストップしてしまった。音楽的思考が停止している。

あせりもあるのかもしれないが、今はそういう時期じゃないのかも

しれない。

やりたくなったらやればいい。

体の方は大分よくなっていた。毎日体重を測り。それなりの運動もした。

結局のところわたしは根源的な思想を模索している。自身が心から信仰できる

思想を模索している。外にはない。明らかだ。スタイルが必要だ。

コストミニマムな思想がいい。あらゆる内側にある思想たちが重なるスペースを探せ。

最大公約数だ。自己のカオスの中にローカリズムとグローバリズムを見い出せ

頭でわかっていても出来ないこともある。でもそれは子供がピーマンを嫌がるのと

まったく一緒だ。そういうのから逃げてはいけない。子供でも出来ることだ。

日々、わたしは本当にいろんなことを考える。時間が無邪気に過ぎていった。

畑からどんどんにんじんやらナスやらピーマンやらぶどうやらが出てくるのと一緒にだ。

きりがない 髭剃りと一緒にだ。

さあ、食べてもらおうか。

わたしはありったけのピーマンを軽く塩コショウで炒めたものをたっぷり

テーブルにのせた。ミコとマコの向かいにわれわれは座った。

泣き叫ぶミコとマコ。

わたしはあらゆるピーマンデーターをインターネットとかで調べた。以前ピーマンを送ってくれた親切な若い業者さんからいろいろとピーマンにまつわるあらゆるお話を電話で聞いた。世の中には実にタフにいろいろな見識にあふれかえっている。宝の山だ。

というわけでももちろん本能的に子供が苦いものが苦手なのはわかるが、

その恐怖を乗り越えないことには成長しない。強引かもしれない、

が、

うちの奥さんから理解を得た。魔女としてもそれでは困る。教育上よろしくない。

泣き叫び続けるミコとマコ。

「佐伯選手だってピーマン食べるからホームランたくさんうてるんだよ」私は言う。

さえきはそんなにホームランをうたない、とマコが簡単に裏切りを表明する。

5歳であんまり選手の成績を把握しないで欲しい。

「バリーボンスは3歳でピーマンを食べたんだよ、だからホームランキングだ」

とわたしは嘘をついた。そんなこと知らない。本人だつてたぶん知らない。

うそだー！ー！ー！とミコが叫ぶ。それはたしかに嘘だ。うそはよくない エコーだ。

われわれはとりあえずピーマンをおいしそうに食べてみる。もちろんわれわれはピーマンが嫌いなわけではない、最上のものを用意した。実においしい。

海原雄山にも認めてもらえるかもしれない。

「おいしいよー！ー！ー！とうちの奥さんが優雅にフリークに言った。

宴会の余韻がまだ残っている。クラシカルにワイルドな表情だ。両手をパタパタさせてる。

いったいそれはなんの表現なのだ？

そんなにおいしいならなつとつたべてみるー！ー！ー！とマコが叫ぶ やばい。

現実逃避のための頭脳がフル回転している。その時、私のなにかがパチンとつぶやいた。

「食べる」

わたしはそういつて、しずかにじっとクールにむすめたちの目を見て黙った。

沈黙が続く。長い間。むすめたちは目をそらさない。奥さんもそれに続いた。テレパシーだ。

「食べる」　奥さんが言った。今度はコストミニマムにクラシカルに。

沈黙、むすめたちはこの新しいパターンに戸惑っている。

沈黙、ふたりは目を合わせる。

沈黙、

なにかを決めかねている。まるでお見合いみたいだ。こっちが照れる。

趣味ならもう知っている。ベ이스ターズだ。あとが続かない。

ふたりの手に箸が握られる。

もうすこしだ！　がんばるんだ！　心の中で応援するぞ！

口には出さないけど 信じてほしい！ 口に出してはいけない。決まりだ。

ふたりはついにそれを口にした。 苦そうな顔をする もう一息だ。本能的な恐怖を乗り越えろ！ 今がチャンスだ！ 今なら30パーセントオフだ！

ふたりは二口めを食べた。 ふたりの顔からなにかの緊張がほぐれていつているのがわかる。

どのみちいつかはピーマンを自然に食べる日がくるんだろうけど、これは直感的判断だ。間違っているのかもしれない。でも乗り越えて欲しい。二人ならそれが出来る。

「ぱぱ」とマコはなんだかちょっと怒った様な顔で言った。

「どうした？」と聞く。

「まえのピーマンときょうのピーマンはぜんぜんあじがちがう」とマコがクールに分析した。

「ぱぱのりょうりがまずかったんだ！！」「ミコがさけぶ ものすごい結論だ。

でもあってないこともない。ものすごくわたしは研究をしたのだ。ピーマン評論家になれる。

「そうだな、ぱぱがわるかった。これからはおいしいピーマン出す

よ！」とわたしは言った。

「ぱぱ」とミコが言った。

「なに？」とわたしはいった。ふたりは顔を見合わせて笑った。
素敵な笑顔だ。

「こんどはぱぱもママもなつとつたべるばんだ……！」とふたりはいった。

それとこれとは話が違う。納豆とピーマンは種類が違う。えーとなんの種類だ？
うちの奥さんもそんな顔している。テレパシーだ。ふたりは勝ち誇っている。
まあいいや、ピーマン食べてくれたし、苦勞が評価されてないだけだ。結果オーライだ。

「こんどはぱぱもママもなつとつたべるばんだ……！」

とふたりはくりかえした。情けない両親だ。教育上、実によろしくない。

037

黙ってじつと耳をすませる。冷静にクールにミニマムな視点を持て！

私は日々、激しくもあり、落ち着きも求めた。原動力のコアを振動させる！

今まで知らなかったことが毎日いろいろな方向からやってくる。私は本当に無知だった。

なんとういか勉強は楽しい。無目的に広い範囲の勉強だけど。楽しい。

私はなにかを強烈に誤解しているのかもしれない。仮説だ。わからない。

混乱はしているが、あらゆる考えは独立して動いている。カオスだ。ひとつになれない。信じるのだ。圧倒的に。壁は破れる。

ひとつにならなくていい。様々な考えや感情を無理やりまとめなくってもいい。

認めればいい。自己とはインドカレーだ。口にするときは一緒だけど、

あとで独立したスパイス群がそれぞれを主張する。インドカレーだ！しかもうまい。

人生とは一瞬にしかない。ボールがヒットするその瞬間にしかない。うまくいかないときはスリーアウトチェンジだ！。あとが続かない。

ボールがヒットしたその点から巨大な宇宙が増幅されるのだ。宇宙が完成される。

ヒーローが生まれる。ヒーローには惜しみない拍手を送らなくってはいけない

それは社会の最低限のモラルだ。社会が繁栄する。しかも感動的だ。

日々、私は意味不明な哲学者になっていった。どこか飛んでる。フリークアウトだ！
タフに言い続ける！ フリークアウトだ！

季節は夏が近づいていた。季節感のない生活が続く。私は野球からなにかを学ぼうという試みもたくさんした。単に試合がみたいという方便でもある。

世界とはボストンレッドソックスだ。ティム・ウエイクフィールドのコントロールにすべてが託される。デイヴィッド・オルティズがそれを見事に拡大させる。一振りで。

ジョナサン・パペルボンが勝利のシャンパンコルクをゴージャスに抜く。乾杯だ。

勝利のダンスがフェンウエーパークをラウドに揺らす。

みんなみんなディスティニーズチャイルドだ。惜しめない拍手が世界中に響き渡る。

それは社会の決まりだ。でも感動的だ。マニーラミネスがそれに応える。

夏の終わりに、私は彼女と出会ったことになった。

038

大変なことが起きた。よしくんが誘拐された。9月のある金曜日、

午後4時の事だ。

隣の奥さんはすぐさま旦那に連絡をした。でも恐ろしく長い通勤時間を必要とする会社に勤めていたし、不幸なことに電車はどこかのおかしな

人間が付近の高圧送電線の鉄塔に登り、もしもの為に電力供給をストップした為、

電車が動かず、有楽町の駅では多くの会社員が怒りをあらわにしたり、携帯電話

をガンガンならしたり、メールを打ったり、あきらめ顔でその辺を彷徨ったりしていた。

恐ろしい数のタクシーが待ち受ける。人々が列を作る。駅員は対応に追われる。

そんなことはおこるべきではないのだ。でもおこる。よし君パパもそこでメールを

打ったり、頻繁に携帯電話を鳴らした。当たり前だ。非常に苛立っている。

彼は他の交通手段を必死に模索していた。息子が誘拐？信じられない。

みんなと苛立っている。だれも彼の息子が誘拐されているなんて気づかない。当たり前だ。

隣の奥さんは非常にうるたえていた。完璧だ。警察に電話をしたほうがいいのか？

判断が出来ない、なんとなくニュータイプな誘拐だ。身代金は145万円。

別にすぐ用意できる。貯金もある。旦那の給料は悪くない。しかし額に

なにか切実な想いを感じる。せつなくなるような金額だ。しかし手が込んでる。

下手に動いたら本当に殺されそうだ。普通は1億円くらい用意せるもんだ。

世間の常識ぐらいきちんと守って欲しい。社会が混乱する。法律上よろしくない。

ニュータイプだ。旦那もうまく事態がのみこめない。奥さんは切れてるし、

どこかコミカルなニュータイプなのだ。理解できないし、良い返事も電話じゃ難しい。

奥さんはうちにやってきた。旦那には今頼れないし、もう普通に座ってられない。

隣の奥さんはドアのチャイムを鳴らした。わたしがとてもイノセントにドアをあけると

今すぐ壊れそうな涙が止まらない彼女を見る事になる。大変なことが起きたのだ。

なんとか、わたしは彼女をリビングに通した。そしてお茶を用意する。そんな場合でもない

けど、ともかく少しクールダウンしないと話が見えない。ニュータイプなのだ。

事件は近くの公園で起きた。無邪気に公園でよくんは遊んでいた。同じ幼稚園で近所のさゆりちゃんとゆうたくと3人でボール遊びをしていた。

よくんはいつも子供用携帯電話をもっていた。さすがジャイアンツファンだ。

ちよつとしたよくんの自慢だった。メールは打てないけれど、親のメールアドレスがそこに記録されていた。機能はついている。文字入力がまだできない。

3人は30代位の一見普通の男性3人組にまるごと有無言わずワゴン車に押しこまれた。

お金に非常に現実的に困っていた。大学を出たのはいいが、ろくな就職先がなく

非常に単純な労働を余儀なくされていた。3人は以前の職場で出会い、お互いの不幸を

慰めあい、彼女もいなく、町外れのちいさな一軒家を3人でシェアしていた。

3人ともほぼ無職状態だった。頭も働きも全然悪くないが情熱がない。

生きる目的を会社にまるごと依存するタイプだった。どこにもいない。

男軍団は、よくんが携帯をさゆりちゃんに見せているのを見た。

3人で近くの

パチンコヘワゴン車に乗って行く途中だった。ひとりの男の頭のなかでパチンと

なにかが言った。

男軍団は話し合った。誰かがそれはやばいだろーともちろんいったけど、

サラ金から借りた借金返済をパチンコに賭けるといった案よりかはましなのかも

しれないと思った。なにしろ3人で100万近くサラ金から借りている。

あさってまでに結構な金額を振り込まなくってはならない。所得もない。信用もない。

非常にまずい。親にも借りられない。半分勘当状態だ。変なプライドもある。

役者はそろった。神様はなんでもうまいことかき集めてくる。男軍団は携帯電話なんかもってるよしくんにひそかにカチンときてたりもした。嫉妬している。そんなの教育上よろしくないと憤慨している。社会の諸悪源だ。おまけにさゆりちゃんは美人だ。

道具とはイノセントに多くの誤解やら象徴やら記号やらをもつ可能性を秘めている。

心のあり方がその視点の角度を左右する。ジョー・トリー監督だ。

うまいことに公園にはよし君たち以外いなかった。そういうものなのだ。余計な役者を

そろえたら予算が足りない。照明係りも大変だし、衣装代もバカにならない

コストミニマムだ。現代っばい。ポストモダンだ。脇役を与えられた息子の母親が

怒鳴り込んでくる。複雑な世の中だ。笑ってごまかすしかない。予算が足りない。

予算がたりないからジョン・トラボルタに出演を依頼出来ない。しようがないから

賃金の安い役者に頼むしかない。お金に困った人たちが喜んで悪役を引き受ける。

男軍団はうまいことひとりひとりの口をうまく押えて黙らせた。そしてワゴン車につっこむ。

携帯電話にだれもが夢中だ。さゆりちゃんもゆうたくんもうつとりだ。そこをうまく

押えた。みんなこれもあれもそれも携帯電話のせいだ。みんなが携帯電話を拍手で

迎える。スタンディングオベーションだ。上原投手もお手上げだ。携帯のメールアドレスをメモして電源を切る。それをどこかに車の窓から投げ捨てた。法律違反だ。モラルがない。

小さなストーリーを携帯電話が拡大させる。より複雑に絡ませる。役者が多くなる。

予算が足りないのだ。これ以上役者を増やさないで欲しい。税金が増えるばかりだ。

拡大されたストーリーを支える為に人々はどんどん忙しく複雑になる。忙しくてだれも

この映画をゆっくり見にくることも出来ない。子供と遊ぶ時間が無い。ねこだけが元気だ。

男軍団は町外れの一軒家（まわりにあまり民家が少ない）に3人をつれこみ、

そこら辺にあるきたないシャツだのなんだのでうまく家の柱にしばりつけ

口をふさいだ。目をふさいだ。大声を出したら殺す、と何度も脅した。教育上よろしくない。

もうすこしちゃんと部屋を掃除して、綺麗なシャツとかで縛り付けて欲しいもの

だが、文句は言えない。小道具の予算が足りないのだ。汚いシミのついたシャツだろうが

ビニール紐だろうが、埃っぽいバスタオルだろうがなんだろうが、再利用しなくては

いけない。環境にも優しい、コストミニマムだ。道具とはイノセントに多くの可能性を

秘めている。心のあり方がそれを左右するのだ。デレクジターだ。

もちろん、よしくんもさゆりちゃんもゆうたくんも大声を出せず心で泣いていた。

恐怖で顔がひきつる。当たり前だ。まだ5歳児だ。うちのこならピーマンで十分だ。

われわれは納豆で十分だ。だれにも弱点はある。

言い出した張本人はにやりと笑い、アイディアを誇らしげに話す。デジタルカメラで彼らの残酷で非常に不清潔で環境に優しい哀れな姿をおさめる。

それをどっか遠いネットカフェから、よし君ママの携帯メールアドレスに

この写真を添付して脅迫状を送ればいい。金額は少なめでいい。145万円だ。

警察に言ったら殺すといって、われわれのネット銀行の架空口座へ今日中に

振り込ませるんだ。確認がとれたらすぐにおろしてひとり15万ずつわけて

ここから消えよう。借金を返してわれわれは自由となるのだ!! 完璧だ。

どこか抜けてる。でも熱狂した。彼らはたまにネットオークションで詐欺を

繰り返していた。うまくすり抜けた。そして一人が車で遠くのネットカフェにいった。

メールを受け取ったよし君ママは、最初はなんかのスパムメールだと思って危うく

削除しそうになったが、なんとなく、それは開かれ、添付ファイルを開く。

固まった。まるで現実感のかけらもないスパムメールみたいな内容だけど、

百聞は一見に及ばず。写真は事件の状況を超簡単にコストミニマムに表現していた。

わかりやすい。うちのこがロープで縛られている。目を疑った。

写真はよくくんだけが把握できるようにうまく写されていた。他の2人が誰だか

わからない。責任を感じる。ものすごく感じる。それが余計にパニックを誘った。

隣の奥さんはわれわれにその写真を携帯ごと見せる。その時、うちの奥さんの頭の中で

なにかがカチンと開いた。出番だ。ここは私が取り仕切る。この世に悪は通させぬ。

彼女は時代劇のファンでもある。銭形平次フリークだ。世の中にはいろんな人がいる。

テレパシーだ。わたしにはわかる。なんといっても夫婦なのだ。奥さんの目の色が変わる。

カチンとかわる。隣の奥さんもそれをぴりっと感じる。目がぼかんとして

背筋がシャキンと伸びる。うちのおくさんは表情を変えない。不思議な空白がしばし流れる。

わかっている。セレモニーはワイルドにゴージャスに行われなくてははいけない。

彼女は主演女優のひとりなのだ。予算はこっちにまわさなくってはいけない。

そうじゃないと劇は様にならない。お客がブライディングを始める。主

役を奪われた

娘の父親が大声で怒鳴り込んでくる。そういうものだ。笑ってごまかすしかない。

「よしさんの着ていた服をひとつ持ってきてください」と奥さんは有無言わずといった

感じで言った。だれも逆らえない。銭形平次の参上だ。寛永通宝が悪を裁く。

隣のおくさんはしばらく固まっていたが、動いた。彼女の手元に台本がない。

アドリブでどうにかこなすしかない。バッターボックスにたったら誰でも

ヒットを打つ努力を始めなくてはいけない。審判がせかす。ピッチャーは寺原投手だ。

なんとか隣のおくさんは立ち上がり、無言のまま、半ば放心状態で家に戻った。

でもなんだか奇妙だけど、なんだか頼りがある。事が動きそうな漠然とした

予感を感じる。うちの旦那が帰ってきて、たぶんふたりでおろるするだけかもしれない。

漠然とした直感と世間の常識の間を彼女が彷徨う。正しい選択をしなくてはならない。

その間にうちの奥さんはその場でさっきまで着ていた服を脱ぐ。ブラジャーもパンツも。

私は知っている。わたしは用意した黒いドレスを彼女に与え、脱ぎ捨てたものをさっさと

しまった。そんなのよその人に見られたくない。夫婦とは実に奇妙

だ。

そして、わたしは火打石を用意して、彼女に向かって3回打つ、決まりなのだ。

魔女の伝統じゃない。彼女の個人的な趣味だ。ではわたしは気をつけて、という

彼女はにやりと笑う。主演女優には予算を惜しまない。でも趣味がとんでる。

いったいどんな少女時代をすごしてきたのだ？

そしてリビングのオーディオセットの電源を入れ、CDを一枚取り出す。

バッハのヨハネ受難曲が高らかにムードをいやらしく盛り上げる。

照明を

薄暗くする。私は舞台裏の大道具兼、小道具兼、音響兼、照明兼、衣装係りなのだ。

脚本、主演は彼女の仕事だ。神様がスポンサーだ。人事もこなす。でも予算が厳しい。

隣のおくさんが戻ってくる。そして固まる。当たり前だ。彼女の台本がない。

でも、思い直おす。もうとっくに理解を超えたなにかに巻き込まれている。判断できない。

ソファーに座り、遺留品をうちの奥さんに差し出す。もうまるごとおまかせだ。

それをうちのおくさんは鼻に近づけて、匂いを嗅ぐ。おまえは警察犬か？

彼女は目をつぶる。しばしつぶる。わたしと隣のおくさんはそれを

じつと見つめ、
事の展開を待つ。顔の表情を誰も変えない。ねこがやってくる。呼ばれたのだ。
テレパシーだ。

「マコとミコを呼んできて」　とうちの奥さんが言った。わかっている。テレパシーだ。

わたしは二階にあるふたりの部屋をノックした。ちいさな返事がある。出番ですよー。

ふたりは相変わらずIPODだ。最近はいりーミノーグが大好きらしい。

でもいろいろ聞くし、もうあらゆるジャンルを詰め込んである。教育だ。

ふたりのイヤフォンをはずしてわけを話す。彼女にも試練が与えられる。

魔女の実地訓練だ。失敗は許されない。きちんと背筋が伸びている。さすがだ。

ふたりは理解している。親子なのだ。ふたりは一旦お互いの顔を見つめ合う。

そして、ふたりは着ている服を放り投げる。わたしがそれを片付ける。

そのままクローゼットを開けて、そこで一番クールな服に着替える。そして、IPODを再び耳に装着する。必要不可欠なアイテムだ。ロックンロールだ。

そしてわたしはむすめたちにも火打石を3回ずつ打つ。魔女の伝統

じゃない

うちの奥さんのたんなるわがままだ。余計な仕事を増やさないで欲しい。人手が足りない。

「じゃ」とマコが言う

「気をつけて」と、わたしはふたりをリビングに連れて行く。

うちのおくさんにふたりはウインクをする。奥さんがにこっと笑う。ねこがふたりに向かって、とぼとぼと歩いていく。赤いリボンを巻きつけられている。

ねこはこないかにも私はかわいいこねこちゃん的な飾りは嫌いらしい。でもつける。

観客がそれをゆるさない。ねこちゃんがあんまりにも貧相でかわいそうだ！虐待だ！

たいがいねこはそんなこと気にしない。生きてくだけで精一杯だ。もちろんねこにも火打石を3回打つ。本当にどうにかして欲しい。これじゃ、ワイルドなカラオケパーティーだ。ボーリング大会だ。

隣のおくさんは相変わらず無言で放心している。台本がないのだ。舞台もワイルドだ。

わたしはまとめて洗濯機に脱ぎ捨てられた服を突っ込む。舞台裏はいつも忙しい。

「あと一時間したら、警察に電話してください。そしてここに現金を運ぶようにいわれたと嘘をついて、警察とそこにいつてください」

とうちの奥さんははつきりときっぱりと言った。そして細かい住所をメモに書き込み、地図を広げて確認した。そんなに遠くない。もち

ろん

地図もメモもボールペンもみんな私が用意した。舞台裏は忙しいのだ。

隣のおくさんは黙ってうなずいた。ようやくうちの奥さんは彼女に對して

やさしく微笑んだ。音楽を止める。照明が現実的になる。場面は転換する。わたしは忙しい。

となりのおくさんはとりあえず地図を何度も何度も確認して、地図を拝借して

何度も何度もお礼を行って立ち上がった。ここまできて道に迷ったら致命的だ。

それじゃコメディーだ。でも警察がいるから大丈夫だ。警察が迷ったら笑うほかない。

みんなで笑ってにこにこだ。それじゃコメディーだ。でも警察がいるから大丈夫だ。きりが無い。

となりの奥さんが家を出て行く。

そして、ミコとマコとねはすでに近くまで来ていた。テレポーテーションだ。

魔術の使用が許可された。めったにないことだ。わくわくする。でも普段やったら

うちのおくさんに死ぬほど怒られる。5歳にしては大変だけど、そうしないと

社会がおかしくなる。5歳でもそれなりのきちんとした誇りを持っている。

さすがだ。携帯電話とはレベルが違う。道具の扱いには細心の注意が必要なのだ。きちんと大人は子供にそれを教えるべきなのだ。教育上よろしくない。

きたないきたないうらぶれた一軒家の裏庭に進入する。たいした大道具だ。リアリズムだ。

IPODをセットする。なんといってもミュージックは必要だ。誰かが発明した。

ミコはディスティニーズチャイルドのサバイバーを選曲した。気合が入っている。

マコはモニカ&ブレンディーのザボーイズマインを選曲した。私情が入っている。

さゆりちゃんに嫉妬しているのだ。そういう場合じゃない。

透視をおこない、中の様子を伺う。よしくんたちは部屋の奥にある柱にくくりつけられていた。非常に子供らしく怯えているし、疲れきっていた。無言だ。騒いだら怒られる。

男軍団は反対側の汚い部屋にある小さなテーブルにノートパソコンを開いて

3人で食い入るように見ていた。背を向けている。何度も何度も振込み確認の

画面にアクセスして、確認ボタンをクリックした。たまにエッチなサイトも覗いたりして

コミカルに盛り上がっていた。そんな暇があるなら部屋を片付けて欲しい。

致命的に汚い。そんな部屋に気の利いた女性は訪れない。女性はいつもパソコンのなかだけで

微笑む。誘拐でもしない限り訪れない。女性は誰もが主役になりた

い。
脇役を与えられた本人が怒鳴り込んでくる。ラジオの人生相談で怒りをぶちまける。

笑ってごまかすしかない。社会が混乱する。部屋が汚いのだ。致命的に汚い。

確かに、この世の多くの男の部屋は汚い。私だってそうだったこともあったし、

今だって人に威張れる資格もなんにもない。しかし汚い部屋というのもいろいろある。

世の中には訪れた女の子が文句をいいながらも楽しそうに片付けはじめちゃったり

するような部屋が存在する。綺麗にカジジュアルに母性本能を刺激する汚い部屋というのが

あるのだ。たぶん。そういうのを誰かが発見してデーターを集めると一冊の本になる。

”女の子にもてるかつこいい散らかし方マニュアル”という題名の本が書店に並ぶ。

書店のレジにそれを差し出すのはなかなか恥ずかしい種類の本だが、ヒットする。

アマゾンに注文が殺到する。こんな本を買うのは致命的に汚い部屋を維持する人間だ。

ちゃんともてる男は概にそれを無意識にやっている。そういう人はそんな本買わない。

何人かはその致命的な部屋からきちんとした汚い部屋へと変換し、

もてたりすることもある。

わかりやすい神話の誕生だ。ベストセラーになる。マスコミがそれを面白おかしく取り上げる。

女性評論家は嫌そうに楽しくそれをあざ笑う。どっかポイントがズレているのだ。

私は男だからわからんけど、そんなのはまともな女性なら誰でも知っている。

そういうことじゃないのだ。でもそれにインスピレーションを受けた誰かが

新しい言葉を作り出す。便乗商売だ。”ダンディーにクールな汚い部屋”とか

”コミカルにハートフルな汚い部屋”とか、”ミニマムでポストモダンな汚い部屋”とか

いろいろな言葉が生み出される。そういうのを研究する専門家たちが現れ、どれが本質的に

一番の女の子にもてる汚い部屋なのかを大声で議論する。テレビがそれを中継する。

かつこいい男性アイドルの部屋をおとずれ、そのかつこいい汚い部屋を紹介する。

ファンがうつとりする。専門家が総動員でその部屋をきちんと汚くしたのだ。さすがだ。

それはちゃんとかつこよく汚くなる。たいしたもんだ。もてるきちんとした汚い部屋

という言葉が市民権を得る。マスコミがそれを何度も復唱して築き上げたのだ。

女性用にも本が出来る。”もてるきちんと汚い部屋男から結婚を申し込まれる女性の100の

条件”という本だ。男が惚れる上手な片付け方というのが出来る。さりげなく嫌がられないように

ソフトに文句をいいながら片付け、そのままありあわせで簡単な夕食なんか作っちゃたりする

ハートフルにアットホームな自分をアピールするやり方が主流だ。うまいこと男を誘導し一緒に

片付けて共同作業をしながらお互いを理解しあう、エデュケイショナルにせめる片付け方とか、

ベットにぞんざいに腰をおろし罵声を浴びせてなにもかも指示をして男に全部やらせる

ハードなタイプとかもある。あるいはなんにもせずにそのままセクシーに迫る方法なんてのもある。占いが出来たりする。結婚相談所のプロフィール用紙に好きな汚い部屋のタイプとかを書く欄が出来たりもする。私の好みはダークでエキセントリックな汚い部屋が好みとか

個性をだすものもある。女性誌がその特集を組む。ハートフルにアットホームでなおかつ

エデュケイショナルな方法でピースフルに男を操る上手な片付け方マニュアルというのが掲載される。写真やら絵などで上手にわかりやすく表現されてたりする。あなたの性格にあう汚い部屋のタイプという占いも出来上がる。生年月日やら血液型やら星座などで調べるとあなたに一番しっくりくる部屋はセンチメンタルでソリッドな汚い部屋とか出たりする。

何人かはあたってーとか言ったりする。男が好む片付け方アンケートなんかに掲載される。

かっこいい芸能人が好みの片付け方なんかを言ったりする。いろいろ出てくる。そういう台本がある。

本を読んでも一向にもてる気配のない脇役が怒鳴り込んでくる。マ

スコミがそれも

取り上げる。イノセントに無意識的に女の子にもてるきちんとした汚い部屋を維持している男に

向かって、脇役がひねくれた表情で叫ぶ。 ” あいつは女の子にもてるためならなんでもする

軽い男だ！ ” とのしる。自分が一番その努力しているのを思いっきり棚に上げる。

しかし、祭りが最高潮になって全然関係のないおばさんなんかまでなんか言うようになって、

一気に下火になる。結局はブームなのだ。 お祭りなのだ。 真剣に参加する方がおかしい。

でも終わらない人がいる。 もてるきちんとした汚い部屋をもつイノセントな男に

向かって、執拗に攻撃の手を止めない人もいる。 俗物として祭り上げるために。

自身を相対的に正当化する。 複雑な世の中だ。 様々な偏見をその言葉に投げ込む。

でもまともにもてる男には知識ではなく知恵がある。 そんなもんいくらでも作る事ができる。

やかましいから、もてるきちんとした汚い部屋をもつ男は自分の部屋を、より奥の深い

アンダーグラウンドでコストミニマムにアンコンシャスなもてる汚い部屋へと変換する。

ますますもてだ。 ゆたかであそび心がある。 粹だ。 並の人間にはまねが出来ない。

様々な様式や理論や実話や嘘や細分化や分類やらをシリアスにコミ

カルな男がぐるぐる回る。

自分に自信がないのだ。誰かの台本にすぎるしかない。いろんなところに文句をつける。

自分たちが作り上げた俗物認定という記号から攻撃される。マスコミが彼らを

俗物認定する。言い返せない。羞恥心がこだまする。やがてかれらはそれをあきらめ

自分たちが俗物であることを認める。けど、こりない。かれらはアンダーグラウンドな

地下組織を作り上げ、タフでマニアックな致命的に汚い部屋同盟を作り上げる。

俗物正当化市民運動だ。認めることによって、自傷することによって、開き直る。

その市民権を得る為のアンダーグラウンドなイベントを展開する。マスコミが

またそれを取り上げる。無限ループだ。話が長い。話が長いのは誰のせいだ？そう私のせいだ。

いったいなんの話だ？

そうだ思い出した。致命的に部屋が汚い。部屋をかたづけろ！

文明を維持するというのは部屋をきちんと掃除するということだ。

しないとどんどん自然に戻る。くもやらねずみやらなにやらがきちんと腐敗させて

長い年月をかけてそれは自然に戻る。部屋が汚いと警察が来る。国家がそれを許さない。

きちんと刑務所にいれて、ただし部屋の片付け方講習会の参加が義務付けられる。

そうじゃないと社会が混乱する。長い話だ。タフに意味不明だ。致命的に部屋が汚い。それが問題だ。

そついうのをみると文句やら自分の意見やらが止まらなくなる。きりがないのだ。

どこにもいけない。まるごと無視するのが一番いい。教育上よろしくない。

ねこをこっそりよしくんのもとに送り込む。汚い壁をすり抜けていく。

ねこだっていやがるような部屋だ。コストミニマムだ。赤いリボンが余計だ。

ミコとマコはその様子をじっと伺う。ねこがゆっくりよしくんのもとに近づく。

そしてゆっくりとよしくんの目隠しを少しずらし、乱雑に巻き込まれた汚い

ビニール紐を外していく。よしくんが気づく。もちろんネコのことには知っている。

” しいいしいー！ ” ミコがよしくんの意識の中で叫ぶ。よしくんはびっくりする。

” ミコちゃん？ ” よしくんがきよろきよろする。どこにもいない。

” そう、とにかくだまれ！だまれ！ ” ミコが強制する。教育上よろしくない。

” どこにいるの？ミコちゃん？ ” ふたたび泣きそつになるよしくん。

” いいからおとこならだまってゆつことききな！ ” マコが叫ぶ。私情が入る。

そんな場合じゃない。

マコも続く、ピーマンの件でしっかり学習しているのだ。成長している。

ジャネットジャクソンのリズムネーション1814がかかっている。

”おまえなんかそんなんだから　いつもくどくにさんしんばたばたとられるんだ！

くやしかったらうつてみる！このうすらごとくだつやろう！！”

マコがいう　私情がはいつている。そういう場合じゃない。

”くどくはもときよじんだよーー　くやしくない”　正論だ。

”まったくまがかかるな！！！だからおまえのあたまはへんてこりんで

たこみたいなあたまなんだ！！おまえのあたまなんかいかだ！まぐろだ！

かんづめにでもなっちゃえーー！！！！”　ミコがいう　よくわからない。ロツクだ。

”でも、、”　動揺している、いったいなにがどうなっているのだ？

”だからいつもおまえはいつもゆうたくんにやきゅうでまけるんだ！

このへなちよこばったーめ！くやしかったらうつてみる！！

マコがいう　いつもそれを眺めている。

”、、、、”　よしくんはなにもいいかえせない

”やーい！やーい！なにもいいかえせない！このうすらつちぎべんだんやろう！

くやしかったらかんづめになってみる！おまえなんかはまちだ！たらこだ！！さばのみそにだ！

ミコとマコはお互いの顔を見合わせた。もう少しだ。落城は近い。天下泰平はもうすぐだ。

”さけべえええええええええー！！！！！！！！”　ミコがいう

”ないちゃえええええええええええええええー！！！！”　マコがいう

そのとき、よくんの頭のなかのなにかがぱちんと言う。目隠しを自分の手ではずす。すつと立ち上がる。ロープはねこがすではずした。バカどもを睨み付ける。

そうだ！その調子だ！さすがジャイアンツファンだ！。上原投手の登場だ！

つないでいたのはよくん自身なのだ。

その頃、家の玄関付近に隣の奥さんと警官がたくさん隠れていた。奥さんの心臓はもはや破裂寸前だった。まるでドラマみたいだ。でも現実だ。

このストーリーは奥さんの心臓にもかかっている。心のあり方がそれを左右する。

デレクジーターの出番だ。

汚い小さな一軒家の前で、警官は様子を伺っている。もちろん透視

なんて出来ない。

出来たら社会問題になる。でもプロだ。いろいろなノウハウがある
庶民の知らない、奥の深いテクニクがある。職業に対するきちん
とした

責任感を持っている。ハードな世界だ。ハードじゃなかったら大変だ。

社会の根底が揺らぐ。コストを省けない。予算はきちんと分配される。

” いろいろ――――！！！！！！
 がつう。
 ふたり

” に | | | | い
い
い
い
い
い
|
! ! ! !
の | | | | ! !

!! ”

さー——あぁあぁあ
んんんんん！！！！

「あああああああああああああああああああああああ
!!!!!!!!!!!!!!

ああああああああああああ！！！！！！！！」

やった よしくんがさげんだ！！！ 男じゃないか！ 手間がかか
ったけど

さすがジャイアンツファンだ。東京ドームがおおいに揺れる。札幌ドームもびっくりだ。

その瞬間、警察は突入を試みる。奥さんは狂いそうになり頭をぐしゃぐしゃにする。

その瞬間、ミコとマコは物体操作術を始める。最後の締めだ。寛永通宝が悪を裁く。

越後屋も悪代官も誘拐犯もエッチな動画も致命的に汚い部屋もみんなまとめて成敗だ！

よくくんが大声をあげると、びっくりして男軍団は振り向いた。

よくくんは右手を天に上げ、左手を胸に、かつこよく叫んだ。マイケルジャクソンみたいだ。

マイケルが登場すればあとはこわいもん無しだ。みんなで今夜もビートイットだ。

その瞬間、部屋にある、汚いシャツやら、タオルやら、歯ブラシやら、髭剃りやら

はさみやら、カッターやら、携帯電話やら、パソコンやら、デジタルカメラやら

ローンの借用書やら、靴やら、雑誌やら、テーブルやら、布団やら、ラジカセやら

蛍光灯やら、鍋やら、やかんやら、包丁やら、生ゴミやら、空き瓶やら、

割り箸がささったままの空のカップラーメンやら、テレビやら、シヤンプーやら

ティッシューパーパーやら、ともかく家にあるものすべてが、男軍団に向けて

飛んできた。ちょっとやりすぎだ。これもそれも全部さゆりちゃん
のせいだ。

道具とはイノセントに多くの可能性を秘めている。心のあり方がそ

れを左右する。

デレクジーターなら拍手が沸き起こる。そういつ心がある。スーパーヒーローなのだ。

シャンプーでも生ゴミでもなんでも心のあり方次第で凶器にでもなんでも生まれ変わる。

歯ブラシだってそうだ。寛永通宝だって銭形平次にかかれればきちんと悪を成敗してくれる。

デレクジーターだ。彼が一番だ。スーパーヒーローはみんなちびつこの味方だ。

包丁やらがうまいこと彼らのシャツの裾をとらえ、壁に彼らを貼りつける。

カッターも、はさみも、そして汚いシャツも顔にめがけて飛んでくる。

彼らはこの世でもっとも恐ろしい種類の恐怖に出会う。しかたない本人が望んだことだ。いまさら台本の修正が出来ない。脚本家が大声で怒鳴り込んでくる。

彼らの宇宙は崩壊した。彼らに必要な小道具をすべて撤収する。裏方さんが忙しい。ジョン・トラボルタならこういうことにはならない。小道具の予算

を削れる。素敵に悪役をこなせる人がいる。そういう人はなにをやっても女の子が

放っておかない。観客が喜んで映画館にくる。パンフレットもバカ売れた。

儲かる。次の映画に予算をたくさんまわせる。この次の映画にはヘリコプターが登場し、

マシンガンをかかえたジョン・トラボルタがかっこよく壮大に子供を誘拐する。子供は

国家重要機密の鍵をにぎる男の息子なのだ。アメリカ大統領が軍隊

の出勤を許可する。

秘密の話だから庶民から批判が沸き起こる。秘密を隠匿する為にマスメディアを強引に操作し、

すべて隠匿されたままシルベスタースタローンとかアーノルドシュワルツネッガーとかが

軍隊を率いてトラボルタとハードに壮絶な戦いを展開する。最新鋭の戦闘機がアメリカ

上空を飛び交う。トムクルーズとケニーロギンスが空から援護射撃だ。ブルースウィルスが

タフに高射砲でぶつくさ文句をいいながらもテクニカルにそれに応戦する。ニコラスケイジが

秘密の司令塔でそれを苦い顔で見つめる。背後には手厚く快適に保護されている子供がいる。

トム・クルーズ2がエマニニエル・ベアールと手を組んで国家の隠匿された汚い重要機密を

シリアスに壮大に探る。正義感にあふれる弁護士なのだ。時には通気構から部屋へと

忍び込むアクションもある。法律を駆使して執拗にクールにシリアスに問い詰める。

恋の葛藤もある。ベットシーンもきちんと挿入される。みんながゴージャスに大戦闘を

繰り広げる間にラルフ・マッチャオとパット・ノリユキ・モリタがふたりで

秘密の司令塔に忍び込み、ラルフとトラボルタが空手で最後の決戦を繰り広げる。

パットがそれを非常に落ち着いて見ている。感動的なファイナーレだ。ラルフとパットが抱き合う。

秘密の巨大な司令塔が徐々に陥落していく。そこで子供の面倒を見るレオナルド・デカプリオと

ケイト・ウィンスレットが滅び行く司令塔の片隅で壮大で感動的な

愛の結末を演じる。

機密の鍵を握るトム・ハンクスと奥さんのメグ・ライアンが助け出された息子を抱きしめる。

ボンジョビがワイルドでサクセフルな主題歌で映画を盛り上げる。

国民を総動員し、

膨大な予算をつぎ込んだ映画が完成する。映画は大ヒットだ。パンフレットもバカ売れだ。

主題歌がビルボードのチャートにぎわす。監督は拍手で迎えらる。

ちよつと見てみたい壮大なおバカ映画だ。アル・ヤンコビツクならひとりで全部演じてしまいそうだ。

だれかに監督をやってもらいたい。ジョージ・ルーカス監督ならさらに宇宙を巻き込むことも出来るだろう。国家側についたダースベーダーが宇宙から

やってきてタフに正義感にあふれるトムクルーズ2とレトロフューチャーな戦いをする。

トムクルーズ2の背後には寡黙な七人の侍がいる。西部劇のガンマンと戦う。ジャッキー・チェン

とクリスタッカーがやってきてダースベーダーを援護する。子供は手厚く保護されている。

アニメのキャラクターが一生懸命子供をあやす。巨大な遊園地が占拠されているのだ。

マイケルジャクソンだって子供の為にかっこいいダンスを披露する。子供は大喜びだ。

まるで王子様だ。無駄に楽しい映画だ。本当にやって欲しい。少なくとも私は喜んで見に行く。

まだまだ付け足せるがきりがいいからやめる。アメリカは本当にスケールがでかい。日本じゃ無理だ。

こんな風にややこしい展開になったのはマイケル・J・フォックスとクリストファー・ロイドが

勝手に過去を変えてしまったせいなのだ。でもきりがいいからやめる。私はどうも話が長い。

なにはともあれ、一番肝心なところをケチるからこういうことになる。環境破壊だ。

そこに意を決した警官たちが強行突入する。ミコとマコはそれを壁越しに眺める。

達成感でいっぱいだ。感無量だ。悪を成敗した。めでたしめでたし。今夜は乾杯だ！

遅れて奥さんも突入する。そこにはマイケルジャクソンみたいなよしくんがいる。

奥さんはビリージョエルのファンだ。全然関係ない。

警官が全員、啞然とする。ポカンとしてる。当たり前だ。ニュータイプなのだ。

資料がない。警官は恐怖にひきつり歯ブラシだとかティッシュペーパーに

羽交い絞めにされている男軍団をしばし見つめていた。前例がない。

よしくんはしばらく自分がおこしたワイルドな偉業の余韻にひたっていたが、

やっと大声で泣き出した。ママに飛びついた。警官がさゆりちゃんとゆうたくんのロープをはずす。主役はよしくん。さゆりちゃんのママはあとで

怒鳴りに来たりしない。ママも美人なのだ。さゆりちゃんもゆうたくんも一気に泣き出す。

警察が名前を尋ねてもちゃんと答えられない。いぬのおまわりさんだ。

そして現実的に、資料として、男軍団をモデルにした写真撮影会が行われた。

ポーズが決まってる。いまだに固まってる。ちょっとやりすぎだ。みんなサユリストだ。

男軍団は大事なヒーローだ。きちんと警察が保護する。それから記者会見が行われる。

情報は隅々まで配信される。注目を浴びる。だれもミコとマコの存在なんて

気づかない。そういうものだ。気づかれたら困る。ストーリーはうまく因数分解される。

ミコとマコは裏方さんだ。舞台裏はとても忙しい。ねこは楽をしててもいい。

脇役を与えられた猫が怒鳴り込んできたりしない。そんなことから犬も

怒鳴り込んでくる。パンダだって、アヒルだって、かまきりだって怒鳴り込んでくる。

手に負えない。ねこはそれを良く知っているから黙っている。賢いのだ。

勝手に自分のやりたいようにやる。ちゃんと自分の責任も取る。究極のコストミニマムだ。

赤いリボンだって嫌がる。余計なこととはしない。予算は神様が出す。だから税金の

心配もない。労働の義務もない。年金の心配もしない。戦争にもい

かない。興味がない。他に考えることはたくさんある。暇なわけではない。そうみえるだけだ。誤解だ。

ねこはアンダーグラウンドにコストミニマムでアンコンシャスな存

在だ。だから愛される。

男軍団のストーリーはまだしばらく続く。警察の出番だ。裁判長の出番だ。

新聞記者の出番だ。テレビの出番だ。評論家の出番だ。刑務所の出番だ。国家が用意した

台本だ。脇役をあたえられた報道陣が怒鳴り込んでくる。役者が多すぎる。予算が足りない。

神様もしらんぷりだ。しょうがないから総理大臣は税制改革だ。観客からブーイングが

おこる。テレビをみている奥様が家計簿とにらめっこだ。旦那はいつも残業だ。

東京メトロ路線図だ。複雑にストーリーが絡んでいる。みんな行きたい場所にいけない。

みんな本当はだれもが主役だ。物事を広く見れば。だから私は大声で怒鳴り込んだりしない。

もちろんちゃんとみんな裏方もやらなくてはいけない。世界の暗黙のルールだ。

裏方をさぼるやつはみんなストーリーの奴隷だ。寛永通宝が悪を裁く。

奥さんが、さゆりちゃんとよしくとゆうたくんをまとめて一生懸命なだめる。

なかなかやまない。こっちだって泣きたい。もちろん泣いている。当たり前だ。5歳児だ。一児の母だ。泣く資格がある。でもほつとした。よくやった。

よしくんは成長する。この話はよしくんの為のストーリーだ。誰かが台本を書いた。

みんなみんなよしくんのために脇役になる。裏方さんも大集合だ。

世界を大いに動かす。脇役を与えられてもだれも怒鳴り込んで来たりしない。

壮大なマジックなのだ。デビット・カッパーフィールドだ。みんな喜んでお金を払う。

ヤンキースタジアムで拍手が鳴り止まない。フランクシナトラが優雅に歌う。

オーナーもここにこだ。Ｔシャツもバカ売れだ。デレクジターがそれに応える。

予算なんて気にするな。神様がスポンサーだ。神様は超大金持ちだ。神様は子供が大好きだ。

しかもすべて非課税だ。固定資産税も相続税も国民保険も兵役もまゝること免除だ。

ミコとマコとネコは家に帰る。今度は現実的にきちんと徒歩で帰る。決まりだ。

途中でうちの奥さんが車で待っていた。ふたりは抱きしめられた。えらい魔女だ。えらい女の子だ。９５点だ。５点マイナスはさゆりちゃんのせいだ。

だれもがさゆりちゃんに夢中になる。いけないことだ。教育上よろしくない。

そして車に乗ってみんなが帰って来た。私は洗濯物をたたんだりしていた。

「よくやった」とわたしは褒めた。何事にもひとつひとつ区切りをつける。

「うん」とふたりはいった。テレパシーだ。

よくくんはママと家に帰る。パパも東京メトロ路線図的に複雑な台本を書き上げ
帰ってきた。パパはよくくんを抱きしめた。ママが泣いた。ビリー
ジョエルが歌う。

「今日はどこおいしいものでも食べにいこうか？」とパパは聞いた。

何事にもひとつひとつ区切りをつける。

「うん」とよくくんはいった。テレパシーだ。

039

ある日、彼女と出会う。突然。彼女からメールが届いた。

私は楽曲も公開していたし、自身のウェブサイトも持っていた。最初は楽曲の感想だった。

それがきっかけで何度かメールの交換をした。なかなかユニークな文章だったので

わたしはその交流を楽しんだ。

彼女もウェブサイトを持っていた。しかもかなりのアクセスがある人気サイトだった。

彼女は自分の力を駆使してある人生相談サイトを開いていた。無料で。

何も売りつけたりしない。彼女はお金にあんまり困ってなかった。親が金持ちだったし、彼女も稼ごうと思えばいくらでも稼げる。で

も今は働かずに
ふとそのようなサイト運営に没頭していた。貯金は山ほどある。う
らやましい。

わたしは非常にコストミニマムな生活を繰り返した。余計なもの
はない。

パソコンと音楽機材とごく普通のミニマムな家財道具ぐらいしかな
かった。

ちいさな部屋ががらんとするくらい。余計なものはいらない。うん
ざりだ。

若い頃それで失敗した。嫌な目にもあった。思い出したくない。
外側には今はあまり興味がない。自信がないと人は外になにかを求
める。

誰かがそれに目をつけていんちき商売をしている。ただのものに強
引に付加価値
を与え、理屈を並べ、ゴージャスな美麗賞賛を付け加えて売り飛ば
す。

ややこしい台本をつけて。それは儲かったりもする。拡大する。無
限ループだ。

そんなもんに関わるくらいならきちんと部屋でも掃除していた方が
いい。

道具とはイノセントに多くの可能性を秘めている。心のあり方がそ
れを左右する。

家が近かった。驚くぐらいに。彼女も小さなアパートを借りて質素
に暮らしていた。

お互いの家を訪れあった。彼女の話はとても面白かった。人生相談
なんかしていたから

彼女の頭の中にいろいろなストーリーが詰まっていた。それを吐き

出すかのように

私に話した。私もそれほどでもないが、いくつかの経験を話した。彼女は

とても素敵な髪を持っていた。あんまり神経質でもない。ちょっと変わっている。

どこにも出かけず、お互いの部屋で裸のままお酒を飲んだり、セックスしたり

ともかく考えうる限りの時間を費やしておしゃべりをした。くだらない冗談も

真面目な主張も、なにもかも。彼女には嘘を付けそうもない。なんとなくそう思った。

ともかくお互い楽しんでた。ふたりとも頭の中にいろいろなお話を溜め込み

過ぎていたのかもしれない。わからない。でも私は彼女のが好きだ。

ある日、わたしに突然に魔術を披露した。

われわれは裸のまま布団の上に浮いていた。わたしはかなり混乱した。

彼女は笑った。タネもしかけもなかった。テレビだったらいくらでも否定することが出来るが、ここでは出来ない。テレビだったらマジシャンも

ゲストも、視聴者も熱狂するが、ここは静かだった。もちろん私は驚いている。

でも受け止めた。われわれが宙に浮いたところで何かが変わるわけでもない。

彼女のことが好きなのだ。彼女も私のことが好きなのだ。なにこともわれわれをかえない。

それ以来、彼女はシンブルに機能だけを披露することもなかった。

でもシンプルに

わかりやすい自己紹介だった。写真みたいだった。しかも圧倒的だ。心とはイノセントに多くの可能性を秘めている。心のあり方がそれを左右する。

「そういうことなの」と彼女が言った。テレパシーだ。

次の日、彼女は自分のアパートを引き払い、私の部屋に少ない荷物とともにやってきた。

なんのことわりもなく、でもわたしもなんの文句もなく受け入れた。彼女のアパートは必要なくなる。人生相談サイトも削除した。突然しばらく彼女のファンがネット上で騒いでいたが彼女の身元を誰も知らない

名前も知らない。名前はミカだ。私だけが知っている。必要ないのだ。

と、彼女は言った。正論だ。そろそろ他人の世話を焼いている暇はない。

わたしたちが考える番だ。わたしたちの為に。

女性は、別に魔女でも魔女でなくてもどこか魔女的に謎めいたところがある。

と、私は個人的に思った。もちろんわたしは全世界の女性と付き合いつつ

夜を過ごしたり、どこかの遊園地にいたりしたわけでもない。そんなにもてるタイプじゃない。全然ない。でもそう思った。そんなこと聞いてまわれない。

その魔女的な部分を男が理解できなくても漠然とでも存在を認識し

それをうまくなにかに託して表現できたら、わからない。

わからないけどそれはきちんと大事にされるべきだと思う。

子供の存在と一緒にかもしれない。機能をうまく果たすことがお互いにとって

大事なわけじゃない。それではどこにもいけない。うまくは言えない。無限ループだ。

「これよ」 と彼女は言った。テレパシーだ。

彼女はそういつて右手を広げて、中指を3回ほど動かし、親指を折り曲げて

また元に戻した後、両手でパンと音を鳴らし、動作を止め、笑った。

そしてお互い裸になって寝た。抱き合った。キスをした。

そして結婚した。私はなんとか音楽家となって生活を支えた。それは私のしたいことだ。

もちろん彼女との共同作業だ。私は彼女を愛している。彼女も私を愛している。

なにも問題ない。

ミコとマコが生まれた。のちにねこも現れ、われわれは広い家に移った。

とてもとてもとても静かだ。どこのだれも世界中だれもわれわれのことなんか

知らない。知らなくてもいい。そんなのは秘密だ。舞台裏に照明は
燈らない。

「かわいいふたこのおんなのこだよ」と私はいった。

何事にもひとつひとつ区切りをつける。

「うん」と彼女はいった。テレパシーだ。

040

私の家族とよし君の家族で横浜スタジアムに行った。

もちろん巨人対横浜だ。当たり前だ。これはよしくんパパからのプ
レゼントだ。

会社の仕事の関係でうまいこと良い席がとれるらしい。一番前の内
野席だ。

左の打者の顔が良く見える位置だ。佐伯選手が良く見える。

これはこないだの誘拐事件のお礼らしい。ありがたい。良いパパな
のだ。

さすがジャイアンツファンだ。

よしくんはミコとマコに挟まれて座っていた。逃げ場はない。

私はミコとマコにレプリカユニフォームとキャップとメガホンを買
い与えた。

IPOD以来のはしゃぎ様だ。これは私からのご褒美だ。良いパパ
なのだ。安いもんだ。

うちのむすめたちの応援がワイルドに増幅された。道具をちゃんと使いこなしている。

よくんも持参のジャイアンツグッツでやってきていた。タフに応戦していた。

さすがジャイアンツファンだ。

うちの奥さんと隣の奥さんが一緒に座り、いつものように渋い顔で楽しそうに

愚痴を言い合っていた。こりない人たちだ。隣の奥さんは事件以来、言わないけど

うちの奥さんにたいして密かな信頼を持っていた。なんとなく気づいている。

けど言わない。ちゃんと社会のおきてを守ってる。さすがビリージョエルのファンだ。

オーネスティーだ。わりにふたりは気があう。そりゃそうだ。家庭環境がにてる。

よくんパパはあれ以来、可能な限りよくんと遊ぶ時間を増やしていた。

もちろん傷はあるだろうし、なによりそれを取り除く努力をしてあげなくってはいけない。

親の責任として、気持ちとして。よくんは特に問題なく過ごしていた。

魔女軍団のサポートもある。大丈夫だ。わたしとよくんパパは隣に座って

よくんとミコとマコを眺めていた。ビールを飲みながら。うちのむすめはしつけが悪い。

ねこは家でゆっくりテレビで観戦した。わるいが勘弁だ。連れて行

けない。

でもそのほうがいいみたいだった。そうだろう。だってねこだ。みんないなくてせいせいだ。

天気が心配だったがなんとか晴れてくれた。気持ちのよい風が吹いていた。

やっぱり球場で見るのとテレビでみるのとは全然違う。これからもっと

連れて来よう。娘たちも思いっきり騒げる。奥さんがにらんだりしない。

しかし騒ぎすぎだ。周りの人が笑いながらこっちを見るくらい目立ってる。

恥ずかしい。でもまあいいや、迷惑なわけではないのだ。無視しよう。教育上よろしくない。

うちのこもなかなかかわいい方だ。さゆりちゃんには負けるけど可愛いはうだ。

さゆりちゃんは特別で無敵だ。そういう人が世の中にいる。スタジアムも揺れる。

なんの話だ？だれもがさゆりちゃんに夢中になる。全部これもさゆりちゃんのせいだ。

さゆりちゃんのパパも美人だ。うちの奥さんだって美人だと思うけど、

さゆりちゃんのパパは特別で無敵だ。パパもハンサムだ。私はハンサムじゃない。

いったいなんの話だ？ そうだ、うちのむすめたちは可愛いということだ。

突然、ふと浮かんだただの感想だ。話がややこしくなるのはすべてさゆりちゃんのせいだ。

だれもがさゆりちゃんに夢中になる。さゆりちゃんのママも美人だ。無限ループだ。

ビールの飲みすぎだ。ビールがうまい。

試合は3対2でジャイアンツが勝っていた。9回表、このところ出番がなかった

クルーン投手が出てきた。ミコが絶叫する。

[illegible]

クルーン投手は速球でバタバタとストライクをとった。調子がよさそうだった。

よくくんが渋い顔をする。クルーンのことには悔しいが認めてる。

「うえはらのつぎにすごいな」とよくんは評論した。それは認めてるようなもんだ。

さすがジャイツファンだ。

見事、3人とも三振で無事にしのいだ。さすがだ。

もちろんわたしとよくんパパがいびりあうなんていうことはない。
大人なのだ。

でも楽しんでる。いろいろな視点で、様々な角度で、大人になると複雑になる。

9回、上原投手が出てきた。ちよつと厳しい。よしくん鼻高々だ。

「いけ——！！——きんじょ——！！——」

「さああああああえええええきいいい！！！！！！！！！！」

マコが特大に叫んだ。本人がこっちに気づきそうなくらいだ。恥ずかしい。

佐伯選手は何度もファールで粘った。なかなか調子がよさそうだった。

マコのボルテージは最高潮だ！

8球目、佐伯選手は見事なホームランを打った！ 大逆転だ！ さよならだ！

「やたああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！」

みんなで叫ぶ。もちろんスタジアムが揺れる。スタジアムは満員だ。みんなこの瞬間を期待してわざわざいろいろなところから毎日やってくるのだ。

不思議だ。ここににいる人たちは普段どんな生活をしているのだろうか？ そんなことは誰も知らない。知らなくてもいい。テレパシーだ。

佐伯選手は右手を高くあげて喜んだ。ベースを回る。ホームプレートに

選手達が集まる。そこに飛び込む。みんなから祝福される。観客も惜しめない拍手をする。うちの奥さんも隣の奥さんも渋い顔で楽しそうに愚痴をいいながら

恥ずかしがるも感動的に拍手する。冗談だ。想像できない。

もちろん私も拍手する。世界の暗黙のルールだ。でも感動的だ。

世界とは横浜ベイスターズだ。佐伯選手のバットにすべてがかかっている。

三浦投手のコントロールにすべてがかかっている。クールン投手がそれをしめて

勝利のシャンパンコルクを抜く。ミコモマコもパパもみんなも大喜びだ。奥さんだって複雑に喜ぶ

世界は佐伯選手にすべてが託されている。みんな大事にしなくてはいけない。

スーパーヒーローはいつもちびっこの味方だ。佐伯選手が一番だ。佐伯選手とは人間国宝だ！ 歴史に名を残す偉人だ！ みんな大事にしなくてはいけない。

決まりだ。

世界とはイノセントに多くの可能性を秘めている。心のあり方がそれを左右する。

デレクジーターだ。

帰り道、相変わらずよしくんはミコとマコにはさまれて、われわれの前を歩いた。

街はにぎやかだ。ベイスターズも勝ったし、なにかもが綺麗に見える。

自分が5歳の頃にこんなガールフレンドがいたら素敵だろうなーと思った。

そんな経験はない。正直にうらやましい。人生変わっていたかな？

そんなことはどうでもいい。ただうらやましいだけだ。悪いパパだよしくんとマコが結婚したらどうなるのだろう？悪くない。

隣の奥さんも大賛成かもしれない。毎日テレビの前で仲良くけんかしてるのかもしれない。

そんなことはもちろんわたしが考えることではないが、ふとそんな気がした。

もしそうならきつと良い夫婦になるだろう。でもそんなことはわからない。

これは父の希望だ。そしたらいつかわたしの話をしてあげよう。作り話じゃなくって。

それがいいことかはわからない。でもそうじゃなくってもむすめたちには聞かせよう。

わたしのお話を。聞きたがるかどうかはわからない。おとぎ話だ。悪いパパだ。

こんなことを考えるのは全部なにもかもさゆりちゃんのせいだ。誰もがさゆりちゃんに夢中になる。さゆりちゃんのママも美人だ。無限ループだ。

おんなのこはみんな魔女になる資格がある。と思う。みんなかわいい魔女になる資格がある。

そういう風に考えて普段接した方がうまくいくと思う。経験的に。

おじさんの意見だ。

ややこしく楽しめばいい。適当に。真剣になるな！

ややこしくコミカルに楽しめばいい。適当に笑ってごまかせ！

「ぱぱ」とミコが突然振り向いて言った。

「なに？」と聞いた。

「きょうはたのしかった」とミコが言った。何事にもひとつひとつ区切りをつける。

「そうだね」とわたしは言った。テレパシーだ。

041

ベッケンガー博士はしばらく苦悩の日々を過ごしていた。ニコラス・ケイジのせいだ。

ある日の夜、夢の中で息子が言った。

「ふつかのごごさんじ、ごふんかん、かんしをくいとめるからね」

”なに？ どういうことだ？”

「ぼくはもううんざりだ、うんざりだ、うんざりだ」と息子が繰り返す。

返した。

「ふつかのごごさんじ、ごふんかん、かんしをくいとめるからね」
博士が起きた。二日後の午後3時、5分間、監視を食い止めるからね？

博士は一応それをメモした。息子の表情が頭に残っている。

うんざりだ。うんざりだ。うんざりだ。うんざりだ。私は繰り返す。

止めようと思ってもそれを繰り返す。息子の表情が頭から消えない。

しばらくベットの上で考えていた。孤独だった。これは神様のお告げかもしれない。

いや、自分の素直な意見だ。息子の意見だ。私の奥さんの意見だ。いや、ニコラスケイジの意見だ。みんなの意見だ。世界の意見だ。みんなを開放しなくてはいけない。ついにこのときが訪れたのだ。

道具とは誰かのストーリーが選ぶひとつの機能に過ぎない。作られた脇役だ。

なにかを代弁する象徴にもなる。私の発明もそのひとつの機能にすぎない。

もつと大事な事がある。私の発明は、新たな誰かのストーリーのひとつにすぎない。

私の心のあり方が大事だ。きちんとした心のあり方が大事だ。それ以上のことは

私がこの先どんなに優れた発明をしたとしてもおんなじことだ。おんなじことなのだ。

それがいやならこの世のものをすべて破壊しなくてはいけない。おんなじことなのだ。

この発明が世界を滅ぼす可能性もある。おんなじことなのだ。どこにもいけない。

博士は決心した。

二日後、午後3時、彼はパソコンから彼のI P H O N Eにデータを転送した。

彼の発明に関する細かい説明が録画された動画ファイルだ。

並みの科学者ならすぐに自分でそれを作成出来る。理解出来る。

それを動画公開サイトに匿名を装ってアップロードしよう。どこかで漏れたことを装ってアップロードしよう。後のことは知らない。私の心のあり方が大事だ。

でも博士の体は震えていた。早くしなくてはいけない、でも手が震える。

これはものすごいニュースとなるだろう。私は人類に新たなストーリーの

機能を提供するのだ。どうなるかは検討もつかない。だれもそんなことわからない。

新しい歴史が始まるけど、誰も未来のことなんてわからない。保障も出来ない。

考えとはストーリーの核だ。それが膨大な量のストーリーを生み世界を変貌させる。膨大な量の小説が書かれる。一生かけても読みきれないほど

膨大な小説が書かれる。それは宇宙の膨張だ。だれも止められない。

心とはイノセントに多くの可能性を秘めている。心のあり方がそれを左右する。

わたしの心のありかたが大事なのだ。息子が大事だ。暗い未来予想をするより

息子のことを考えるべきだ。自分のことを考えるべきだ。心のあり方がそれを左右する。

うんざりだ。なにも考えるな。その時、なにか息子のような声がちいさく頭の中で響いた。

博士はアップロードのボタンをクリックした。そして送信を完了する。

IPHONEはもう必要ない。彼はそれを叩き割った。そして放り投げた。

振り向くと、そこには息子が立っていた。父として言つべきことがある。

「サッカーでもして遊ぼうか？」と父は言った。

「うん」と息子は言った。

野球のシーズンが終わった。

11月、第一週目の土曜日。我が家では大掃除が行われる。

もちろんミコとマコも強制参加だ。当たり前だ。この家に住んでいる限り、それは義務となる。

ねこはしなくていい。ねことはそういうことが許される存在なのだ。別にねこの手も借りたい

ほど忙しいことをやるわけではない。そもそもねこに掃除をさせるとなるという調教

しなくてはいけなくなる。余計に忙しくなる。そうすると冬眠に入る前の熊の親子に

お土産に新巻鮭なんかを持って、お手伝いをお願いしにいかなくてはならない。

もちろん調教もしなくてはいけない。そうとなるとカルガモの親子にも頼みにいかなくはいけない。

どんどん忙しくなる。我が家が動物園になる。ミコとマコが喜ぶ。だが一向に掃除は進まない。

うちの奥さんが怒る。そういうわけだねこは掃除しなくてよい。そうするとみんなでお掃除を

あきらめてワイルドなカラオケパーティーがはじまってしまう。熊の親子が森のくまさんを

楽しそうに歌う。カルガモの親子がピーピーとはやし立てる。ミコとマコもバナナラマの

アイハードアルマーなんかで応戦したりする。そうするとうちの奥さんも苦い顔で

楽しそうにドラえもんの主題歌なんかを歌いはじめたりする。クラッカーがはじける。だれかが

ワイングラスを倒してしまう。部屋の中がめちゃくちゃになってしまう。そうすると

人手が足りないから今度はご近所の犬にお掃除のお手伝いを頼みに
いかなくてはいけない。

無限ループだ。うちの奥さんがさっきまで苦い顔で楽しそうに歌っ
てたくせに私に大声で

怒鳴りに来る。世の中が混乱する。というわけでねこには掃除を頼
まない。

みんなでラフな格好になる。今年からはIPODで音楽を聴きなが
ら掃除してもよいこととなった。

まあ別に問題ない。畳をひっくり返した時に発見された古新聞に心
を奪われて掃除の手が止まる

磯野家よりかははるかに効率的だ。

ミコはダフトパンクのハーダーベターファーストロンガーを選
んだ。

マコはクラフトワークのザロボットを選んだ。テクノだ。ささやか
な反抗心を

イノセントに皮肉っぽくロボットダンスで表現している。教育上よ
ろしくない。進んだ5歳児だ。

それぞれ自分の部屋は自分でやる。必要ないものはリビングの一角
に集められ

様々な方法で処分する。そのほかをみんなで分担する。私はいつも
いつも風呂掃除とトイレ掃除だ。

どうも私は進んで貧乏くじを引いてしまうところがある。私もIP
ODを買うべきだった。

そうしてこうして、我が家のテクノでクラシックな大掃除大会が
終わる。私は不用品、ゴミなどを

まとめて、処分方法別にを分類し、捨てられるものはすぐに捨てに

行く。その他のゴミの
処分方法をネットなどで調べる。ややこしいがそれはきちんと守ら
れなくてはいけない。
世間のルールだ。

娘たちとうちの奥さんは花屋さんに行く。今年はパンジーを買って
きた。

それをソファーの前の小さなテーブルに置く。綺麗な花だ。ほのか
な香りがする。

清潔な部屋とはその小さな花の香りに気づける部屋だ。うちの奥さ
んの意見だ。

それを確かめる為に毎年花を買ってくる。儀式だ。まあ良い事だ。
致命的に汚い部屋に

花を飾っても意味がない。そんなの花がかわいそうだ。花だって人
を選ぶ。

4人でソファーに座り、それを黙って見る。私はオーディオの電源
を入れて
ドビッシーの海をかける。夕方、部屋の照明を落とす。キャンドル
を灯す。

薄暗い。4人でソファーに座り花を見つめる。大掃除の幕をそれで
閉めるのだ。我が家の儀式だ。

隣の奥さんがその話をうちの奥さんから聞いて、すっかりやる気に
させられたみたいだ。

よくくんぱが苦い顔で楽しそうに私にその愚痴をこぼしていた。
まあしょうがない。

音楽が流れる。うちの奥さんは神妙な表情でささやかにこういうの
が正しき姿なのだという

執拗な主張を口元で表現しながらにこにここと聞きいつていた。あいかわらず懲りない人だ。

ロックの洗礼を受けたむすめたちは明らかに退屈そうだった。まあしょうがない。そのうちにわかる。

しかし、良い曲だ。私もクラシックのことは良くわからないが、昔の海はなにもなくて

静かで綺麗だったんだろうな、という感想を持った。なにもない美しい海に

人生の想いが映し出される。様々な喜怒哀楽がその空間に埋められるのだ。

人はそういうことから決して逃げられない。それが嫌なら汚い部屋で笑ってごまかすしかない。

音楽が終わる。幕が下ろされる。ミコとマコは背伸びをしてだらだらと自分たちの部屋に戻る。

雨が降ってきた。激しい雨じゃない。ささやかな雨だった。風も少し吹いている。

私は窓を開ける。少し肌寒いけど、心地よい風だ。照明はそのままつけず薄暗い部屋の中で

しばらくの間、われわれは無言でソファに座っていた。レースのカーテンが風に揺れている。

空間をわれわれの想いが埋め尽くす。花や、雨や、風がそれを増幅させる。

キャンドルの炎がかすかに揺れる。空間と想いが混ざり合う。魔術がそれを調和させる。

それは音楽のようだ。

‘

‘

第二部 001 -

第二部

001

明美先生はたくさんの園児に囲まれ、みんなにその小さな胸をペタンペタンと

触られていた。いつもの事だ。みんなで明美先生の所に来てべたべた触りに来る。

園児はただ楽しんでいるだけなのだが、、しつけが悪い、、ミコが言った。

「うちのママよりちいさーい！」確かにうちの奥さんも小さい、、

「だからあけみせんせいはまだどくしんなだー！」ゆうたくんが笑いながら言った。

しつけが悪い、、うちのむすめも、、

「やまがたせんせいはおおきいほうがいいらしいよー！」マコがからかう。嘘だ。

そんなデーターがそろってる6歳児なんていない。

明美先生が泣きまねをする。いつものことなのだ。でもぐさつとくる。しつけが悪い。

バスで送り迎えをする時に園児達が親達の前で言つと、親達が固まる。一瞬、親達が

明美先生のその小さな胸を見る。表情がなにか物語っている。恥ず

かしい、

「もうせんせい、みんなにいじめられてないちゃうー！
えー………んんん！」と明美先生が半分シリアスに
泣きまねをする。

明美先生はあんまり叱ったり出来ない。というか大勢過ぎて手に負えない。

そうするといつも、園児達はその手を止めて先生を慰める。いつものパターンが始まる。

「せんせいなかないでー！まったくいじめるやつはどこのだ！」とミコが言う。

それはあなただ。

「せんせいかわいそーほら、あたまなでなですからなかないでねー」とマコが言う。

子供扱いされてる、…、明美先生が頭の中でつぶやく。

「うちのままよりおおきいからせんせいだいじょうぶだよー！」よしくんが良くわからない
理屈で慰める。さすがジャイアンツファンだ。よしくんのママはたしかに、…、だ。

しかし、誰も謝らない、…、しつげが悪い。

明美先生は26歳で幼稚園の先生をしている。背は150センチをちょっと越えるくらいで
ショートヘアーで、美人というよりはどうしても背が小さいので可愛いといった感じの

女性だ。先ほど申し上げた通り、胸が小さい。本人も散々園児にか
らかわれているせいか
気にしていたりする。これも明美先生がある日、自傷的に、先生は
胸が小さい、と言って

しまったのが発端だった。それがなぜか園児に大うけして、その日
以来それが続くこととなった。
実のところ、みんなは先生にただ甘えただけだと思う。だが日々
エスカレートしていった。

結婚願望がある。同僚の山形先生のことを気に入っている。山形先
生はハンサムで優しい人だ。
子供が大好きだし、園児にも人気がある。仕事熱心なので明美先生
はなかなか近づけなかった。

そうして、夏休みの前の最後の日が終わった。明美先生がバスに園
児を乗せていろいろな
親が引き取りに待つところに廻る。

「せんせいさよーおなら！ やまがたせんせいとなかよくね！」と
ミコがからかった。

明美先生がいつものごとく笑ってごまかしていた。私も笑ってごま
かした。話はすべて知っている。
世界中の誰もが知っている事実でも、それを口に出せないというこ
とは大人の間ではよくあることだ。
でも、子供はそんなこと気にしない。教育は難しい。

よしくとさゆりちゃんとゆうたくんとマコもバスから降りた。みんな口々にしばらく

言えないそのセリフを言った。大人たちの間で無言のテレパシーが飛び交う。

もちろんみんな知ってるけど、みんななんにも言わない。いつものことだ。

私はみんなにさよならをして、ミコとマコを連れて家に帰った。夏だ。暑い。

帰り道、ミコとマコは今度のキャンプの話をした。今度、私の家族とゆうたくんの家族とよしくんの

家族とさゆりちゃんの家族でキャンプに行くこととなったのだ。ミコとマコは非常に楽しみに

していた。マコとしてはさゆりちゃんがいるのでよしくんの奪い合いとなるのが嫌なのだが

しょうがない。さゆりちゃんは美人だ。さゆりちゃんのママも美人なのだ。しかたがない。

よしくんパパがこの計画をたてた。よしくんママはずっと前の誘拐事件以来、うちの奥さんと

交流を計るべく、いろいろなイベントを用意してきた。うちはイベント作成能力にかなり

欠ける一家だったので、ありがたい。うちの奥さんもなかなかよしくんママと仲良くなっていた。

うちの奥さんが魔女であることをちゃんと理解している。口には出さないけど、わかっている。

多少はその秘密に近づきたいという想いがあるようだ。よしくんママはいろいろと影響されやすいタイプだ。

よくんパパは現実的にきちんと計画を立てられる人だ。

会社でも評判が良いらしい。割りに細かいことをきちんと考えることが好きなようだ。

きちんと予算を出したり、場所に関するいろいろな資料をインターネットやらで調べまくり、

我々が持つていくべき必要なもの、その他いろいろなデーターを元に企画書を作成し

みんなにわかりやすいレイアウトで説明文や画像なんかを添えて、それをプリントアウトして

みんなに配った。素晴らしい。うちのようなずばらな夫婦にもわかりやすい様になっていた。

誰もが一目できつと会社では有能な社員なんだろうなー、という感想を持てる様な

素晴らしい計画書だった。彼は有楽町の会社で働いている。私と同じ年だ。

場所は伊豆のキャンプ地だった。なかなか良さそうなところだ。その4人用ログキャビンを3棟

借りて、うちの夫婦とよくん夫婦でひとつ、さゆりちゃん夫婦とゆうたくん夫婦でひとつ、

子供たちだけでひとつに割り振った。よくんママは料理の達人なので美味しい料理も食べれる。

素晴らしい。子供たちもちろん喜ぶだろう。というかもうすでに喜んでいる。ねこも連れて行ける。

「ぱぱはやくきゃんぷいこうよー!」マコが言う。それはあと10日後の話だ。

「あともうちよつとよいこでまってるね、」と私は言った。

ふたりが足をバタバタさせる。無言のアピールだ。

「ねえ きゃんぷにばんださんはいるの？」とミコが聞いた。なにが勘違いしている。

「キャンプ場にパンダさんはいないよ、うさぎさんならいるかもしれない」と私は言った。

「きりんさんもないの？」ミコが言った。まだ勘違いしている。

「キャンプ場は動物園じゃないんだよ、あひるさんならいるかもしれないけど」と私は言った。

まだ理解できないようだ、キャンプは初めてだからうまくイメージ出来ないのかもしれない。

「みこはこどもだなー！きゃんぷじょうはよこはますたじあむとちがうんだよー！」とマコが

ミコをからかった。だが全然違う。動物園にホッシー君がいたらわけがわからなくなる。

「とにかく、みんなで好きなだけ遊んで、よくんたちとみんなと一緒にやすみするんだ。

楽しくないかな？ 楽しいこといっぱいあるよ！ あひるさんもくるかもしれない」と私は言った。

うん、とミコはうなずいた。多少は納得したようだ。

しかし、まあ楽しそうだ。よくんパパがちゃんと何もかも取り仕

切ってくれるだろうし、

よくんママが美味しい料理を作ってくれる。私はぼけつとしてればよいみたいだ。

ビールでものんびり飲みながら野球でも見てればいい。しかしそれじゃ家とかわからないな、

まあ、いいや、楽しければ。

家に戻って、私はミコとマコの脱ぎ捨てられた幼稚園の制服を洗濯機に放り込んだ。

洗剤を入れてスイッチを入れる。これでしばらくの間、制服洗濯地獄から開放される。

うちの奥さんはそんなこと何も知らない。私は我が家の洗濯係なのだ。うちの子は本当に汚す。

しかし、そんな愚痴をこぼしてもうちの奥さんはただ笑っただけだ。園児の送り迎えのバスを

待つ間、そんな家事話で盛り上がってしまうこともある。しっかり話題についていける私がいる。

、
しっかりそこでストレス解消している自分がいる。なんだか悲しい、

うちによくくとゆうたくんとさゆりちゃんが来た。キャンプの計画を立てるのだ。

リビングがカオスになる。私はウェイター役だ。みなさまお飲み物はなんになさいますか？

、もちろんそんなこと聞かないでみんなにオレンジジュースとお菓子を出す。

うちの奥さんはぼけつとそれを楽しそうに眺めている。のんびりと

お茶を飲みながら。

私はグラスに氷を入れて、オレンジジュースを注ぐ、お菓子の袋を開けてお皿に出す。

キャンプにいったらこういうことから開放されるだろうな、と思った。楽しみだ。

家事から解放される。早くしないとなんだか私は小姑みたいになりそうだ。

リビングでは子供キャンプ会議が行われていた。みんな楽しみなのだ。まあ良い事だ。

よくくんは親から借りてきた計画書をみんなに広げて見せた。さすがジャイアンツファンだ。

しかしまだ誰も大人用に書かれた文字を読み取ることは出来ない。当たり前だ。6歳児だ。

ひたすら写真だけを見ていろいろな意見をみんなが述べていた。

よくくんはみんなで冒険をしよう！と叫んだ。どうという冒険をするのかよくわからないけど

とにかく冒険がしたいらしい。子供らしい発想だ。まさか十五少年漂流紀みたいなのを想像しているの

だろうか？インディージョーンズみたいなのを想像してるのだろうか？せいぜいその辺を探索する

くらいだろう。

キャンプ場にはあひるさんがいるんだよ、とミコが言う。教育の賜物だ。

ゆうたくんがそれを笑って、キャンプ場にはお化けがいるんだぞーとポーズを取って

脅かした。さゆりちゃんが怖い、と言った。ゆうたくんは僕がやつつけるから大丈夫だ、と言った。

ゆうたくんはなかなか勝気な子供だ。だが、本当に幽霊が出たらまつさきに逃げるだろう。

マコがお化けなんかいないよーと怒る。さゆりちゃんに嫉妬している。さゆりちゃんは美人なのだ。

うちのこはあんまり女の子みたいな振る舞いが出来ない。きつとベ이스ターズのせいだ。

それをうちの奥さんとテーブル越しに眺めていた。ぼけっと。天気の良い初夏の午後だ。

そうしてあることないことでワイルドに盛り上がった後、結論が出た。

「きゃんぶじょうにはあけみせんせいがいて、おっぱいがちいさい」

みんながワイルドにげらげらと笑い始めた。いまだに園児のツボをつくホットなアイテムらしい。

無茶苦茶な結論だ。教育上よろしくない。

私は洗濯を終えた制服らを外に干した。子供たちがそれを見てひそひそと笑っていた。

園児って残酷だ。ミコとマコまで一緒に笑っている。おじさんママだー。ははは。

そんなのは男女差別だ。しかしもちろん、そんなことを6歳児が理解したりしない。

説明しようとする和小難しい言葉がどんどん出てくる。しまいには自分の頭が混乱する。

「ほら、またそうやって明美先生のこと言ったら、先生悲しんじやうよ」

と私は泣きまねをして言った。

はーい！ とみんながいつて、またげらげら笑い始めた。全然効果がない。情けないパパだ。

みんなが帰った後も、キャンプの無茶苦茶な想像話でミコとマコは盛り上がっていた。

みんなと話したことによって一応、イメージが固まったらしい。なにはともあれ。

なかなかその日は寝ないでリビングのソファでミコとマコが夢中で話していた。

「早く寝ないとキャンプの日がこないよ」と私は言った。正論だ。

ふたりがそんなことはないと言った。正論だ。時間は常に一定に流れる。宇宙の法則だ。

「早く寝ないとあひるさんとうさぎさんに早寝競争で負けちゃうよ」と私は言った。

ふたりはきょとんとした。新しいパターンだ。ふたりは私を見つめる。

「ぼくはあひるさんだー がー 早くミコちゃんとマコちゃんと競争したいなー」

え？競争してくれないの？さびしいなー、僕はいつもひとりぽっちだ。

せっかくミコちゃんとマコちゃんと楽しく早寝競争出来ると思っただのに、、、」

と私はあひるの物真似で迫ってみた。あひるさんはどういう風にしゃべるのだろうか？

「なかなかいい、あひるさん、きょうそうする、」マコが悲しそうに言った。

マコはそういう人情話に弱い。ミコはそうでもない。はいはいといった感じでこっちを見てる。

「そうとわかったら競争だ！ いちについて！」と私は間髪入れずに言った。

ミコとマコがかけっこのポーズを取る。私の勝ちだ。

「よいー！どん！」と私は言った。ふたりは必死の形相で2階の自分たちの部屋に行った。

「おやすみ」とミコとマコが言った。おやすみ 夢であひるさんが楽しそうにしていますように

うちの奥さんがそれを楽しそうに見ていた。まるで他人事だ。のん気にお茶を飲んでる。

「明日、ふたりを連れていつもの家具屋さんに行つて来るね。」とうちの奥さんが言った。

またワイルドでどっかセンスがずれてるインテリア用品を買ってくるのか、と思っただけと言わない。

まあ、一緒に行くよりかはましだ。あれは地獄だ。

わかった、と私は言った。

10日たった。キャンプに行く日だ。

よしくんの家の前に10時集合だ。我々はしっかり軽装で、計画書に書かれてある荷物を抱えて

よしくんのところに行った。隣だ。ミコとマコとよしくんがはしやぎ始めた。うちのねこも参加する。

私はよしくんパパに挨拶をした。片手にしっかり本人用の計画書が握られていた。気合が入ってる。

よしくんママもにこにこだった。そしてさゆりちゃん一家とゆうたくん一家が車でやってきた。

2台の車で行く事となっていた。ゆうたくんのパパは車マニアでなかなかカッコいいキャンピング

カーを所有していた。さゆりちゃんのママが窓越しにっこりとエレガントに微笑んだ。

相変わらず美人だ。うちの奥さんが私の頭をこずいた。テレパシーだ。

我々はよしくんパパの車に乗った。立派な車だ。よしくんパパとゆうたくんパパが

今一度ルートを確認した。よしくんパパはもちろん、しっかり交通情報を頭に叩き込んでいた。

良い天気だ。出発した。よしくんは相変わらず我が娘達に挟まれ、冒険計画を話し合っていた。

そして、最後にまた明美先生のオチで破壊的な爆笑をした。懲りない人達だ。

大人は笑ってごまかすしかない。よしくんパパは運転が好きみたいだ。ハンドルを持つと

表情が微妙に変化する。うちの奥さんとよくんママがしきりに話しこんでいた。

ふたりともあんまりキャンプにふさわしいタイプの人たちではない。普段の会話が弾む。

3時間後、無事にキャンプ場についた。近くに川が流れていて、小さな池があつて、

静かな良い所だった。木陰が素敵だ。

着くなり、あひるさんを発見した。ミコがそれをみて喜んだ。

「こないだはきょうそうにまけたけど、こんどはかつよ!」とミコが言った。負けたのか、
さすがはベ이스ターズファンだ。

よくんパパの案内で、我々の泊まるログキャビンにたどり着いた。そしてよくんパパは

最初に子供たちを今日から一週間寝泊りする部屋へと誘導した。子供たちが飛び跳ねながら

そこに吸い込まれていく。そして、うぎゃーとかいろいろな歓声が外にも聞こえてくる。

まあ楽しいだろう、これからみんなと一緒に夜も過ごすのだ。しかし、幼稚園の先生って

大変だろうな。毎日力オスだ。

そして我々も部屋に入る。荷物を置いて背伸びをする。なんにもなくってすつきりとした

部屋だ。へんてこなインテリアもない。なんだか落ち着く。よくんパパが私にビールを

進めてきた。よくんパパが持ってきたクーラーボックスにたくさ

んビールが詰まっている。

さすがだ。ありがたく頂く。うまい。うちの奥さんが呆れた顔でこっちを見る。

キャンプ場まできてその表情はやめて欲しい。ねこも一緒だ。ねこはあたりを見回していた。

とくになんてことないけど、まあいいやといった表情だ。贅沢なねこだ。私はねこに食事を与えた。

荷物を置いてきたさゆりちゃん夫婦とゆうたくん夫婦がこっちに来た。我々は

バルコニーに集まり、ベンチに腰掛けてビールを飲んだりした。子供たちがさっそく

近くにある池に遊びに行った。私は遠くにいつちゃだめだよーと言った。

はーい！と返事をした。まあいいだろう。我々から丸見えなところにいる。

さゆりちゃんのパパはハンサムで地元ではかなり評判のよい歯科医だ。甘いマスクのおかげで

地元の奥様方のアイドルになっている。しかも腕前も素晴らしい。仕事熱心である。

本人はあんまりそういうアイドルみたいな扱いにはちょっとうんざりしているようだった。

彼は心理学にも興味があつて、”子供と歯医者”というシンプルなタイトルの本を出版している。

子供が嫌がる歯医者という現場を見てきた彼の経験を元にして、幼児の恐怖心だとか

そういう場合にどう大人が接すればいいのかがいろいろ詳しく書かれている。彼はもう、その幼児の

虫歯をみるだけでその子の家庭環境がわかるくらいになっているら

しい。すごい。洞察力がある。

興味があつたので私もその本を読んでみたが、なかなかユニークにわかりやすく現場の状況が

描かれていて、そこに彼独特の児童心理学論がわかりやすい言葉が書かれていた。面白い本だった。

本は結構売れていた。たまに講演会も開いている。しかし、本人は結構のん気で気さくな人柄で

良い感じの人だ。さゆりちゃんのママもおっとりした人で、美人だけれど本人にその自覚がなく

優しい人だ。二人は品の良いキャンプにふさわしい格好をしていた。思わず我々は見とれて

しまうが、本人たちがそういうのを嫌がるので言わない。そういうわけで娘のさゆりちゃんも

美人だ。だれもがさゆりちゃんに夢中になる。これが松下一家である。松下歯科医を経営している。

ゆうたくんのパパは高校生の時に甲子園に出場した経験を持っている。ジャイアンツファンだ。

ピッチャーをやっているなかなか注目されていたが、けがをしてしまいプロ野球の選手は

諦めたようだ。地元の父親が経営する小さな建築関係の会社に勤めている。

陽気な性格でもちろん運動能力に優れている。ちょっと走っただけではあはあ言ってしまう

私とは大違いだ。子供に野球選手になって欲しいらしく、暇を見つけては子供と野球で遊ぶ

よいパパさんだ。おかげでゆうたくんはなかなか野球がうまい。いつもよくんがボールを

投げてゆうたくんが打つのだが、パパの球に慣れているのでよくんはずっとストライクを

取れなくって悔しがっている。ママさんは結構ワイルドにのん気な人で、あんまり細かい事を気に出来ないみたいだ。いつもけんか口調で旦那と会話している。でも仲は良い。

おしゃべりだ。だいたい話の中心的存在となる。冗談が面白い人たちだ。これが高井一家である。

我々はぼけつと子供たちを眺めながらビールを飲んだりしていた。気持ちのよい午後だ。

よくんパパは相変わらず計画書をそばにしている。なんだかそのうちにフルーツバスケットをはじめそうな雰囲気だ。ゆうたくんパパと車の話をしている。私はさゆりちゃんパパと子供の

話をしていて。さゆりちゃんパパの心理学的な冗談はなかなか面白かった。

奥様方は4人でまとまってなにやら話し込んでいた。きっと非キヤンプ的な話題だろう。

遠くでミコが叫んだ。

「あひるさんもあけみせんせいみたいに おっぱいがないー！」

遠くの子供達がまたバカ笑いを始めた。懲りない人達だ。周りですかな笑い声が聞こえる

我々は一瞬、固まった。笑ってごまかすしかない。

夕方になるとよくんママの気合が入る。食事の支度だ。

よくんママは包丁を持つと微妙に表情が変化する。すごい包丁セ

ツトを一式持ってきた。

奥様方から歓声が沸き起こる。よしくんママは包丁を睨み付ける。状態の確認だ。気合が入ってる。

本日は奥様方に調理を任せる。楽だ！ 私はこういうのを求めているのだ。しかしそんなこと

さゆりちゃんのパパに言えないので黙ってる。子供たちが調理風景を見ている。さゆりちゃんの

ママがみんなを引き連れてどこかにお米を洗いに行った。よしくんママが華麗なさばきで

じゃがいもの皮を剥く。にんじんの皮を剥く。たまねぎを見事なさばきでスライスする。

奥様方から拍手が巻き起こる。よしくんママは一瞬、謙遜するが、またさばき始めると表情が変わる。

なんだか包丁の実演販売みたいだ。よしくんパパは苦笑いでこつちを見ている。男のテレパシーだ。

そして、今日はカレーライスだ。

みんなで大きなテーブルを囲み、散々飲んだがビールで乾杯した。食べる。

カレーライスなんてそんな誰が作っても変わんないだろうと思っていたけど大間違いだった。

「うまい！」ゆうたくんパパが言った。

我々は驚きと賞賛を繰り返しながらそれを食べた。子供もなんか夢中になって食べてる。

めいっばい遊んだせいもあると思うけど、たしかにこれはうまい！

よくんママは楽しそうだった。奥様方はそばで見てもどうしてこんなにいつも自分が作るカレーライスと全然味が違うのか理解出来なかったみたいだ。才能だ。

ゆうたくんパパが賞賛のまとめ役を請け負っていた。ゆうたくんママが微妙にパパを睨んでる。さゆりちゃんのママがしきりに作り方のコツをよくんママに聞きまくっていた。

私もそれに耳をかたむけた。興味がある。うちの奥さんは黙ってカレーを食べてた。作り方には興味がないようだ。食べる方に興味がある。うちの奥さんらしい。

「ぱぱ」とミコが私に言った。

「なに？」と私は言った。

「こんどからぱぱもこういうかねーつくってね」とミコが言った。みんなが笑った。あのねー

そして、みんなで片づけをして（そこは私が仕切る、）、夜の中、ぼけっとした。

子供軍団はみんなパジャマに着替えて部屋の中でワイルドに盛り上がっていた。

どうせまた明美先生のことだろう。というわれわれも、ゆうたくんパパがなんと

麻雀卓と牌を持ってきていた。奥さんが文句を言っている。しかしわれわれは

部屋を男性、女性で分けることにして、男軍団は麻雀をすることになった。

今頃、女性軍団はしばらく渋い顔で楽しそうにわれわれの愚痴をこぼすだろう。まあいい。

ゆうたくんパパはなかなか気が利く。車にあらゆるものを積んできている。

というわけで我々はそれぞれの世界でワイルドに盛り上がった。たまにはよい。

朝もよしくんママが包丁を振るった。料理屋さんレベルの美味しい朝食が出てきた。

昨晩はなかなかワイルドな麻雀ナイトだったので、頭がぼけていたが、なんだか

目の覚めるようなおいしい食事だった。才能だ。

「お店でも開けばいいのに」と私はよしくんママに言った。

やってみたいけど、今はまだ無理だな、と言った。まあそうだろう。まだ子供の手がかかる。

子供たちは朝からワイルドだった。冒険計画があるらしい。よしくんがそれを仕切る。

冒険の内容は秘密らしい。大人には内緒だ。まあ子供らしい。

「危ない所に行っちゃだめよ」とよしくんママが言った。

「なんかあったらでんわする」とよしくんが言った。よしくんは携帯電話を持っている。さすがだ。

まあ、近くにあんまり危険な所がない。大丈夫だろう。ミコとマコもいる。

「マミも連れて行ってね」とうちの奥さんが言った。マミはねこのことだ。

うちの奥さんがにやりとしている。なんかたくらんでいる。

わかったとミコが言った。　そうして子供軍団の冒険が始まる。

003

最近アメリカで子供の誘拐が多発していた。それに最近、UFOの目撃者が多発している。

インターネットやテレビのニュースが騒ぎ立てた。ミステリアスだ。まだ誰一人、

家に戻ってきた子供はいない。大統領はこれは緊急事態だ、軍隊を動員し、あらゆる

手段を講じてなんとかしても無事に解決する、とテレビで演説した。あるものは拍手を送り

あるものは国家はなにか隠していると騒いだ。テレビのニュースはしばらくこのニュースを

トップに持ってきた。様々な噂や仮説がネット上を駆け巡る。誘拐された子供たちの多くは

国家の重要な鍵を握る人物だ、という情報も流れた。そしてそれは公表はされていないが

事実だった。科学者、政治家、大手の会社社長、国家の最重要機密を握っている人達だ。

もちろん大統領並びにごく一部のトップクラスは事件の全貌を知っている。しかし、

そんなことを世間に公表したら世の中が混乱する。まだまだ公表するには準備が必要な情報なのだ。

アメリカ国家重要機密機構に属する人達は連日タフな会議を開いた。タカチャン星人が攻めてきた。タカチャン星雲は地球から1光年離れた所にある。

地球に似ている星だが、地球より約40年分くらい文明が進んでいる星だった。

アメリカ宇宙局が最近接触に成功していた。まったく新しいテクノロジーをたくさん持っていた。

アメリカはいくつかのテクノロジーをタカチャン大王から好意で教えてもらった。

タカチャン星人は基本的にみんな温和な人たちだった。でもそのテクノロジーを公表するには

まだここ地球では難しい。世界の経済システムを一気に混乱させるくらい新しいテクノロジー

なのだ。しかし、タカチャン星人に地球の理屈は通用しなかった。

なぜやらないんだ？と

連日タカチャン星人はアメリカのトップクラスに詰め寄った。そしていつしかアメリカは

強引にこの交流を遮断した。タカチャン星人は怒った。普段は温和だが理不尽だと感じると

一転して怒る。怒るとちょっとみさかいがつかなくなる。ちょっと変わった人たちだった。

タカチャン星人は何人かのアメリカ人と手を組みアンダーグラウンドにアメリカを攻めた。

シアトルにあるセーフコ球場の地下に秘密の司令塔を作った。そんなのはタカチャン星人にとっては

簡単なことだ。彼らは有能な弁護士を雇い、執拗に法律で国家を攻めた。インターネットで

執拗に国家の隠匿を遠まわしに示唆し、世論を盛り上げた。機密を握る男の

息子や娘をうまく誘き出し、UFOでシアトルまで運んだ。子供を殺すつもりはまったくくない。

子供は縛らず、全球団のマスコットや、その他の子供に人気のキャラクターなどになって

一緒に楽しく遊んだ。腕の良い調理人においしい料理を作らせた。

子供たちは事を忘れて

喜んでいた。パパが忙しくって遊んでくれない。みんな小さい子供だった。みんなで歌を

歌ったり、踊ったりして遊んだ。国家はまだ子供がおかれている状況を把握できずにいた。

まさかシアトルの野球場の地下に子供が集められているなんて想像も出来なかった。

アメリカ軍は普段の軍隊姿をやめ、小型の銃を隠して様々な都市に派遣された。これ以上

誘拐される子供を増やすと收拾がつかない。アンダーグラウンドな戦闘状態に突入した。

なにしろタカチャン星人も一見普通の人と変わらない格好で行動していた。何人かの

あわれな一般庶民が軍に激しく問い詰められたりもした。連日上空を戦闘機が飛び交っていた。

無言のアピールだ。庶民にはわけがわからなかったが、異常事態であることは良くわかった。

アメリカは一人の有能な男に重大な任務を託すことになる。ベツケンガー大佐だ。

ベツケンガーは身長は190くらいでボディービルダーのようなたくましい体の男だ。

頭脳も優れている。様々な特殊軍事訓練をパスし、あらゆる戦術論

を理解している

エリートだ。ともかくまずは子供を探さなくてはいけない。大統領は彼にあらゆる

国家機関の指導権を許可した。彼と大統領が握手した。

「それでは」 と彼は敬礼をした。

004

「みななもの！いくぞ！」とよくんは高らかに宣言した。小さな旗を右手に持ち高く揚げた。

片方にはジャイアンツのチームロゴがよくんとゆうたくんの手書きで描かれていた。

説明してくれないとわからんレベルだった。ミコとマコの執拗な文句により片方には

ホッシー君の似顔絵が描かれていた。さゆりちゃんとその仲間、野球戦隊ハマレンジャーの誕生だ。

昨晚の冒険会議でゆうたくんとよくんはジャイレンジャーにする
と主張した。

しかしミコとマコがそれを許さない。ハマレンジャーを主張する。
そしてまたいつもの

お互いのチームいびりがはじまった。さゆりちゃんがぼけつとクールにそれを見つめていた。

さゆりちゃんは野球にまったく興味がない。さゆりちゃんはブラット・ピットのファンだった。

さゆりちゃんのママがファンなのだ。しかし、いつまでたっても結論がでないので

さゆりちゃんは女の子の味方についた。これで3対2だ。その後

簡単にゆうたくんが

裏切りを表明する。よしくんは自身が勝手に隊長であるとしていたのではらく渋ったが

しかたがない。そういうわけで妥協案として旗のロゴはそれぞれのロゴを作ることになった。

その後に、さゆりちゃんがぐずった。自分の存在が反映されていない。そういうわけでゆうたくんが

チーム名にさゆりちゃんを加えた。なんだかコミカルに長い名前となったが仕方がない。

さゆりちゃんとその仲間、野球戦隊ハマレンジャーの誕生だ。

よしくんが先頭に立った。よしくんは携帯電話を一度確認し、それをポケットにしまった。

ミコとマコがそれに続く、その後にさゆりちゃんとゆうたくんが続く、その後にねこがとぼとぼと

着いてきた。なんだか面倒くさそうだった。相変わらずだ。

よしくんママが遠くに行かない様に、お昼過ぎには帰ってくるようにと注意した。

よしくんは今一度ママに携帯電話を見せ付けた。大丈夫だ、なんかあったらちゃんと連絡する。

無言のアピールだ。この辺りには別に危険な動物はいない、まあ大丈夫だろう。

子供軍団はまずは池の反対側にある林へと向かった。特に理由はない。これは直感だ。

池ではあひるさんたちがのん気に浮かんでいた。平和な光景だ。今日も良い天気だ。

よしくんはなんだか良くわからないけれど、わくわくしていた。さゆりちゃんはちょっと

この冒険に対してあんまり乗り気ではなかったが、着いてきた。仲間はずれにされたくない。

さゆりちゃんはちよつと妙に大人っぽいところがある。教育の賜物だ。

ゆうたくんはさゆりちゃんのことをちよつと気に入っている。なんといつてもさゆりちゃんは美人だ。

ゆうたくんパパも家族でどこかに出かけている時でも、綺麗な女性を見るたびに

正直に表情に表し、ピーピー言ったりもする。いつもそれで奥さんとけんかになる。

結婚前は相当なナンパ男だったらしい、実は奥さんも鎌倉の海岸でナンパされたのだ。

でもそれ以来、なぜかナンパは止まった。なぜかはわからないけどまあ、いいことだ。

もちろん結婚してからは浮気は一切していない。でもそういうせはまだ抜けないらしい。

そんなわけでゆうたくんもそういう影響を受けている。でもいつもパパに男の子は

女の子を守らなくてはいけない、とゆうたくんはいつも言われている。教育の賜物だ。

我々、親軍団はそんな子供軍団のコミカルな背中を見ていた。その後によしくんママは

なんだか見たこともないような美味しそうなおつまみを作った。子供が冒険に夢中になる間、

大人は美味しい料理に夢中になる。その時にさゆりちゃんパパがクーラーボックスを持ってきた。

中にはちよつとそこら辺のスーパーではお目にかけない類の白ワインがたくさん収められていた。

いろいろ講演会に出たり、近所のお金持ちな奥様から頂いたりして

たくさんの良いワインが

家にストックされているらしい。グラスも人数分用意されて、さゆりちゃんパパは手際よく

ワインのコルクを抜いた。私とゆうたくんパパが歓声を上げる。冒険の話から触発されて

我々は美味しいおつまみを食べ、美味しいワインを飲みながら、小さい頃の思い出話で

ワイルドに盛り上がった。よしぐんのパパとママとさゆりちゃんパパとゆうたくんパパは

年は違うけど、われわれが住んでいる土地で生まれ育った人たちだ。小学校も同じらしい。

ワインはたくさんあった。そうして我々は大いに盛り上がった。ゆうたくんパパたちが

小学校の校歌を披露したりした。私は街を転々としてきた人間なのでなんだかうらやましかった。

そうしてわれわれはワイルドに盛り上がり、良い日差しの中でみんな寝てしまった。

子供軍団は池の反対側まで来ていた。あたりはしんとしていた。キャンプ場が反対側に見える。

こっちはなにもかも手付かずになっている。蝉の音が鳴り響く、鳥の鳴き声もそれに応戦する。

その時にミコがうさぎさんたちを発見した。

「うさぎさんだー！ー！」「ミコが叫んだ。

うさぎさんはミコの声に反応した。そして林の奥に逃げた。よしぐんがうさぎを追いかけよう、

と提案した。みんながそれに賛同した。さて――

うさぎは少し傾斜になっている林の中を走った。うちのねこがなにか珍しいことに興奮して

うさぎを追いかけた。マコがマミまって！と言ったがねこは思いつきり無視した。

そうしてみんなが夢中になってうさぎとねこの後を追いかけた。また――！

しばらく進むと、ちよつと広い所にでて、そこに大きな穴があった。うらぶれた防空壕みたいな穴だ。うさぎさんたちはその中に入っていた。

ねこはその穴の前でぴたつと止まった。子供軍団がしばらくその穴の前で呆然としていた。

大人でも十分入っていけるような大きな穴だった。中は真っ暗だった。

ミコは念の為にペンライトを持ってきていた。

それで穴の中に光を当ててみたがなにも見えなかった。

「ちよつとはいつてみようか」とよしくんは言った。

さゆりちゃんが怖がった。ゆうたくんが大丈夫だよと言った。でもゆうたくんもちよつと

怖がっている。しかしちよつと中にいつてみたいという気持ちもある。好奇心が強い。

うちの娘達は案外こういうのは怖がらない。さあ、いつてみよう。とよしくんが言った。

さゆりちゃんの手をゆうたくんが握り締め引つ張った。ミコが先頭に立ってペンライトを

前方を照らした。その後をよしくとマコとねこ、うしろにさゆりちゃんとゆうたくんが続いた。

水がしたたり落ちる音が綺麗にあたりに響いた。さゆりちゃんが怖がる。ゆうたくんが

なんとか慰める。30メートルくらい進んだところで前方に小さな灯りを発見した。

さゆりちゃんが完全に固まった。しょうがないから先にミコとマコとよしくとねこが

様子を見に行くことになった。よしくんがいつものごとくうちの娘達に挟まれた。

腕を掴まれた。よしくんも結構怖がっている。それでも強引にうちの娘達に誘導された。

そこにはひとりの変なコスチュームを着た男がにこにこと立っていた。

目には仮面舞踏会に付けていくようなものが付けられていた。変なマントを付けている。

白いブーツに黒いタイツ、変な半ズボンをはいていて、頭に変な漫画に出てくるような鎧を

かぶり、ひらがなで”あんなにかかり”とプリントされた白いＴシャツを着ていた。

「あんだだれ？」とマコがポカンとした表情で言った。

「私はこの遊園地の案内係で御座います。お客様は何名でございますか？」と男はにこにこと言った。

意味がわからないけどなんだかとても良い人そうだった。

「ちょっとまって」とミコが言った。そしてよしくにさゆりちゃん達を連れてくるように

頼んだ。ペンライトをよしくに預ける。よしくんもポカンとしていたけど、まあそうすることに
した。自分が描いていた冒険の内容とかなり食い違う。ではどうい
う冒険をイメージしていたかと
いうとちよつと答えられない。

よしくんがゆうたくんとさゆりちゃんを連れてきた。もちろんポカ
ンとした。

あんまりにもばかげた光景をみたせいかさゆりちゃんの恐怖心もど
つかに飛んでいつてしまった。

「ゆうえんちつてどこ？」とマコが言った。案内係はにやつと笑っ
た。

そして案内係は目の前にあるでっかい紫色のカーテンを盛大に開け
た。目の前にちよつと大きな
サイズの砂場があった。みんなはそれをポカンと見ていた。

「ゆうえんちつてすなばのこと？」よしくんが聞く。

「はい！それで御座います。いかがでしょうか？素晴らしいで御座
いますよう！」と案内係は
自信を持って言った。

「じえつとこーすたーはないの？」とゆうたくんが聞いた。

「みつきーまうすはないの？」さゆりちゃんが聞いた。

「きりんさんはいないの？」とミコが聞いた。まだ勘違いしている。

「めりーごーらんどもないの？」よしくんが聞いた。

ない、と案内係はなんだか申し訳なさそうに答えると、子供たちから残酷なブーイングが

飛び交った。今時の子供をなめておるのか？ 案内係は突然泣き出した。

「ごめんなさい、今の子供は砂場なんかで遊ばないのね、、僕が悪かった、

悲しいけど、、僕が悪いんだ！ 僕が悪いんだ！ みんなを喜ばせたかった、、」

と案内係は本気でとても悲しそうに泣きながら言った。感情表現が妙に豊かな大人だ。

「ごめんなさい！ すなばたのしいよ！ だからなかないで、」とマコは言った。

そついうのに弱い。いつもうちの奥さんと人情ものの時代劇を見ているせいだ。教育の賜物だ。

「本当ですかー！ うれしいうれしい！！！」と案内係は簡単に泣きやみ、踊りながら叫んだ。

、まあ、しょうがない、といった感じでみんなは目を合わせた。わかったとミコが言った。

「それではお一人様50円頂きます。」と案内係は落ち着きを取り戻してきっぱりといった。

おかねとるのか？とミコが言ったが、また泣きそうな顔を始めたの

でそれ以上文句を言うのを

諦めた。よしくんがお金を少し持っていたので全員分をまとめて払った。ねこもいれて

全部で300円だ。案内係はありがとう御座います。と丁寧にお礼を述べて、砂場にみんなを

案内した。そして紫色の幕が閉じられた。子供軍団は良くわからないといった表情で

しばらくその砂場を眺めていたが、ゆうたくんが砂場に入っていた。ねこが続いた。

そしてみんなも砂場に入った。最初はぶつくさ言いながら適当に山を作って遊んでいた。

ゆうたくんがふざけて、小さなふたつの山を作り、あけみせんせいだよ！と言った瞬間に

みんなのインスピレーションが爆発し、みんなそれぞれ自分のママの胸の形を作ったりして

見せ合い、大笑いした。懲りない人達だ。そうしているうちになぜか砂場遊びに大いに

盛り上がり、大きな山を作ったり、家を作ったり、水を流して川を作ったりした。

そして、砂場が突然がたとゆれ始めた。みんながパニック状態になった。

さゆりちゃんが泣き出す。ゆうたくんがさゆりちゃんにしがみついて必死に怖さを

こらえていたが、泣き出した。よしくんも泣き出す。そして砂場はだんだんと沈んでいった。

そして砂場は外枠を残し、すべて沈んだ。ぼつかりと暗い穴が開いている。

案内係はそれを一度眺めてにこにここと笑った。成功だ。なにも問題はない。

うわ――――

――！！！！！！

と子供たちは叫んだ。そして気づくと大きなトランポリンの中で何回か跳ねていた。そして、動きが

止まった。砂はどっかにいった。みんなけがはない、痛くもなかった。ゆうたくんが

面白がって大きなトランポリンで跳ねた。しばらくみんなトランポリンで遊んだ。

なかなか面白い、でもそんなことしている場合でもない。光はあの砂場からさしていた。

あたりは真っ暗だ。みんなはトランポリンの真ん中に集合して会議を始める。

「どうすればいいの？」よしくんは不安そうに言った。

マコはちよつと立ち上がってペンライトであたりを見回した。トランポリンの周りを

跳ねながらぐるぐると周った。みんなが座りながら跳ねている。そしてひとつの穴を

発見した。ちよつと暗くてどういう風になっているのかわからないけど、とにかく

なにか道がある。下をみるとその方向に階段があつた。間違いない、われわれが進む道は

こつちだ。するとねこが突然その階段を降り始めた。マコがこつち！とみんなに言った。

みんながちよつと飛び跳ねながらマコの方に向かった。なんだか名残惜しい、こんなに

面白いでっかいトランポリンもない、また暗いところを歩くなんて

嫌だ。しかし行かないと
どうしようもない。お昼過ぎには帰らないとママに怒られる。

ねこはその入り口のところで面倒くさそうに待っていた。本当に人間って奴は面倒な生き物だ。

そうつぶやいた。マコが先に降りて、階段をペンライトで照らした。みんながおそろおそろ

降りてきた。みんなが階段を降りたところでその入り口を照らした。丸い穴だ。

「またあなた、」さゆりちゃんがぼやいた。

ねこが先に入った。しょうがないのでみんな着いて行った。いまのところ役に立つのは

ねこしかいない。みんなが続く、穴は前面ガラス張りになっていた。大人も十分に

立てるくらいの大きな穴が続いていた。ガラスの向こうには星がいっぱい輝いていた。

「きれい！」さゆりちゃんが感動して言った。さゆりちゃんは綺麗なものには目がない。

ガラスは一点の曇りもなく透明でなんだか宙を浮いて歩いているような感覚になった。

今まで見たこともない美しい星空が360度に見えていた。足元にも星が輝いている。

子供達はゆつくりとそのガラスチューブの宇宙を歩いた。なんだかこの遊園地は

驚かしたり、楽しませたり、がっかりさせたりとわけがわからないけど、これだったら

50円の価値はあるとだれもが思った。憎い演出だ。でも感心している場合でもない。

さゆりちゃんがうつとりしている。みんなもうつとりしている。その時にゆうたくんが

ふざけて、おばけがでるぞー！と言った瞬間、辺りは急に真っ暗になり、怖い顔の人達が

あたりを取り囲み、こわい、こわい、くらい、こわい、という声がいろいろな方向から聞こえてきた。

さゆりちゃんがまた泣き出す、足が止まった。ゆうたくんも半泣きだ。

「もー！ゆうたがよけいなこというからこうなる！」とミコが怒った。

「ど、どうすればいいの？みこちゃん、」とゆうたくんは泣き顔で言った。反省もしている。

「こわがっちゃだめ！こういうのはきいちゃいけないの！」とミコが言った。

私が以前話したうそつき森の教訓だ。うそつき森で絶対耳を傾けてはならない。

「みんなでうたをうたおう！」マコが提案した。みんながわけがわからないがここは

マコの言うことを聞いた方がいいと賛成した。他ににも良い案が浮かばない。

「わたし、ぷりんすのれつつげっとくれいじーがいいー！」とミコが提案した、が

そんな曲知っている6歳児はいない。却下。

「まこはやっぱですていにーちゃんいるどのさばいばーがいいー!」
それも却下。難しすぎる。

私の教育の賜物だが、いまいち世間とかみ合っていない。うちの家族の弱点だ。

しょうがないのでみんなで話し合った結果、歌を作る事にした。みんなで作詞をして
マコが適当にメロディーをつけた。こういう歌だ。

おっばいちいさい あけみせんせー! (あけみせんせー あ
けみせんせー!)

やまがたせんせと けっこんしたい! (けっこんしたい!
けっこんしたい!)

みんなだいすき あけみせんせー やさしいやさしい あけみ
せんせー

だけとおっばいちいさいちいさい (だけとおっばいちい
さいちいさい!)

みんなが爆笑した。どこまでも懲りない人達だ。だかそれは役に立
った。

みんなでその怖い声を聞かないように耳をふさいで、歌を無限ル
ープした。

みんなで歩き出す。ねこは歌を歌わない。本当に面倒な人たちだ。
先が思いやられる。

とばやいた。歌声が鳴り響く。するとまたさっきの星空に戻ってき
た。歌うのをやめる。

「もうこんどはへんなこといわないでね」さゆりちゃんはゆうつく
んを注意した。

ゆうつくんがしょげる。もう言わないと約束した。そしてまたその
星空の中を進んだ。

すると先のほうになにかの明かりが見えてきた。もうすぐだ。しか
しさゆりちゃんは見事に

この光景に見とれていた。なんだかこれが終わってしまうのが名残
惜しい、しかしそんなこと

いつてもいられない。先を急ぐ。なんだか変な冒険だ。でも面白い。

もうすぐで光の所まで来るとねこが急にまた走り出した。マコがそ
れにつられて走り出す。

みんなも走り出す。

005

明美先生は夏休みに入り、ちょっと今まで取らなかった有給休暇を
まとめてとった。

夏休みにももちろん仕事はあるのだが、ちょっと無理を言っ
てとった。

園長さんも普段は真面目に働いてくれるし、なんだか元気がな
いようなので

なにも言わずにその許可をした。

「どこか具合でも悪いの？」と園長先生は心配そうに聞いた。

明美先生は体は大丈夫です。ただちょっと疲れただけです。と答え

た。でも元気がなさそうだ。

明美先生は両親の家で生活をしていたが、家にいると両親が遠まわしに結婚の話をしてくるので落ち着けない。親は早く孫が見たいだけだ。明美先生はちよつとどこかに旅行しに行こうと

考えた。別にどこかの温泉にいつて体を癒すとか、素敵な海岸で日焼けしたりとかは求めていない。

ただ、静かなところでばけつと考え事をしたいだけだった。友達にそれとなく聞いたら

長野にいい所がある、といったのでその場所を聞いて、ネットで調べて、そこに10日間ほど

の宿泊を電話で申し込んだ。空きはある。当方はあんまり若い人が好むようなところではないが

よろしいでしょうか？と丁寧フロント係は答えたが、かまわない、静かにしたいだけです。

と明美先生は答えた。それではご予約承ります、ご来店お待ち申し上げます。とフロント係が

答えた。ありがとう、といって、電話を切り、適当に着る物だけをバックに詰めた。

両親に旅行に行つて来る、と告げた。彼氏？と両親はにやにやひやかした。そういうことじゃない。

部屋に戻りベットに転がった。私は山形先生が好きなのだと思う。

けどどうも私は押しが弱い。

なにごとにも遠慮しがちになる。同僚の水野さんにいつもそう言われるし、自分でも良くわかつてる。

だから子供たちにもからかわれる。悪意はないのはわかるけどぐさつとくる。なんか鬱だ。

山形先生は本当に子供好きで仕事も熱心だ。夏休みも出て仕事をしている。年齢は30歳だ。

特にお付き合いしている女性もないみたいだ。一人暮らしをしている。北海道出身の人だ。

背は180以上くらいあるし、体もがっちりしている。高校生の時はバスケットボール部にいた。

山登りが好きでお休みの日はよく行くらしい。私は背は150ちょっとしかないし、胸は

この通りだし、高校生の時は活け花部なんてわけのわからないところにいたし、山登りは苦手だ。

どころがっても不釣り合いなカップルだ。しかし、好きだ。あんなに良い人はそうはいない。

しかし、不釣り合いだ、でも好きだ。どこにもいけない。無限ループだ。子供たちみたいにな

あつさりと正直に言えたら楽だろうな、と思った。ともかく一回この辺から脱出しないと

駄目だ。まともに考えられそうもない。今は考えるのをよそう、と思った。

そして、次の朝早く、明美先生は長野へと向かった。

彼女はその小さな駅を降りた。周りにはあんまりお店がなく、遠くにその旅館らしき建物が見えた。

辺り一面畑やら草むらやらに囲まれ、車も少なくしんとしていた。

風がさらさらと吹くと

草が揺れ心地よい良い音をたてた。彼女はなんだかとても寂しい気持ちになったが、まあ良いとこだ。

背伸びをした。気持ちが良い。私は一人になりに来たのだ。ベストじゃないか、と思った。

旅館に入り、フロント係が丁寧に挨拶をした。館内はすこし古ぼけていたが、なんにも余計なものがなくてなんだか落ち着く。フロント係に荷物を預けて部屋に案内された。部屋で館内の利用方法をフロント係が説明した。そして部屋をでていった。一人だ。窓の外も一面畑だけが広がっていた。温泉もある。余計な物はなにもない。素晴らしい。うちの両親にがたがた言われながら

ご飯を食べたりすることもない。さて、と彼女はとりあえず温泉にでもつかりに行くことにした。

タオルを持って部屋を出た。今まで真面目に働き過ぎたな、と彼女は思った。でも子供は大好きだ。

ミコちゃんとマコちゃんはちょっと大変だけど、元気な良い女の子だ。私も見習わなくてはいけない。

お風呂の入り口を開けた。なかなか良い温泉らしい。少し元気が出てきたのかもしれない。

しばらくは頭を空にしよう。彼女はそうつぶやいた。

006

「うさぎさんだー！ー！！」とマコが言った。

光の向こうにはちょっと広い部屋があった。下には干草がまんべんなく敷き詰められていた。

そこにうさぎさんが2人、あひるさんが2人いた。

「よお！」とひとりのうさぎさんが言った。右手を上げた。

「うさぎさんがしゃべった！ー！！」とさゆりちゃんがびっくりして

いった。

「うさぎがしゃべっちゃいけねってのかい？」ともうひとりのうさぎさんが言った。

態度が悪い、しつけがなっていない あひるさんがぴーぴーはやしたてた。

「いや、べつにいいんだけど、」とさゆりちゃんはおどおどといった。

「おいらたちはうさぎさんシスターズだ！ こっちはあひるさんブラザーズだ！よろしく！」
と良くわからない自己紹介をした。間抜けなネーミングだ。

「こんにちは、うさぎさんしすたーずさん」よくんが言った。礼儀正しい。うちのねこが

冷淡な目でうさぎさんを見ていた。うさぎさんがねこを睨んだ。

「お！ なんかそこにへんてこりんなくろねこがいるなー！

にんげんなかといっしょにいるからあたまおかしくなったんじゃないかー？」とうさぎさんは

ねこをからかった。あひるさん達もあとに続いてピーピーガーガーはやしたてた。

その時、ねこの頭の中でパチンとなにかが言った。ねこはプライドが高かった。

なんかうさぎさんごときにバカにされるのはねことしては許せない。怒りが爆発する。

ねこはすたすたとうさぎさんに歩み寄った。そして言った。

「あんたらみたいな態度のわるいうさぎなんかこうしてやる！」とねこは言った。

子供たちがびっくりする。ねこがしゃべるのも初めてだった。ミコとマコも初めてだ。

そしてねこは右手を上にあげた。するとうさぎさんが宙に浮いた。うさぎさんはびっくりして

なんにも言えなくなった。あひるさんたちがポカんとそれを見ていた。子供たちもポカんと

それを見ていた。洞窟にはいったら変な男がいて、砂場で明美先生のおっぱい作ったら

砂場が沈んで、トランポリンで遊んで、宇宙の中を歩いたら、お化けが出てみんなで歌を

歌ったら、今度はうさぎさんが宙に浮いてる。そんなの誰にも言えない。わけがわからない。

「ごめんなさい、ねこさん、ごめんなさい、ねこさん、ゆるしてー！」「とうさぎさんが

泣きながら言った。するとねこは右手を下げた。うさぎさんがゆっくりと地面に落ちた。

「ありがとう！ねこさん！ありがとう！ねこさん」「とうさぎさんは言った。

「おれたちについてこい！いいな！」とねこは言った。うさぎさん達とあひるさん達が

何度もうなずいた。そしてねこに新しい部下が出来た。

「ほら！いくぞ！道を案内しろ！」とねこはうさぎさんに命令をした。

うさぎさんはしかたがない、道を案内することとなった。ねこがミコにいくぞ！と言った。

頼もしいねこだ。だが態度が悪い。だがついていくしかない。子供たちはうさぎさんの後を

ついていくことにした。うさぎさんは部屋の奥にある隠しドアを開いた。中には暗い穴があった。

「またあなだ、、」さゆりちゃんがぼやいた。そしてゆうたくんを睨んだ。

「こんどはいわないよー さゆりちゃん、」とゆうたくんは言った。自分だってもうあんな目に会いたくない。

うさぎさんが先頭に立ってその暗い穴を進んだ。少し小さな穴だった。並んで歩けない。

子供たちはミコがペンライトを持って先を照らし、みんなで手を繋いで歩いた。

一番うしろにマコがいた。でないとまたおかしなことになりそうだ。だんだんと道が広くなっていた。結構長い間歩いたような気がする。ねこは時折、子供たちに

遅い！と文句を言った。ミコは言い返したいけど、今は黙ってついていくしかない。

なんてこった。うちのねこだって魔女だから別に不思議じゃないけど、しゃべったのは

初めてだったからうまく飲み込めない。しかもなかなか頭が良い。なんてこった。

そして、穴はもう並んで歩けるくらい広い所になっていた。すると

道の横になんだか

わからないけど、大きな宝物の箱があった。よしくんが叫んだ。

「たからものだー！ー！」　よしくんはなんだかやっと思険らしいアイテムが出てきたことに

喜んだ。そしてみんなが近づいてそれを開けた。なかにはみんなの衣装が詰め込まれていた。

「なにこれ、」　「ミコがつぶやいた。なんだかがつくりだ。

宝の箱には女の子用の衣装が3式、男の子の衣装が2式あった。一番上にひらがなで

「きがえろ」と書いてあった。さゆりちゃんがそれを読み上げた。

「とにかくきがえたほうがいいみたい、」　「さゆりちゃんがつぶやいた。

ゆうたくとよしくんはさっそく着替えてみた。さっきの案内係みたいな変な格好だった。

女の子たちがそれを見て爆笑した。よしくんがやくミコちゃんたちも着替えると言った。

女の子用は3式あったが、一式はなんだかお姫様みたいに素敵な衣装だった。

マコとさゆりちゃんがそれを奪い合った。さゆりちゃんはこういう素敵なものには目がない。

しかし、マコもさゆりちゃんに対する対抗心からなかなか譲らなかった。

ゆうたくんがさゆりちゃんにゆずろーと言ったがマコが睨み返した。ゆうたくんが黙る。

その衣装には素敵な透明の靴があった。ミコがその靴にぴったりあ

うひとがそれを選べばいいと提案した。そうしてシンデレラコンテストがはじまった。が、マコの足にはぴったりではなくさゆりちゃんの足にはぴったりと収まった。さゆりちゃんの勝ちだ。さゆりちゃんが喜んだ。

そのとたん、マコが座り込んで大声で泣き出した。なんだか急に自分が見ずばらしい、惨めな女の子になった気がした。悲しくなった。普段ならこんなことで泣かないけど、泣くしかなかった。悔しいけど認めた。ミコが慰めた。さゆりちゃんもごめんなさいと謝り、泣き出した。

よくくとゆうたくんもマコのそばに来て謝ったり、慰めたりした。しばらくマコは泣いていたが、泣き止んだ。さゆりちゃんにごめんなさい、と謝った。さゆりちゃんも謝った。ふたりで

抱き合った。これで仲直りだ。ねこはそれを冷淡な目で見つめていた。本当に人間は面倒くさい生き物だ。ぶつくさとねこは言い始めた。そして、女の子たちも着替えた。

ミコとマコの衣装も別に悪くない。かわいい衣装だった。たださゆりちゃんの衣装は特別だったし、それは見事に似合っていた。さすがだ。なぜかジャイアンツのメガホンがふたつ、ベ이스ターズのメガホンもふたつ、ボールがたくさん、それとホッシー君の頭の部分があった。

ねこが冷静に見つめる中、子供たちがあたふたと盛り上がっていた。その時に地面がぐらぐらとゆれ始めた。子供たちがまたパニック状態になった。

「またおちるの？」さゆりちゃんがまたばやいた。

地面ごと子供たちが落ちていった。ねこはやれやれといった感じでそれを見ていた。

うさぎさんシスターズもあひるさんブラザーズもポカンとそれを見ていた。

「やろうどもー　いくぞ！」とねこは言った。

そうして、ねこ軍団と子供軍団は別々の道に行くこととなった。

007

「たたたたたた、たいへん！！！」とよしくんママはぐるぐると回っていた。

我々はすっかり心地よい午後の中で寝ていた。その大声でみんなが起きた。

起きたら、よしくんママが携帯電話を片手に持ち、見つめながらぐるぐる回っていた。

感情表現が豊かな人だ、と思ったがそんな場合ではない。わけを尋ねた。

「つつつつつつながらない！！！」とよしくんママはまたぐるぐるまわり続けた。

とりあえずさゆりちゃんママがそのぐるぐるを止めて、座らせて落ち着かせた。

よしくんがなんだか電波の届かない所にいるらしい。はーはー言い

ながら

よくんママが説明した。みんながどうしたものか考え始めた。とにかく一回

手分けして探すしかない、と結論が出た所で、うちの奥さんの頭の中で

パチンと何かが言った。始まった。私はまたか、と心の中でばやいた。

よくんママが即座に反応した。すでに以前の誘拐事件でこの事は心得ている。

「きききききたー！ー！ー！ー！ー！」とよくんママがうちの奥さんを指差した。

頼むからもうちょっと落ち着いて欲しい。それじゃ、まるでエイリアン扱いだ。

みんながうちの奥さんを見た。なんだかとても背筋が伸びていきりつとしている。

みんなもつられてぴりつと背筋が伸びた。なんだか良くわからないけれどなにも言えない。

奇妙な緊張感が走る。そして、うちの奥さんは目を閉じ、両方の手のひらを上に広げ

しばしの間、空白が流れた。われわれはポカンと無言でそれを見ていた。そして目を開けた。

「さあ、冒険がはじまります」とうちの奥さんは言った。みんながポカンとしていた。

するとうちの奥さんは立ち上がり、無言ですたすたと池のほうに向かった。冒険？

私もやれやれと心の中でばやきながら立った。よくんママはみん

なにあの人に

着いていけば問題ない。うまくいえないけど、そういう人なんです、と余計に

わけがわからない説明をして、みんなを誘導した。ともかく探すしかない、行こう

とゆうたくんパパが言って立ち上がった。そうしてうちの奥さんのあとを大人軍団が

ついていくこととなった。なんだか大名行列みたいだった。近くのお客がこつちを

不思議そうに見ていた。恥ずかしい。みんなもそう思っているみたいだけどなにも言わない。

そうして、我々は池の向こうの林に着いた。うちの奥さんがまだその足を止めない。

少し傾斜のある林の中をざくざくと一行は歩いた。そうして我々は防空壕みたいな大きな穴を発見した。

「旗がある！」さゆりちゃんのママがよくんが持っていた旗を見つけた。

「この中にいるのか？」ゆうたくんパパが言った。うちの奥さんがにこりと笑った。

そして、うちの奥さんがすたすたとその穴の中に入っていた。我々も続いた。

暗かったので、我々はライトを持ってなかったが、ゆうたくんパパがオイルライターを

持っていたので、それで辺りを照らした。我々もそれぞれの携帯電話をライト代わりに

して辺りを照らした。なんだかゆうたくんパパはこういうのは好きらしい。わくわくしている。

さゆりちゃんのパパはびくびくしていたが、しっかり旦那が肩を抱いて歩いた。素敵なお夫婦だ。

よくんパパも結構こういうのは好きらしい、よくんママはうちの奥さんのことは認めているが

感受性が強いのか、ただ単に感情表現が豊かなのかはわからないが、相変わらずぐるぐる回っていた。

旦那はそれを見て苦笑いをこっちにアピールする。面白い夫婦だ。ゆうたくんママは結構強い。

旦那にちゃんと着いて行った。彼女はプロレスファンでもある。度胸がある。頼りがいのある夫婦だ。

そして、小さな灯りが見えてきた。奇妙な案内係がいるところだ。

もちろんみんなポカンと

していた。うちの奥さんのところに案内係がうやうやと寄ってきたとたん、うちの奥さんは

思いつきり膝蹴りをかまし、ヘッドロックし、バックドロップを素早くきめた。男はなんだか良く

わからないうちに倒され、動けなくなっていた。うまくしゃべれなかった。そしてあの紫の幕を

レバーを引いて開けた。みんながポカンとしている。私もうちの奥さんのプロレス技を見たのは

初めてだったので、ポカンとしていた。ずっと一緒に暮らしていても知らないことはたくさん

あるもんだ。夫婦とは実に奇妙だ。しかしそういう風に感心している場合でもない。

そこには四角い穴が開いていた。中は真っ暗だった。うちの奥さんはそこを指さして言った。

「ここに飛び込んでください」

我々はしばらくその暗い穴を見ていた。怖い。大丈夫なのか？これ？ さゆりちゃんのママが

怯えている。よしくんママが相変わらずぐるぐる回りながらもうちの奥さんを肯定していた。

懲りない人だ。ゆうたくんパパが先に動いた。

「おれ、こういうの大好きだ！」と威勢良く飛び込んだ。さすがだ。男らしい。

すぐになにか地面につく音がして、しばらくするとゆうたくんパパが大丈夫だ！ひとりずつ

飛び込め！と怒鳴った。ゆうたくんママが絶叫しながら楽しそうに飛び込んだ。

次によしくんパパが飛び込んだ。よしくんパパもなんだか楽しそうだ。楽しいことは良い事だ。

よしくんママが旦那の勇気をぐるぐる回りながら賞賛した。さゆりちゃんのパパがさゆりちゃんの

ママの手をとって言った。大丈夫だよ、ととてもエレガントに優しく奥さんに言った。

素敵な夫婦だ。美しい。ふたりはせーので同時に飛び込んだ。さすがにさゆりちゃんママは

ぎゃー！と叫んだが、なんとか無事に下に降りたみたいだ。よしくんママがぐるぐるまわりながら

なんだか興奮している。私とうちの奥さんがそれを冷静に見つめる。よしくんママがそれに

気づいて固まる。やっぱり怖いらしい、そつと下を覗くよしくんママ、なかなか飛び降りない。

しょうがないのでうちの奥さんが後ろから突き飛ばした。ああああ
あーーーーー！！！！

と叫び声が響いた。しかたがないが、うちの奥さんがなにかパワー
アップしている。

なんとか無事に降りたようだ。

「私はちよつと援軍を呼んでくるから、先に行つてて」とうちの奥
さんが言った。援軍？

そして私にマイクがついているヘッドフォンをつけた。なんだかテ
レビの実況さんみたいだ。

「指示はそこから送るから」とうちの奥さんが言った。そしてこ
つと笑った。

「まあ、わかったよ、」と私は言つて飛び込む準備をしている時に
うちの奥さんが私を

突き飛ばした。私も絶叫した。そんなのってない。別に怖くない。
だが、準備ぐらいさせて欲しい。

ちよつとは怖い、当たり前だ。誰だって怖い、私は高所恐怖症だ。
でも飛び込むつもりだった。

そんなのってない。

そうして、私はトランポリンの上に落ちて、何度か跳ねた後、そこ
に座った。

うちの奥さんは上でにやりとした後、テレポーテーションで我が家
に帰った。

トランポリンの上で、しばらくゆうたくんパパが華麗なジャンプを披露していた。

空中で回転したりして遊んでいた。なかなか優雅な演技だ。我々は拍手した。しかし、そういう場合でもない。ゆうたくんパパもそれに気づいて座り込む。

「どこに行けばいいんだ？」と私はマイクに向かって言った。

” 右！” とうちの奥さんが言った。

「右ってどっちだよ？」と私は聞き返した。ここじゃ右も左もない

” さゆりちゃんのママが向いているほう” とうちの奥さんが言った。

私はさゆりちゃんのママの方を見た。さゆりちゃんのママは私と真向かいにいた。

私の背中の方にいけばいいんだ。しかしさゆりちゃんのママは美人だ。つつい見とれてしまう。

” あほか！” とうちの奥さんがぼやいた。そういう場合ではない。

私はみんなを誘導した。行く先のトランポリンの果てに階段があった。心細い携帯電話ライトで

それを照らしながらゆっくりと降りた。みんなもそうした。行く先に穴があった。

” そこを通り抜けて” とうちの奥さんが言った。わかった、そうする

「また穴だ、」とさゆりちゃんのママが言った。遺伝だ。

私たちは一面ガラス張りの大きなチューブの中を歩いた。あちこちで、怖い顔たちが

動いていて、こわい、くらい、こわい、くらい、とぼそぼそと悲しそうにつぶやいていた。

なんだか気味が悪い。さゆりちゃんのママが可憐に怖がる。よしくんママがまたぐるぐる回り

始めた。なんだか洗脳されそうだ。その時、さゆりちゃんパパが言った。

「みんなで歌を歌いましょう、この声に耳を傾け続けるのは良くない」

さすがはさゆりちゃんパパだ。非常に冷静だ。だてに心理学を研究していない。

しかし、なにを歌っているのかわからないけど、突然ゆうたくんパパが歌い始めた。

おーまきばーはーみーどーりー――

我々も続いた。なんだか恥ずかしさはあるがそうもいつてられない。なんだかなつかしい。

ゆうたくんパパが先頭に立って楽しそうにみんなを引っ張った。りーダーだ。

くさーのうーみーかぜーがふうく

よしくんパパとゆうたくんパパが肩を組んで楽しそうに歌の主導権

を握った。

その後をだらだらとゆうたくんママがついて行く。真ん中でよくんママがくるくる

回りながらついていく、それを眺めながらさゆりちゃん夫婦と私が着いていった。

さゆりちゃん夫婦は手をつないで楽しそうに歩いていた。するといつの間にかそこには

綺麗な星空が浮かんでいた。

「きれい、」とさゆりちゃんママがつぶやいた。しばらく立ち止まってそれを眺めた。

さゆりちゃんパパはひと時、ママの肩を抱きしめ、星空をロマンティックに眺めた。様になっている。

よくん夫婦もそれに習った。ゆうたくん夫婦は半分冗談を言い合いながらも楽しそうに

手をつないでそれを眺めていた。今度は私がぐるぐる回る番だ。うちの奥さんはなにをしているのだ？

なんだか仲間はずれた。どうも私は損な役回が多い。まあでも、みんな喜んでるからいいか。

ゆうたくんパパはみんなを引っ張るし、さゆりちゃんパパは知的に冷静に対処するし、

なんとかよくんママを引っ張っていけそうだ。

しかし、先に行かなくては、非常になんだか言いにくいのだが、私はみんなにそろそろ

先に進みましょう、と言った。みんながはっと我に帰った。そうだ、先に行かなくっては。

またゆうたくんパパがみんなを引っ張った。それでよい。みんなが着いていった。

頼もしい、みんなもそれに賛成しているみたいだ。それは良いことだ。

先の方に光が見えてきた。さゆりちゃんママはなんだか名残惜しうだった。遺伝だ。

でも確かに星空は綺麗だった。足元にも星が見える。時々流れ星も見えたりする。

まるで本物みたいだった。いったいこれには何の意味が込められているのだろうか？

我々はそうして草が敷き詰められている部屋に入った。

008

子供軍団は着替えた衣装のまま落ちた。

今度もトランポリンがあった。痛くはなかった。そこは広い部屋だった。なんだか

幼稚園の教室と似ている。いろんな遊び道具がある。テレビもある、ゲームもある。

なんだかよくわからない、みんなポカンとしていたけど、まあ怖くはない。

一人のまた変な格好をした男が現れた。タカチャン大王だ。みんなが一瞬ぎくつとした。

「いらっしやいいい！」大王は明るく言った。

「おじさんだれ？」ミコが言った。大王はきりつと背筋を正して言った。

「私はタカチャン星雲の大王だ!」ときつぱり言った。みんなポカ
ンとした。タカチャンせいうん?

「たかちゃんせいうつってどこにあるのですか？」よしくんが礼儀正しく聞いた。

「タカチャン星雲はここから一万年離れたところにある星だ。ちよつと地球に用事があつて来た。」

と大王は言った。いちまんこうねん？

「いちまんこうねってなんですか？」 ゆうたくんが聞いた。 わからない

「一万光年は光の速度で1万年かかる距離だ。一光年は9兆4670億キロメートルだ。」大王は言った。

「さっぱりわかんないや、」マコが言った。当たり前だ。

「つまりはすぐおおおおー……く遠い」と大王は言った。両手をめいいっぱい広げてその遠さを表現した。みんなが納得した。初めからそう言うて欲しい。

「ちきゅうになににきたんですか？」 さゆりちゃんが聞いた。当然の質問だ。

「それは秘密だ。子供には関係ないことだ」と大王はきっぱりと言った。みんながポカンとした。

もなさそうだ。

「みんな、ここで自由に遊んでいていいよ！ なんでもある、みんなお腹はすいたかな？」

と大王はにこにこ言った。感情表現のゆたかな人だ。みんなはお腹がすいていることに気づいた。

「すいたー！」ゆうたくんが言った。

「今すぐご飯の用意するから待っててね！ では！」と言って大王がさっき来たドアから消えた。

「どうすればいいの？」よしくんはミコに聞いた。相変わらず頼りがない。

「ん、ん、しばらくようすをみるしかないね、」とミコは考えながら答えた。

しかし、まあ、大丈夫だろう、と漠然とミコはそう思った。

そして、ドアが開いた。すると野球のマスコットたちがみんなの食事を持って現れた。

「ほっしーくんだ！」ミコが叫んだ。

「じゃびつともいるーどあらもいるー！」ゆうたくんも手を叩いて喜んだ。

広い部屋の真ん中にあるテーブルに料理が並べられた。フルーツと野菜炒めだった。

料理を並べたらすぐにマスコットたちはばいばいと手を振ってドアの向こうに消えた。

みんなではいばいと手を振った。で、なんでマスコットがここにいるのだ？まあいいや、お腹がすいた

しかし、見たこともないフルーツだった。さゆりちゃんが勇気を出して一口食べてみた。

「おいしいいいい！！」とさゆりちゃんがさけんだ。

みんながその見たこともない黄色い色をしたフルーツに手を伸ばした。パイナップルでもない、見たことないけどおいしい。タカチャン星雲のフルーツなのかもしれない。

メロンのようなバナナのようなみかんのような不思議な味がする。

これはおいしい。

問題は野菜炒めだった。

さゆりちゃんとミコとマコはおいしそうに野菜炒めを食べた。しかし、野菜炒めには
にんじんやピーマンがたくさん入っていた。ゆうたくとよしくんはピーマンが嫌いだった。

「おとこのこのくせにだらしない！！」ミコが言った。

「そうだ！おとこのこだったらさっさとたべるんだ！」マコが言った。容赦ない。

「おとこのこのなにかっこわるいいい！」さゆりちゃんもそれにつた。

だって、とよしくとゆうたくんが見詰め合う。しかし、ゆうたくんは散々かつこわるいところばかりさゆりちゃんに見せてきたからどうにかしたかった。汚名挽回だ。

「たべる！」とふたりは3人にすこまれた。まるで母親みたいだ。

渋々ゆうたくんとよしくんは我慢して食べた。口の中に苦さが広がったが、我慢した。

ミコとマコとさゆりちゃんがまだこっちを睨んでる。まるでママだ。ママよりちょっと怖い。

渋い顔でおいしそうになんとか食べる努力をした。でもなんだか食べれそうな気がしてきた。

もう少しだ！とマコは思った。まだ睨んでいよう。こんな男の子じやこの先思いやられる。

「たべれた！もうだいじょうぶだ！」よしくんは言った。すっかり笑顔になった。

ゆうたくんも続いた。もう苦さがきにならないみたいだ。

「おーーーーー！！！！」おんなのこたちから拍手が沸き起った。えらいえらい。

ゆうたくんとよしくんはふたりでハイタッチをして喜んだ。さゆりちゃんたちがそれを

母親のようなまなざしで見つめる。子供扱いだ。でもよしくんたちはそれに全然気づいてない。

そうして、みんなお腹いっぱい食べた後に、またマスコット達がお皿を片付けに来た。

そしてまたやってきて、みんなで遊んだ。楽しかった。よくんたち
ちは柔らかいボールで
野球を始める。プラスチックのバットがあった。ホッシー君がボ
ールを投げて
ゆうたくんが打ったりした。ミコとマコとさゆりちゃんはジャビッ
ト君たちと遊んだ。
なんだか良くわからないけど楽しい！ めいいっぱい遊んだし、今
日はいろいろなことがあった。
わけがわからないけど、みんなはだんだん眠くなっていた。みんな
のベットが用意されていた。
ふかふかの心地よいベットだった。そうしてみんなはすぐに寝てし
まった。照明が落とされた。

おやすみ しかし今夜のみんなの夢はどういう風なのだろう？ 検
討もつかない。

009

「よし、あの書類を奪うんだ！」とねこはあひるさんに命令した。

子供たちと別れた後、ねこ軍団は洞窟の先へと急いだ。人間がいる
とかなかなか面倒だ。

急に気軽になってねこは気分が良かった。いなくてせいせいだ。ま
あ、子供達は
ミコがいるから大丈夫だろう。ねこはうちの奥さんからしっかり指
令を受けていた。

洞窟の途中である部屋の天井に出れる通気溝を見つけた。人間には
ここは入れないだろうな、
そう思った。きつとあそこでわれわれは別れる台本になっていたの

だろう。ねこはそう分析した。

ねこのあとをうさぎさん達とあひるさん達が追いかける。ねこが振り向いて静かにするようにと

ポーズを取る。細い通気溝をどんどん進んでいく。そしてついにその目的の部屋へとたどり着いた。

ねこはうさぎさん達にこの枠を外すよう指示した。うさぎさん達がそれをふたりがかりで

せーのといって外した。そしてあひるさんに一度、部屋の机にある書類の位置を確認させた。

そしてねこはあひるさんを宙に浮かせた。あひるさんがびっくりしたが、黙れ！とねこは

あひるさんに言った。冷静になる。あひるさんは全てをねこに託し、じっと動かないように

意識した。もうすぐ机までたどり着く。あひるさんはその書類をくちばしではさんだ。

「もう少しだ！　じっとしてろ！」ねこが言った。

そのままゆっくりあひるさんを上に上げていった。うさぎさんも固唾を飲んで見守った。

ようやくあひるさんは天井の上までたどり着いた。ねこが書類を奪う。

「おい！早くそれをふさげ！」とうさぎさんたちに指示をした。

うさぎさん達はまたその枠をふたりで持ち上げて、それを元の位置に収めた。

その瞬間、タカチャン大王と女王がドアを開けて入ってきた。ねこ

がみんなに黙るように

右手で口を押えてアピールする。みんなが黙った。大王と女王はなにやら話し込んでいた。

どうやら書類の事には気づいてなさそうだ。しばらくねこはその会話を耳を傾けていた。

話は自分達の子供のことだった。なんのことだかよくわからないが、子供の名前は

エリカ姫という名前らしい。その時、ねこの頭の中でなにかがパチンと言った。

やれやれ、また仕事が増えた。ねこはそうばやいた。もうここにはもう用事はない。

ねこは書類をめくった。そして最後のページにこの館の見取り図を発見した。

ねこはエリカ姫の部屋の位置を確認した。そして方向を確認して、書類を閉じ、それを

口にくわえて出発した。ねこ軍団はまた通気溝を歩いた。そしてエリカ姫の部屋の天井まで

たどり着いた。エリカ姫は照明を落とし、窓辺でなんだか寂しそうにしていた。

部屋の時計は午後9時となっていた。ねこはしばらく様子を伺っていた。エリカ姫も

まだ小さい子供だった。ミコとたいしてかわらんだろう。なかなかかわいい娘だった。

ねこは決心した。どうやらいけそうな予感がした。うさぎさんたちにそつと静かに

枠を外すよう、指示した。うさぎさん達が静かにそれを開けた。そしてあひるさんに

書類を預けて、今度は自らねこが下へと降りていった。エリカ姫は相変わらず窓の外を

ぼけっと思つめていた。ねこに気づかない。

「エリカ姫！」とねこは姫に向かっていった。エリカ姫はびっくりしてこつちを見た。

「しー！」ねこは静かにするよう口に右手を当てた。

「あなたはだれ？」と静かに姫が聞いた。ものわりはよさそうだ。

「ぼくはあなたを助けに来た」とどうしてだかわからんけど、ねこはそう言った。

「たすける？」姫は聞いた。なんのことだかよくわからない。ねこもちよっと困ってる。

「なんだかさびしそうだけど、どうしたの？」とねこは質問した。

「パパとママがいそがしくてあそんでくれないの」と姫は正直に答えた。

「パパとママは悪い奴なのか？」とねこは聞いた。姫は首を横に振った。

「ううん、ここにくるまえはいつもあそんでくれてた。わるいひとじゃない

でもここにきてからそっちがいそがしいみたい、はやくいえにかえりたい

ちきゅうなんていやだ！」と姫は答えた。

ねこは一旦考えてから書類を持っているあひるさんを部屋に降ろした。そして書類をひったくった。

エリカ姫がそれを不思議そうに見つめていた。なんだかよくわからない。

ねこは一番最後の書類のページを開き、ミコたちがいる部屋を右手で指した。

「ここにわたしの知り合いがいる。今日の夜中の3時にここにいてくれ」とねこが言った。

姫は見取り図を見た。この館のことはよく知っているからわかる、あの部屋だ。

「ここにいけばいいの？」と姫は言った。

「そう、そこにミコという名前の姫と同じ年くらいの女の子がいる。そいつにすべて話すんだ。そうすればきっと事は動くはずだ。」とねこは説明した。

「わかった、きょうのよなかの3じね、ねこさん、なんだかわからないけどありがとう」

と姫は丁寧に言った。ねこはちょっと照れた。うちのミコに見習って欲しい態度だ。

そうしてねこはまたあひるさんと宙に浮かび、もとの場所に戻った。姫が手を振った。

ねこも手を振った。うさぎさんたちがまた柙を閉じた。そしてもともと来た道をたどり、通気溝から出た。また洞窟に戻り、ミコたちが落ちた穴までたどり着いた。穴を覗いてから

ねこ軍団はそこに降りた。みんなはぴーすかと音をたてて寝ていた。

のん気なもんだ。

しかし、さすがのねこも疲れていた。うさぎさんたちもあひるさんたちも散々こき使われて

疲れていた。ねこがみんなにお礼を述べた。うさぎさんたちは大変恐縮してそれに答えた。

そしてねこたちも寝ることとなった。午後１０時を回っていた。

第二部 010 - END

010

明美先生はなかなか落ち着きのある時間を過ごしていた。

温泉はなかなか良いし、料理も良かった。なんにも気遣うことがなく、旅館も親切だけど余計なことは一切してこなかったので居心地が良かった。夜に窓越しの風景を眺めいろいろなことを考えた。やっぱりどこにいても、世界中どこにいても

私がかうにか勇氣を持つて言うしかないという事には変わりはない。まあそうだろう。

明美先生はまずはリラックスすることを心がけた。思えば最近、仕事が忙しかった。

山形先生の真似をしてちょっと自分も仕事を増やしてみたけど、どうも私はそういうのは向いていないのかもしれない。いろいろと私は氣を使い過ぎるところもあるから、

ストレスも溜まる。それじゃ意味がないな、と思った。まあ、いいや、今はゆっくりだ。

そうして彼女はぼけっと温泉にはいり、食事をしたり、本を読んだりして過ごした。

なにかもやもやしていたものが少し抜けたような氣がした。良い兆候だ。

最後の夜、食堂でたまにロビーでおしゃべりする老夫婦にあった。

おばさんはなかなか感じが良い人だ。細かいことは全然気にしない人みたいだし、

なかなか裕福そうで、旦那さんも穏やかな人だ。おばさんは彼女が幼稚園の先生を

していることに興味があるようだった。大変そうねーといつも言った。

なんだかそうやって楽しくしゃべっている間に彼女はなんとなく、直感で、このおばさんに

自分のことを相談してみようかなと思った。彼女は一緒にお風呂にいきませんか？と

思い切って尋ねた。おばさんはうなずいた。そうして食事のあとに彼女とおばさんは

お風呂場に向かった。湯船の中で思い切って話してみた。

「どうしたらよいと思います？」と彼女は聞いた。

おばさんは考えた。とその時、あることを思い出した。おばさんの頭の中でなにかがパチンと言った。

「あそこにいったらいい、ここから確かすぐだよ、あそこにいったらいい」とおばさんは言った。

「あそこ？」と彼女は聞いた。

彼女たちはお風呂から上がり、フロントへと向かった。そしておばさんはフロント係に

あそこの場所を知っているかどうか尋ねた。フロント係はそこを知っているみたいだった。

ちよっと今調べますので、待ってて下さい、と言った。ふたりはロビーのソファで待った。

「あそこってなんですか？」と彼女は答えた。おばさんは少し困った顔をした。

「今はあんまり知らないほうがいいと思う、いけばわかる、わけがわからないだろうけど」

今はおばさんの言うこと黙って聞いてくれないかな？申し訳ないけど」とおばさんは言った。

「なんか、変なところなんですか？」彼女は不安そうに聞いた。

「いや、決して変なところじゃないの、いいところ、私もその人のおかげでこうして

のんびりと良い老後を送れているのよ、これは本当の話、私たち夫婦が昔、悪い人にだまされて
お金が無くなった時にその人が助けてくれたのよ。ただ、あんまり予備知識を持って

いけないほうがいいと思っただけ」とおばさんは説明した。ますますわけがわからなくなった。

そして、フロント係がそこにいく簡単な地図を丁寧に作成してくれて、それを手渡しに来た。

彼女はお礼を述べた。フロント係が一礼して元に戻った。名前はたかはいずみと書いてあった。

「このたかはいさんの所に行けばいいのですか？」と彼女は聞いた。

「そう、そこにいけばなんにも言わなくてもすべてやってくれるから」とおばさんは言った。

なんかの占い師かなんかなのだろうか？まあいいや、行つて見る価値はありそうだ。

「ちょっと良く理解出来ないけど、本当にありがとうございます。と彼女はお礼を述べた。」

おばさんはここにこととしてうなずいた。良い人だ。いつてみる価値はある。

翌日、9時ごろにこの旅館を出た。フロント係にお礼を申し上げて小さな駅へと向かった。

ここから電車で一時間くらいのところ、そのたかはしさんはいるみたいだ。

ローカルな2両編成の電車がゆっくりと進む。気分が良い。天気も良いし、電車の窓から見える

風景が綺麗だった。思えばこうやってひとりで行動することってあんまりなかったな、と

気づいた。大学も家から近い所にいったし、旅行はいつも友達と一緒にだった。

家にはもちろん両親がいる。きっとこういうことも大事なんだろうと彼女は漠然と思った。

しかし、このたかはしさんとはいったい何者なのだろうか？ちょっと不安だが、あのおばさんが

言うにはたぶん大丈夫だろう。そう信じるほか無い。自分の感を信じましょう。

目的の駅に到着した。また似た様な小さな駅だった。まわりが一面見渡せる。

私は地図を見て方角を確認し、歩いた。ここから歩いて10分くらいらしい。

目印があまりないので、いまいちこの道でよいのか不安だったが、

あつた。

小さい表札だった。ひらがなでそのまま”たかはしいずみ”と書いてあつた。

どう考えても商売をしているようには見えなかった。普通の民家と変わらない。

本当にここでいいのか不安だったが、あたりを一応見回してもたかはしさんはここしかなかった。

思い切つてドアの前のベルを鳴らした。遠くから小さな返事が聞こえた。ドアが開く。

「はい！どちらさままで？」とたかはしさんは笑顔で答えた。たかはしさんは30代くらいの

人で髪はロングでなかなか綺麗な人だった。水色のワンピースを着ている。

「あの、あるかたにここにすればすべてわかるって言われてきたのですけど、」

彼女はおどどと答えた。うまく説明できない。しかしその時、たかはしさんの頭の中でパチンと

なにかが言った。

「あーはいはい、どうぞあがってください」とたかはしさんは笑顔で家に招き入れた。

彼女は恐縮しながら家へとあがった。たかはしさんはなにかを理解している。私はさっぱり

わけがわからない。緊張した。玄関で靴を脱ぎ、スリッパを渡された。長い廊下の奥の部屋へと

案内された。広い家だった。たかはしさんのほかには誰もいなそうだった。

廊下の突き当たりの部屋のドアをたかはしさんが開ける。どうぞ、

と言われた。

部屋には病院にあるような白い簡易なベットがあり、椅子がふたつ向かいに並んでいた。

小さなテーブルがある。それ以外はなににもない窓も無い部屋だった。前面真っ白だった。

広さは8畳ぐらいだと思う。たかはしさんはキャンドルを持ってきた。林檎型のガラスに

キャンドルが収まっていた。それをテーブルに置いた。やっぱりなんかあやしい占い師なんだろう

と思った。部屋のドアを閉めて、照明を落とした。ほのかなキャンドルの明かりが辺りを

照らした。薄暗い、彼女はものすごい緊張した。たかはしさんはずっと笑顔のままだった。

どうか緊張しないでリラックスしてください、とたかはしさんは言っただけど、なかなかそう簡単に

リラックスできない。

「あなたの名前は明美さんですね」とたかはしさんは答えた。彼女はびつくりした。

「〇〇〇〇県、XXX市　XX町の幼稚園で働いていらっしゃる。」
とたかはしさんは言った。

「、、、、どうして、、わかるのでしょうか、、？」彼女はなんだかわけのわからぬまま聞いた。

それにはたかはしさんは答えなかった。そしてたかはしさんは目を瞑った。しばしの間。

彼女はポカンとしたまま、たかはしさんをじっと見ていた。そして目を開いた。

「ちょっと脱いでください」とたかはしさんはきっぱりと言った。

彼女は絶句した。脱ぐ？ここで？ちょっと待ってください、どうして脱ぐのでしょうか？

たかはしさんは一切質問に答えなかった。本当にここは大丈夫なのだろうか？

しかし、たかはしさんは一切動きもしないで黙って笑顔でこっちを見ていた。

言葉がでない。なんて言えいいのだろう？言葉を探している。でも見つからない。

異様に恥ずかしかったけど、シャツを脱いでみた。なんにも反応がない。しばらく黙ってみた。
そして

「すべて脱いでください」とたかはしさんは言った。

？？ しかしまた、たかはしさんは微動たりしなかった。笑顔を絶やさない。駄目だ、頭がうまく

まわらない。彼女は思い切ってブラジャーをはずした。ジーンズを脱ぎ、パンツを下ろした。

胸を隠す。恥ずかしすぎる。温泉なら別に平気だけど、この部屋はさすがにやばい。

恥ずかしい。たかはしさんは笑顔のままだ。

「本当に胸が小さいですね」とたかはしさんはいきなり言った。彼

女はぐさつと来た。けど
なにも言えなかった。照れながらうなずくしかなかった。たかはし
さんは立ち上がった。

「目を閉じてください」とたかはしさんは言った。彼女は目を閉じ
た。

そして目隠しもされた。頭に手が当てられた。なにかわけのわから
ないことをぶつくさ言っている。

日本語じゃない、呪文みたいだ。そしてたかはしさんは彼女の小さ
な胸を揉み始めた。

「ちょっと、」彼女は言ってみたが予想通り反応はなかった。

しばらくの間、たかはしさんは彼女の胸を両手で揉んでいた。もう
なにもかもされるがまだ。

もしかして、この胸を大きくしてくれるのだろうか？それと
もたかはしさんはたんなる

レズかなんかなのか？様々な思いが彼女の中を駆け巡り、そして混
乱した。うまく体を動かせない。

たかはしさんはずっとその手を止めることはなかった。恥ずかしい
けど、なんだかだんだん

気持ちよくなってきた。やばい。なんだかどんどん相手のいいなり
になってる。でも動けない。

でもなんだか少しリラックスしてきたような気がした。気持ちが良
い、異様に恥ずかしいけど

気持ちが良い。私は間違ってもレズではないと思う。だんだんとた
かはしさんのもみ方が

エスカレートしているような気がする。変な声を出してしまいそう

だ。たかはしさんのもみ方は
なんといつていいのかわからないけど、うまい。やばい。変な気分
だ。気持ちが良い。

そして、やっとたかはしさんの手は止まった。しばしの間、沈黙が
続いた。なにか物音が聞こえる。

彼女はそのまま動かず、固まっていた。まだ彼女の胸にたかはしさ
んの手の感触が残っている。

「目隠しを取ってください」とたかはしさんは言った。彼女は目隠
しを取った。

たかはしさんも裸になっていた。彼女はポカンとしたまま、たかは
しさんのきれいな体を見ていた。

「山形先生が好きなんです」ね」とたかはしさんは言った。彼女はび
くつとした。

「は、、え、、まあ、」と彼女は照れながら答えた。ちよつと
たかはしさんはストレート過ぎる
ところがある。彼女はおろおろするばかりだ。

「山形先生のことは好きではないのですか？」とたかはしさんは言
った。笑顔はずっと変わらぬままだ

「い、いえ、好きです」と非常に照れながら彼女は答えた。まる
でたかはしさんに告白している
ような気分だ。

「山形先生とセックスしたいですか？」とたかはしさんは言った。
非常にストレートな質問が続く。

彼女の羞恥心はもうがたがたにされていた。完全に操られてる。

「え、まあ、」と彼女はあいまいに答えた。

「あなたは見知らぬ男性に犯されたいですか？」とたかはしさんは言った。

「いえ、されたくありません」彼女は答えた。多少はきっぱりと答えられた。

「私はどうですか？私の体はどうでしょう？きれいですか？」とたかはしさんは言った。

堂々としている。程よい大きさの良い形をした胸だ。うらやましい。彼女の理想とする形だ。

たかはしさんは両手で自身の胸を押えて上下させたりしていた。なんだか挑発されているみたいだ。

でもたかはしさんの表情には嫌味も皮肉も恥じらいも何も感じられない。なんだかうらやましい。

「たかはしさんの体はきれいですけど、犯されたくはありません」と彼女はもつと言葉を選んで
言いたかったが、結局こういう風にしか言えなかった。

「一番あなたが望むことを躊躇するというのは、すべてをあいまいにしています。

見知らぬ誰かに犯され続けても、あなたはなにも文句を言えませんか。あなたが望むところに

いくにはあなたはそんなに多くの言葉を持つてはいけません。言葉を減らさなくてはなりません」

とたかはしさんは言った。彼女はなんのことだか良く理解出来なかった。犯され続ける？

「山形先生とセックスしたいですか？」とたかはしさんはもう一度質問した。

「、、はい、、」と彼女はまだ少し照れながら言った。そんなこと普通はきっぱりいえないもんだ。

もう少し、その辺をわかって欲しい。たかはしさんは子供並みに言葉がストレート過ぎる。

「山形先生とセックスしたいですか？」とたかはしさんはもう一度、表情を変えずに言った。

「はい」と彼女は意識してきっぱり答えた。ほかの言葉が見つからない。

「それでは今から山形先生とセックスしましょう」とたかはしさんは言った。

「はい？」と彼女は聞いた。わけがわからない。しかしたかはしさんはなにも答えず、立ち上がり

彼女に目隠しをした。そして彼女を立たせて、白いベットに仰向けになるように指示した。

彼女はベットに仰向けになった。そして右手首になにかの細長い布を何回か巻きつけ、軽く結んだ。

左手首も同様に結ばれ、その布をどこかベットの頭のほうにあるなにかに結びつけた。両手の自由が

なくなつた。たかはしさんは今度は彼女の両足を少し開き、また両足首を布で結び、なにかに

結びつけた。ちょっと、と思っても、もう彼女の体に自由はなかった。怖くなってきた。

たかはしさんは彼女の額に手を当てた。

「山形先生の顔を思い浮かべてください」とたかはしさんが言った。彼女は一応、山形先生の顔を

思い浮かべたが、なにかこういう格好させられた状態で山形先生の顔を思い浮かべるのは

モラルに反しているような気がした。でも今、この状態でなにを言っても意味が無い。

そうしているうちにだんだんと意識が遠のいていくような感じになった。なんだか彼女は

自分のとっておきの自制心がどんどん破壊されてくような気がした。でも動けない。

意識の中で山形先生は裸になっていた。いつものごとくさわやかな笑顔を浮かべていた。

彼女はこういう表情を作ってきたのかわからなかった。引きつつている。わけがわからない。

山形先生はなんのことわりもなく、彼女の小さな胸を触りだした。

そしてたかはしさんのように

揉み始めた。気持ちが良い、なんだかよくわからないけど、気持ちが良い。意識の中では

私は山形先生に胸を触られているのだが、現実にはたかはしさんが先ほどのように胸を

揉んでいた。そして山形先生は乳首を舌で舐め始めた。たかはしさんも同様にした。

彼女は必死で声が出そうになるのを押えた。でももうどこか、まともなところに引き返せる

手段はない。どう考えてもない、体はそれを確かに求めていた。まだわずかに残っている

彼女の自制心が様々な感情をごちゃまぜにした。山形先生の舌はほとんど下腹部に向かっていった。

両手は胸を相変わらず揉み続けた。たかはしさんも同様にしていた。なんだか世界中のひとたちが

私の小さな胸を触りたがっている。わけのわからない感想を彼女は持った。そして山形先生は

自分のものを彼女に子供のように見せびらかした。なんの照れもない。子供みたいだ。

山形先生のそれはなかなか立派だった。彼女はそんなに男性経験はないけれど断トツだった。

”山形先生のは大きいですか？”と意識の中でたかはしさんは聞いてきた。

”は、はい、”彼女は答えた。なんでそんなことを聞くのだろう？

山形先生はなんの躊躇も無く、彼女のところにそれを挿入した。そしてゆっくりと腰を動かした。

もう駄目だ、降参だ。彼女はどうしようもなくなっていた。たかはしさんはバイブレーターを

使い、彼女のところにそれを挿入した。スイッチを入れる。振動音が聞こえる。

彼女はもう声をあげていた。犯されてる。そう思った。けど山形先生は素敵だった。

たかはしさんもなかなか激しかった。これを商売にしているのだろうか？怪しい商売だ。

あのおばさんが言葉を濁したのもよくわかる。こんなこといたら

私はここにこないだろう。

山形先生が私にキスをしてきた。舌を絡めてきた。たかはしさんも同様にした。私はすでに

何度かいつてしまった。こんなのは初めてだ。失神してしまいそうだ。山形先生の腰が

激しくなってきた。私もどうにかなりそうだ。そして山形先生はそれを抜き出し、彼女の

お腹に射精した。山形先生はとても気持ちよさそうだった。山形先生はそれを私の口に押し付けた。

彼女はそれを口に含んだ。舌を使ってそれを舐めた。たかはしさんのそこを現実には舐めている。

犯されている。言葉にならないくらい気持ちよかったけど、なんかもあいまいだ。

こんなのって良くない。でも気持ちが良い。彼女は意識の中で叫んだ。違う、違う、

絶叫した。意識がどんどん遠のいていく。わけがわからない。意識がどんどん遠のいていく。

意識が戻ると彼女は林の中にいた。裸のままだ。近くになんだか防空壕みたいな大きな穴がある。

近くにきちんと服を着たたかはしさんがいつもの笑顔で立ってこっちを見つめていた。

なぜだかわからないけどミコちゃんのお母さんもいる。同様に笑顔で立っている。

彼女は裸のまま、しかもお腹には精液がこびりついている。わけがわからない。恥ずかしすぎる。

「ここは、、、ど、して、、ミコちゃんのお母さんまで、、あの、、と彼女はわけがわからない

たかはしさんはなにも答えず、彼女についた精液をティッシュで丁寧にふき取った。

そしてうちの奥さんが彼女の服を持ってきた。バックもある。わけがわからないけど

こんなところで裸のままいたくない。なんとか意識を取り戻してそれを着た。子供みたいに

たどたどしく。たかはしさんは水筒から冷たい麦茶を注ぎ、彼女に渡した。彼女はそれを飲んだ。

おいしい。なんとか意識を取り戻した。しかしここはどこなのだろう？ミコちゃんのお母さんは

ここだなにをしてるのだろう？私はやっと立ち上がった。バックを受け取る。

「あの、ここはどこなんですか？」と彼女は聞いた。

「さあ、冒険がはじまります」とうちの奥さんがきつぱりと言った。冒険？

うちの奥さんはたかはしさんにありがとう、と言った。たかはしさんは笑ってうなずいた。

彼女もなんだかわからないけど、一応、お礼を言った。なにか起こったのかはよくわからないけど。

「あともう少しだから頑張ってね」とたかはしさんは彼女に言った。もう少し？

そうしてたかはしさんは手を振ってすたすたとどこかに歩いていった。彼女は何度も頭を下げた。

うちの奥さんが懐中電灯の電源をいれた。穴に向かってそれを照ら

した。彼女はそれをポカンと見ていた。

「さあ、行きましょう」とうちの奥さんが言った。はあ、と彼女は言った。

そして大きな穴の中を、彼女はうちの奥さんのあとについて歩いた。暗い洞窟だ。

よくわからないけど、もうなんだか質問するのも嫌になってきた。どうせ答えてくれないのだろう。

彼女も結構怖がりだ。でも必死に我慢した。まだ山形先生の体の感触が残っている。

しばらく歩くと、光が見えてきた。もうあの変な男はいなかった。幕も開けられている。

四角い穴がある。うちの奥さんはその穴を指差して、彼女に覗かせた。いったいなんなのだ？

「明美先生は携帯電話をお持ちですか？」とうちの奥さんが聞いた。はいと答えた。

一応、バックを開けて携帯電話を確認した。なにも問題はない。うちの奥さんはうなずいて彼女に懐中電灯を渡した。

「この穴の底をそれで照らしてみてください」うちの奥さんは言った。彼女は懐中電灯で

言われる通りに穴の底を照らしてみた。でもなにも見えない。なにがあるんだろう？

その時に、うちの奥さんはまた強引に彼女の背中を突き飛ばした。彼女は落ちながら

絶叫した。うちの奥さんは一度その穴を覗いて、にやりとし、また

そこから立ち去った。

011

ベッケンガー大佐はUFOの動きを調査していた。アメリカ全国土のレーダーを調べた。

どう考えても、それはシアトルに集中していた。そこから全国に広がっているような

動きだった。彼はシアトルの軍派遣を増強した。上空の観察を重点において。

シアトルでは確かにUFOの目撃情報がネット上とかで氾濫していた。特に真夜中の

セーフコ球場で多く見られた。ちょっとした観光スポットとなっていた。

ネットのUFO写真をみるとだいたい同じ傾向のある形のUFOが写されていた。

特殊部隊は毎日のようにお客として球場内に入場し、怪しまれぬ様に、慎重に

辺りを調査した。球場周辺にも普通の人間を装った部隊があふれかえっていた。

球場に入場した人間の何人かは試合終了後もどこかにひっそりと身を隠して、

だれもいなくなった球場内を探索した。警備員に見つからぬようにその辺はしつかり

と訓練されている。しかし、何日も調査したが球場内にはなにも変わったところは

見つからなかった。彼らは選手のロッカールームまで丹念に調べ上げたのだ。

きつとどこかに秘密のルートがあるとベッケンガーは考えていた。しかし見つからない。

そのうちになぜか、日本の伊豆にて同様のUFOの目撃情報が多発している情報を得た。

ベッケンガー大佐はアメリカ政府に頼み、日本政府に極秘調査の協力を依頼するように

頼んだ。大統領が緊急に日本を訪問した。表向きは違う件についてで。

日本政府はとりあえず、伊豆周辺をレーダーで調査した。確かにそのような事実が確認された。

日本政府は自衛隊の管理下の元でという条件で承諾した。そうしてベッケンガー大佐は

3人の有能な部下を率いて極秘に来日した。シアトルでは相変わらずなにも進展のない

調査が続いていたが、続行させた。他に打つ手はない。

レーダーはある一点から飛行が行われていた。場所を調査すると、どうやらキャンプ場の近く

らしい。ベッケンガー大佐はそこにキャンプをはって調査をすることに決めた。

最初は、3人の自衛隊員とわれわれ4人でキャンプ場に予約をいれてみたが、予約でいっぱい

だったので断られてしまった。仕方が無いのでそのキャンプ場の裏側にある林の奥に極秘に

キャンプをはった。まあわれわれはそういうのは得意なところだ。別に問題ない。

キャンプ場の人間に悟られないように、かなり遠くのところからヘリコプターで降りた。

調査に必要な機材と生活用品と機関銃等を降ろした。ヘリコプターが去っていった。

位置を確認して、その山の中を歩いた。まるで軍事演習みたいだが、まあ我々は軍人だ。問題なし。

3時間ぐらいそのような歩きにくい山の中を歩いていた。危険なのはなにもなかったし

もちろん敵が潜んでるわけでもない。特に注意もせず歩いた。ずつと遠くに池が見えて

その向こうにキャンプ場が見えた。どうやらこの辺らしい。彼らはそこにキャンプをはる

ことにした。ベッケンガー大佐はなんだかほっとして腰を下ろし、しばらくこの木陰で

寝転んだ。他の隊員も同様にした。いつも緊迫した毎日だったからなんだか落ち着く。

ここにはもちろん敵もない、危険な動物もいなそうだ。良い天気だった。

様々な鳥や蝉の音が辺りに鳴り響いていた。彼は早くこの事情のわからない事件を解決して

しばらくはのんびりとした生活を送ることを望んでいた。最近は家族とも離れ離れた。

きちんと解決すれば、国は私に一生涯の生活保障をしてくれる。名誉も与えられる。

これはチャンスだ。この一件が終了したら、家族とのんびりキャンプにでも行こう。

それは良いアイディアだ。ベッケンガー大佐はそう思いながらいつの間にか寝ていた。

起きたら夕方だった。夕日がとても綺麗だった。体がとてもリフレッシュしていた。

大佐は自衛隊の人たちにキャンプの設営と食事の用意を依頼した。

自衛隊員は了解した。

大佐らは衛星電話の機材を調整し、コンピューターを広げた。シアトルの方は相変わらず

みたいだった。機関銃の状態をチェックした。家族にメールを送った。変わらず元気なようだ。

近くを4人で探索した。するとすぐに彼らは大きな防空壕を発見することとなった。

大佐はまずはここを調査することに決めた。なにか引つかかる。この位置をきちんと確認し

彼らはキャンプに戻った。

彼らは戻り、食事にした。食事をしながら今夜の計画をみんなに説明した。

自衛隊も同意した。とりあえず進展しそうなことがあったので大佐には笑顔が見られた。

一同、なごやかな食事時間となった。あたりは真っ暗になっていった。大佐は少しウイスキーを

飲んだ。

大きな防空壕らしき穴まで機材等を運んだ。誰もいない。辺りを一応確認したけど

誰もここにきそうもない。とりあえず彼らはひとり見張りに残して、洞窟の中に入っていた。

ライトを照らすがとりあえずなにもない。時々たたり落ちる水滴の音が辺りに響いた。

しばらくするとなにか広いところがあるのを発見した。誰もいない。紫色の幕は上がったままだ。

ライトを照らすとその奥に四角い穴があった。大佐はなんだかよく理解出来なかったが

穴の中をライトで照らしてみた。なにも見えない。この幕はいった

いなんなのだろう？

理解出来なかった。穴の周辺を丹念に調べた。しかしどこにもなにか変わったものはなかった。

この四角い穴だけだ。どうやら一回降りてみるかなさそうだ。大佐は自衛隊員にロープの用意を

依頼した。ひとりが来た道を戻り、ロープを抱えて戻ってきた。大佐と3人の部下で下に

降りることにした。自衛隊員がロープを幕のところに縛りつけ、引っ張って確認し、

それを穴の中に垂らした。大佐が先に降りた。深さは10メートルくらいだった。そこには

トランポリンがあった。またわけがわからない。けどなにかここにはある。大佐はそう思った。

部下に降りるように大声で指示を出す。部下達が降りてきた。トランポリンの上についた。

部下もわけがわからないといった表情を浮かべた。しかし前に進むほか無い。大佐は無線で

とりあえずどこかに進む、そこで待機してもらうように頼んだ。了解した。

部下が階段の存在を発見した。階段の先にはなにか穴のようなものがあった。大佐は

その階段を降りた。なにも問題はなかった。トランポリンの存在理由がつかめないだけだ。

部下も降りてきた。しかしこれはタカチャン星人のしわざかもしれないと大佐は考えた。

普通の人間はこんなばかげたものを作ったりしない。でもいまいち良くわからない。

大佐は機関銃を手にとってこれから進む様、指示した。一応、用心したほうがよいだろう。

こんなところで死にたくない。大佐はその奇妙な穴へと向かった。

部下が続く。

巨大なガラスチューブの中では星空が広がっていた。大佐はまた固まった。わけがわからない。

思わず、構えていた機関銃をおろしてしまった。部下達もそれを下ろした。しばらくその

美しい光景に見とれていた。これはなにかの罠なのか？しかし少しも敵意を感じない。

足元にも星空が広がっていた。まるで空中に浮いているみたいだ。なんなんだろう？

でももし出来るならここに家族を連れて来たいくらい綺麗だ。星空も本物みたいだ。

というか本物に見える。しかし、ここにいてもしょうがない、大佐はようやく歩く決心をした。

かすかに静かなジャズが聞こえてきた。なんだか心が洗われるようだ。このわけのわからない

仕事が終わったら綺麗な夜空が見えるところに旅行しに行こう、と大佐は思った。

彼らはゆっくり歩きながら、この星空を眺めていた。敵がいなければどの戦場も

美しいものなのだ。大佐はそう思った。早く仕事を片付けなくては。

防空壕の前にはひとりの自衛隊員が暇そうに腰を下ろしていた。そりゃそうだ。

あたりに緊迫した雰囲気はない。われらがなんの目的でここに来ているのかも

上司は教えてくれない。ずっと向こうの方では陽気なキャンプ客が楽しそうに遊んでいる。

自衛隊員はたばこをくわえながらぼけつと夜空を見ていた。それを

たかはしさんと
うちの奥さんが林の影から見ていた。

「まあ、余裕だわ」たかはしさんが小さな声で言った。うちの奥さんがにこつとした。

彼女らはぐるりとまわりこみ、彼に近づいた。そして一気に彼の目の前に二人で走って行き

たかはしさんが催眠術をかけ、うちの奥さんがヘルメットをばこんと叩いた。

彼はぐてんと倒れた。簡単なもんだ。担架を用意し、彼を二人で抱えて、それに乗せる。

担架を二人で抱えて、洞窟に入っていく、広場のちょっと前で担架を下ろし、ふたりは

彼らの様子を伺う。どうやら無線が通じなくなったらしい。彼らはその四角い穴の中を

覗いていた。チャンスだ。ふたりは一気にそこまで走って行き、お
—————！！！！

と大声を上げた。彼らがかかなりびっくりして立ち上がり、振り向いた瞬間、たかはしさんと

うちの奥さんはジャンピングキックを決めた。彼らは絶叫しながら穴の中に落ちた。

ふたりは笑顔でハイタッチした。そして担架のところまで急いで戻り、担架を担いで

四角い穴まで戻り、担架ごと落とした。成功だ。そしてまた洞窟を一気に駆け上がり

林の中に隠していた穴の蓋をふたりで運んだ。それを四角い穴にぴたりとかぶせた。

これにて一件落着！うちの奥さんが悪いねーと笑顔で言った。たかはしさんはやりとした。

「昔っからやるのがなんかおおげさだよーミカは」たかはしさんが言った。

うちの奥さんが笑った。

「あんだだつてよくあんなことできるよなー、いい加減、結婚して落ち着いたら？」とうちの奥さんが言った。たかはしさんが苦笑いした。あんな仕事をしていたら近所とうまくやっていけない。

「まだ、なんかやることあるの？」とたかはしさんは聞いた。

「ん、もうあんまりないけど、よかつたらちよつと仕事休んでのんびりしていけば？」

とうちの奥さんが言った。そうだね、そうする、とたかはしさんは言った。

「んじゃ、とりあえず部屋に戻って乾杯でもしますか？」とうちの奥さんは言った。

いいね、とたかはしさんは笑った。ふたりは大笑いしながらログキヤビンへと向かった。

012

「まずはその草をひとつにまとめてちょうだい」とうちの奥さんが言った。

、、だそうです、と私はみんなに説明した。草はいっぱいあった、みんな呆然とそれをながめた。

「とにかくやるしかないみたいですね」よしくんパパがそうつぶやいた。

われわれはみんなで手分けして、その膨大な干し草を部屋の隅に集めた。用具はなにもない。

まったくうちの奥さんはなにを考えているのだ？わけがわからない。1時間近く、その作業が続いた。すると部屋の真ん中に大きな円が描かれていた。

黒い線で円は描かれ、真ん中に点が描かれていた。床はゴムのような素材で出来ていた。

「なんか変な円が出てきたけど、」と私は奥さんに聞いた。

「そしたら部屋の向こうに衣装があるからみんなで着替えて」とうちの奥さんが言った。着替える？

みんなでその衣装のありかを探した。ゆうたくんパパが大きなクローゼットのドアを発見した。

そこには時代劇用のコスチュームがいろいろとぎっしり詰まっていた。はじまった。

うちの奥さんの趣味だ。いったいなにを考えてるんだ？頭が痛くなってきた。

「これ、着るんですか？」さゆりちゃんママが聞いてきた。私だつてそう聞きたい。大賛成だ。

私はしかたがなく、こくりとうなずいた。ははは、

一同、少しの間、固まっていたが、ゆうたくんパパが動いた。さす

がだ。ゆうたくんパパは

水戸黄門のコスチュームを選んで着てみた。髭までしっかりつけてみた。なんか似合ってる。

みんなが爆笑した。それでみんなが動き出した。さゆりちゃんパパは助さん役となった。

よくんパパは格さん役となった。するってえと私はすっかり八兵衛ですか、、、はいはい。

女性軍はみんな奥女中になった。みんなで笑った。携帯電話のカメラでみんな記念撮影を

はじめた。わけがわからないけど、みんなで着ちやうとなんかどうでも良くなったみたいだ。

女性軍もなかなかみなさん似合っていた。さゆりちゃんママは格別だ。なんでも似合う。

「きがえたよ」と私は報告した。うちの奥さんが大笑いしていた。そういう場合じゃない。

あんたが選んだんじゃないか？私は文句を言った。

「ごめん、そしたら、さっきの円の縁に座って、中心の点を見ながら」とうちの奥さんが言った。

私はみんなに説明した。みんなで輪になって座った。みんな中心を見つめた。

格好のせいで、みんな必死に笑いをこらえていた。そういう場合じゃないが、しかたがない、

しかし、子供たちにはいつ会えるのだろうか？

円がぐるぐると動き始めた。ゆっくりと、みんなちよつとびっくりする。

しばらくまわると、急に円の中が真っ暗になった。そしてわれわれ

は落ちた。

「またおちるの？」さゆりちゃんママがばやいた。

しかし、下降はゆっくりだった。重力の感覚が違う。半分浮いているみたいな落ち方だった。

まわりにはまた綺麗な星空が映っていた。またさゆりちゃんママが感動していた。

なかなか心地よい気分だった。衣装がもつとましだったらもつと良かったとおもう。

3分ぐらいの間、われわれは少しずつ下降した。だんだんと速度が遅くなっていた。

そして、ようやく底までたどり着いた。地下の駐車場みたいなコンクリートで出来た広いスペース

に着いた。照明はあたりをきちんと照らしていた。現実的な照明だ。

「どうすればいいのかな？」と私は奥さんに尋ねた。返事が無い。何度もたずねたが返事が無い。

「返事がないんだけど、、」と私は正直にみんなに言った。みんなが固まった。

もしかしてこれ以降は台本がないのかもしれない。困った。

「とにかく手分けしてなんか探そう」とゆうたくんパパが提案した。みんな賛成した。

我々はこの広いスペースを手分けして探索した。ここはいつたいどこなんだろう？

日本の地下になんてこんなもんがあるのだ？というか今までのもの

全部がそうだけど。

私はぶつくさ文句を言いながら探索した。よしくんパパがなにか見つけたみたいだ。

「みんな！ちよつときて！」よしくんパパが叫んだ。

みんながよしくんパパのもとに駆け寄った。広いところなのでみんなはあはあ言いながら

集まってきた。そこにはまたなんか大きな円が描かれていた。中心点もあつた。円の中心になにかのボタンがあつた。緑色のボタンだ。

「また落ちるのですか、、」「さゆりちゃんママがもうっんざりな表情で言つた。

「とにかくまたここに座ってみましょうか？」ゆうたくんパパが提案した。

われわれはまた同じように座ってみた。なにも動かなかつた。やっぱりボタンを押すべきなんだろう。

よしくんパパがおそろおそろ近づいて、そつとボタンを押してみた。さゆりちゃんママが

怯えている。よしくんママは目を瞑っている。ボタンを押した瞬間、円は光つた。

巨大なライトみたいだ。そして円はだんだんと上昇していた。なんだかSF映画みたいだ。

ゆつくりと上昇した。光はまっすぐと上を照らしていた。コンクリートの天井を突き破っていた。

われわれは光に守られて上昇していた。コンクリートの中を通り抜けて行く。

そして、我々はなぜだか知らないけど、野球場のマウンドの上に立っていた。

我々はその広いフィールドを見回した。テレビで見たことがある。セーフコ球場だ。

「、、、、ここはシアトル？」よしくんパパがつばやいた。そうらしい。

「、、、、イチローのサインもらえるかな、、」ゆうたくんパパがつばやいた。そんな場合ではない。

しばらく呆然と誰もいない客席とかを見ていた。今はもうすぐ夜明けの時刻らしい。
まだ薄暗い。というかなんで我々はアメリカにいるのかよくわからない。

「でも、ここにいたらやばいでしょ、また引き返したほうがよさそうだね」とさゆりちゃんパパは提案した。まあそうだ。健全なアメリカ市民にこんな姿見られたくない。恥ずかしい。

しかし、なんだか名残惜しいので、みんなでまた球場をバックに記念撮影大会が始まった。

懲りない私達だ。なんだかもう、楽しんだもん勝ちだ。ゆうたくんパパが興奮していた、そして、

我々はマウンドの代わりに現れた円の中にまた戻り、座って、よしくんパパがまたボタンを押した。また光が現れて、今度は下降した。ゆうたくんパパが名残

惜しそうに球場を眺めていたが

そんな場合でもない。下降する。そしてもとの位置に戻った。そしてまた手分けして探索した。

「こつち！」さゆりちゃんパパが叫んだ。

またみんながはあはあ言いながらさゆりちゃんパパのところにやってきた。もうみんないい年

なのだ。勘弁して欲しい。壁には黒で手形が二人分、描かれていた。なんだろう？これは。

「ふたりでこれを押せばいいのかな？」さゆりちゃんパパが言った。

よくんパパとゆうたくんパパが手形に手を合わせて、押した。すると動いた。

壁は後ろへと追いやられた。右側にはなにかの通路が見えてきた。

さゆりちゃんパパが

そこに行ってみた。みんなを呼んだ。女性軍がささっと通路に行った。私も後に続いた。

そしてゆうたくんパパとよくんパパが手を離し、通路に来た。壁はゆっくりとまた

元の位置に戻った。ここはどこだ？どこかでかすかに子供の声がした。あつちのほうだ。

「あつちにいつてみましょう」私が提案した。左側の通路だ。みんなが賛成した。

ゆうたくんパパが先頭でこの通路を歩いた。通路は薄い水色に統一されていた。

照明も水色っぽい。なんだか現実感のない通路だ。だんだんと子供

たちの声が大きくなってきた。

しかし、どう考えてもうちの子達ではない。英語だ。わけがわからない。

私たちは声の方向を確かめながら進んだ。途中で右に曲がった。するとなぜかそこに

明美先生が立っていた。

「あ、、みなさんどうも、」明美先生はそう言った。彼女はわれわれの姿にあっけに

とられていた。それはみんなみんなうちの奥さんのせいだ。しかし、しばらくの間、

我々はこの格好にすっかり慣れていた。変なもんだ。

013

「ミコ、おきてくれ」ねこがミコの頭を叩いた。午前3時ちょっと前だ。

まだちょっと、寝足りない、夢を見ていた。星空の中でねこが浮いたり大王がトランポリンで

楽しそうに跳ねている夢だった。わけがわからない。寝ぼけていた。ようやく起き上がった。

「まみだ、おはよう、いまなんじ？」ミコが眠そうな顔でいった。

「エリカ姫が来るから、みんな起こしてくれ」ねこは言った。こつちだつて眠いんだ。

「えりかひめつてだれ？」ミコが質問した。

「エリカ姫はタカチャン大王の娘だ。ちょっとみんなに助けをお願い

「いしたい」ねこが言った。

「たすける？」ミコが聞いた。

「とにかく、来ればわかるから、説明している暇はない、みんなを起こしてくれ」ねこが言った。

ミコは、とぼとぼと歩き出し、みんなを起こしてまわった。みんなぐっすりと眠っている。

うさぎさんたちとあひるさんたちもみんなを起こしにまわった。みんなもそれぞれ変な夢を見たようだ。寝ぼけている。みんな頭がくしゃくしゃだった。なんとかみんなを真ん中のテーブルに集めた。その時、こつそりとエリカ姫がやってきた。

「おはようございます」姫が静かに言った。礼儀正しい。

「おはよー」みんなが寝ぼけて言った。ねこが首を横に振った。

「こつちにおいで」ねこがエリカ姫を招いた。

「ねこさん おはよう」エリカ姫が言った。テーブルまでたどり着いた。

ねこがテーブルの上にあがり、ことを説明した。みんな寝ぼけながらもじつと聞いていた。

エリカ姫がパパとママがアメリカとの戦いで忙しくって、遊んでくれなくて悲しんでいること。

ねこがたんと説明した。みんながそんなのよろしくない、と騒ぎはじめた。

「そついつのはよくない！」よしくんは言った。

「あけみせんせいはおっぱいちいさいけどやさしいせんせいだ！」
ミコが言った。一言余計だ。

「うちのぱはいつもぼくとやきゅうであそんでくれる！」ゆうたくんが言った。

「うちのぱはいつもちゃんとせんたくしてくれる」マコが言った。
おいおい

みんながそんな意見をごちゃごちゃ言い始めた。エリカ姫はきょとんとしていたが、

みんなが慰めてくれたので、にこにこしていた。エリカ姫が今まで
のことを話し始めた。

でも、地球にくるまでは、やさしい人たちであったこと、でもいま
はこういうことになって

しまつてつままない、ということ。そのうちにエリカ姫は感極まつ
て泣いてしまった。

みんなでエリカ姫のところに集まつて一生懸命慰めた。エリカ姫は
泣き止んだ。

なんだか仲良くなつたみたいだ。エリカ姫は良い子だ。しっかりし
ている。

「どうしてあめりかとたたかつてるの？」とさゆりちゃんが聞いた。

「ぱはにきいてもおしえてくれないの、ごめんね」とエリカ姫は
答えた。

ねこがふたたび書類を口にくわえてテーブルにあがる。右手でテーブルをこんこんと叩く。

みんながねこを見つめる。ねこが咳払いをする。

「ここにその訳が書いてある。」とねこは書類を右手でこんこんと叩いた。

みんながその書類を囲んだ。しかし字は難しい、なぜか日本語でかいてあったが読めない。

「よめません」ミコがきつぱりと言った。しかたがない、まだ6歳児だ。

ねこはしょうがない、といった表情でみんなをぐるっと見回した後、読み上げた。

「今回の強行策における、基本的な目標とは、現行の地球型経済システムが起こす

様々な矛盾や、変動に弱い現行の貨幣経済に関する、地球人の認識を、、、

ねこは長い長い論文を演説口調でたんと読み上げた。時には言葉を強調し、身振り手振りで

感情表現をした。素晴らしい演説だった。大人の間では盛大な拍手が沸き起こるだろう。

しかし、相手は子供だ。訳がわからない。ブーイングが起きた。

「げんこうのけいざいがいねんとかんきょうもんだいぞうかのかんれんせいってなんですか？」

よくくんが質問した。

「たりようしょうひしゃかいがひきおこすこじんろうどうのふたんりつぞうかってなんですか？」

さゆりちゃんが質問した。

「あたらしいてくのろじーがひつぜんてきにおこすしつぎょうりつぞうかへのえんじょたいさく

ってなんですか？」 マコが質問した。

「さまざまなるーかりずむをほうかつできるあらたなぐろーばりずむがいねんってなんですか？」

ゆうたくくんが質問した。

「ぜんぜん、なんのことだかわかりません」ミコがみんなの意見をまとめた。

ねこがポカンとしたまま、横にぱたんと倒れた。エリカ姫もポカンとしてた。もちろん

エリカ姫にもよくわからなかった。ねこがやっと立ち上がった。

「、、、、よ、ようするに現行の地球の経済概念の矛盾を指摘し、タカチャン星が持つ

画期的な経済システムの普及を推し進める事が今回の強行策の最大の目標である、という事」

ねこが簡単に説明した。みんながまだポカンとしている。ブーイングが起こる。ねこがこける。

「わかんない！」ゆうたくくんが叫んだ。ねこが頭を抱えている。

「、、、ようするに、アメリカの子供を誘拐して脅しちゃう、と
いうこと」ねこが超簡単に
開き直って、説明した。ようやくみんなが納得したようだ。みんな
はそんなのよろしくない！
と騒ぎ始めた。ねこは日本の将来は大丈夫なのか？と思ったが、相
手は6歳児だ、勘弁して欲しい。

「みなでだいおうにそれをやめさせよう！」よしくんが提案した。
そうだそうだ、とみんなが
賛成した。子供会議がおこなわれた。ねこはまあいいや、どうせ私
たちの目標はそこにあるんだ、
と納得した。

「いつもぱたちはよるの8じにみなでかいぎするの」とエリカ
姫は言った。

「じゃ、みなで8じにそこにおこりにいこう！」よしくんが提案
した。

ねこは書類の最後のページにあるこの館の見取り図を見せた。エリ
カ姫が位置を説明した。
7時50分にエリカ姫の部屋に集合することになった。エリカ姫は
なんだか楽しそうだった。
ここ最近地球にきていたせいで、ろくにお友達とも遊べなかった。
それでもお姫様だから
なかなか同年代と遊べないのだが、エリカ姫がそう話すと、みんな
が同情してくれた。
なんのことだかよくわからないけれど、お姫様をやめればいい。み
んなそう思った。単純だ。

そしてエリカ姫は立ち上がった。

「みんな、ありがとう、たのしかった。そろそろもどらないと」とエリカ姫は言った。

そろそろ朝になる。食事係がやってくる。見つかるちょっと面倒だ。

「わかった、じゃ8じにいくね」ミコが言った。そしてエリカ姫は部屋のドアから出て行った。

ねことみんなが手を振る。ねこはエリカ姫を気にいったようだ。なんとんでも願いを叶えてあげたいと心からそう思った。頼りない連中だが、みんながなんとかしてくれるだろう。

足りない部分は自分が補えばいい。今からみんなにいろいろ説明しなくては、ねこはそう思った。ねこが振り向いた。ねこはポカンとした表情になった。

みんなはまだ寝足りないようで、またいびきをかいて寝ていた。よしくんはなんだかわけのわからないことを寝言で言っていた。うさぎさんたちやあひるさんたちも寝ていた。

「やれやれ」とねこはつぶやいた。

015

しばらくの間、明美先生は我々の姿を指さしながら爆笑していた。どうやらツボにはいったみたいだ。

我々だって声を大きくして言いたい。こんなのは単なるうちの奥さんの趣味だ。我々の趣味じゃない。

さゆりちゃんのパパがおどけて、ポケットに入っていた印籠を右手に持ち、ひかえおろう！と

言ってみた。爆笑が大爆笑に変わった。本当にこんなことしている場合ではない。しかし、

我々もしようがないから笑ってみた。変な日本人たちだ。やっと明美先生が落ち着いてきた。

「こつちに誘拐されたアメリカの子供たちがいるんです。ついてきて下さい」と明美先生が言った。

「誘拐？」とゆうたくんパパが明美先生に聞いた。

明美先生はうちの奥さんに聞いた話を説明した。星空の中で携帯電話で聞いたらしい

とにかくアメリカの子供と交流を取って、司令部の人間をひとまとめにして欲しいとのことだ。

「わけがわからないな、」ゆうたくんパパが言った。

「ともかく子供たちのところに行ってみましょう。」さゆりちゃんパパが言った。

われわれは明美先生のあとを着いていった。廊下の奥にひとつドアがあった。そこから

子供たちの声が聞こえてきた。明美先生がドアを開けた。水戸黄門一行が部屋に入っていく。

一瞬、子供たちは静まり返った。何者だ？　しようがないからまた、さゆりちゃんパパが

印籠をもってひかえおろう！とおどけてみた。明美先生が笑った。そしてやつと子供たちが大爆笑し始めた。

「オー―サムライ！」　と我々のことを指差して笑い始めた。侍じゃない。水戸黄門だ。

「ヘイ！ニンジャ！」　とだれかが物まねを始めた。我々は忍者じゃない。水戸黄門だ。

ゆうたくんパパが忍者の物まねをした。みんながのって来た。まあいいや、なんでも。アメリカ人がうっかり八兵衛のキャラクターを理解するにはまだ時間がかかる。

さゆりちゃんのパパは英語が堪能だった。さすがだ。さゆりちゃんのママも出来る。

さゆりちゃんのパパはみんなといろいろな話始めた。いろいろな事情を聞いていた。

自身の児童心理学を駆使して、みんなと必死に打ち解けようとしていた。さすがだ。

さゆりちゃんのママもそれをフォローした。子供たちは自分たちの正直な気持ちを

うちあけてきた。親達が忙しくて面白くない。ここにいた方が面白い、とまでいう子供もいた。

そして、こんどはゆうたくんパパとよくんパパがみんなと野球なんかして遊び始めた。

なかなか楽しそうだ。これなら英語を使う必要も無い。さゆりちゃんのママは女の子たちと

いろいろなゲームをしたりしていた。何人かのちよつと大きめの子供

たちとさゆりちゃんパパは
なかなか真剣に話し込んでいた。さゆりちゃんのパパは明美先生に
なにやら話していた。

その時、明美先生の頭の中でなにかがパチンといった。そして明美
先生は私のほうに来た。

「ちょっと来てください」明美先生は私にそういった。

明美先生とわたしとゆうたくんママとよしくんママでこの部屋をで
た。明美先生はなんだか堂々としていた。
いつもと違ってなんだか堂々としていた。

「な、なにしにいくんですか？」よしくんママがおどおどと言っ
た。明美先生はしー！と言った。

「静かにしてください」明美先生は厳しい表情でいった。よしくん
ママがびっくりした。
われわれは黙って静かについていった。

途中の倉庫のドアを開けて、明美先生はまずロープを取り出した。
結構重い。

それをよしくんママに渡した。よしくんママがポカンとした表情で
それを持った。

そして私に小型の拳銃をほいと投げた。私がそれを手にした。よ
しくんママが叫びそうになるが

明美先生が厳しい顔でしー！と言う。ゆうたくんママに機関銃を渡
す。ゆうたくんママは

ちよつとびっくりしていたけど、結構好きそうだった。よしくんマ
マに向けて銃をチェックする。

頼むからこれ以上脅かさないで欲しい。またみんなでよしくんママ

を静かにさせる。

そして、明美先生も機関銃を手にした。なんでもなさそうだ。なぜか手馴れた表情でそれを

確かめる。そして倉庫から出る。明美先生がいつでも発射できるように手にしっかり機関銃を

握る。私たちもそれに習う。よしくんママはまた静かにぐるぐるまわりながら着いて来た。

我々はキッチンと書いてある部屋のドアまで辿り着いた。明美先生は私にドアを開けるように

指示した。了解。そして私のあとにすぐこの部屋に入ること、と指示した。ゆうたくんママが

敬礼した。なんだか楽しんでいる。度胸がある。私はドアを開けた。明美先生が入っていった。

銃声が鳴り響く。よしくんママが絶叫した。そんな場合ではない。われわれは後に続いた。

私とゆうたくんママは彼らに銃を向ける。明美先生が天井に必要以上で発射していた。

キッチンスタッフは全員で10人くらいいた。もちろんびっくりしてみんな手をあげていた。

明美先生、やりすぎだ。もう発射の必要はない。私が明美先生の肩をたたいた。

やっと明美先生は発射をやめた。十分だ。もうきちんと降参している。

これ以上やったら国際問題になる。こんな格好で新聞に掲載されない。

明美先生は英語が堪能だった。明美先生は、私とゆうたくんママにずっと銃を向けているように

指示した。そしてぐるぐるまわるよしくんママと一緒に彼らの体にロープを縛りはじめた。

なにやら英語で説明している。どうやらもうすぐアメリカ軍がくるから、おとなしくしていれば

殺されたりはしない、と言っているようだ。アメリカ軍？　こんな格好でアメリカ軍の人と

会いたくないな、と私は思った。そして明美先生はさきほどの倉庫にみんなを連れて行き

倉庫に全員詰め込んだ。明美先生はごめんね、しばらくはきついけどすぐに解放されるから

と言った。そして倉庫のドアを閉めた。鍵を一応かけた。そして先ほどのキッチンに戻った。

「よしくんのお母さん、すみませんがここで子供たちの食事を作ってください」と明美先生が言った。

「は、はい、」よしくんママがおどしながら言った。

しかし、よしくんママが包丁を持った瞬間、がらつと態度が変わる。私に調理の器具の

名前を告げて持ってこさせたりした。私は手術室の助手のごとくそれを手渡した。

「ミキサー！」とよしくんママが指示をする。私がそれを持ってくる。

「小皿！」どうやら味見がしたいらしい。私はそれを持ってきた。よしくんパパも結構大変

なんだな、と思ったがそういう場合でもない。いつも包丁持って行動すれば、よしくんママも

きりつとしているんだらうけど、それはちょっと怖い。ご近所付き合いに支障が出る。

ゆうたくんママも明美先生も指示に従い、われわれは食事の用意を進めた。

ゆうたくんママはフライパンで鶏肉を炒めるより、機関銃を持っているほうがいいみたいだ。

だが、それもちよつと困る。ご近所付き合いに支障がでる。

そして、我々は食事を完成させた。よしくんママが最後に包丁をまな板にパタンと置く。

いつもの表情に戻った。感情表現が豊かな人だ。印象ががらつと変わる。みんながほつとする。

味見を試みたが、これはうまい！才能だ。我々がよしくんママを褒める。よしくんママが

おおいに謙遜する。感情表現が豊かだ。よしくんパパも大変なんだろうな、と思った。

だがそういう場合じゃない。我々はワゴンに食事を詰め込み、子供の部屋に運んだ。

部屋は大いに盛り上がっていた。子供達はみんないい子だった。食事を持つてくると

歓声があがった。みんなで食事の準備をする。なんとかわけのわからない変な格好をした

日本人たちだが、好意的に見てくれているようだ。みんなで食事会がはじまった。

あちこちでおいしい！との評価があがった。よしくんママが英語はわからないけど

謙遜していた。楽しそうだ。みんなお腹いっぱいになったみたいだ。子供たちは

テレビを見始めた。この上で行われている野球の試合だ。マリナーズ対ヤンキーズだった。

ゆうたくんパパと一緒に見たそうだったが、われわれは話し合いを始めた。そんな場合でもない。

まずは子供たちの気持ちを子供たちの親達に説明することだった。話し合いを持つべきだと

さゆりちゃんパパが言った。明美先生があとここの司令室にあと4人ほど人間がいることを

説明した。ここのスタッフはみんなタカチャン星人に雇われて働いているらしい

「タカチャン星人ってなんなんですか？」とゆうたくんパパが明美先生に聞いた。

「詳しいことはわからないけど、アメリカとのなんかの交渉が決裂して強硬手段をとっているみたいなの」と明美先生が説明した。というかタカチャン星人ってなにものだ？

「とにかく、また我々も強硬手段をとります」と明美先生は言った。よしくんママがまたおどおどした。感情表現が豊かだ。

我々はまた空いたお皿などをワゴンに詰め、キッチンへと向かった。そして、またわれわれは4人分の食事を作った。今度はよしくんパパが手馴れた動きで

よしくんママをフォローした。やっぱりいつもそうなんだ、と思った。みんなもそう

思ったみたいだ。よしくんパパが苦笑いしながらこっちを見ている。みんながにやにやしていた。

そして明美先生は、さゆりちゃん夫婦とゆうたくんパパに野球のマ

スコットをかぶせた。

そして私とゆうたくんママはまた銃を持つようと指示された。了解。ゆうたくんママがにやりと

していた。今度は私が発射したいと言った。物好きだ。度胸がある。明美先生がにこりと了解した。

みんなが機関銃にびびっていた。当然だ。わけがわからない。そして今度はよくんママには

キッチンに残ってもらうことにした。人にはそれぞれ得手、不得手がある。よくんパパがロープを手にした。

明美先生が先頭で歩く、マスコットたちが食事を運ぶ、その後を私とゆうたくんママが銃を構えて進む、後ろによくんパパがロープを持ってついて来る。一言で言うとな変な集団だ。

ゆうたくんママは楽しそうだ。まあ、われわれは別に人を殺すわけでもない。おもちゃみたいなもんだ

司令室のドアの前に着いた。明美先生が私とゆうたくんママと明美先生がマスコットの後ろに隠れて

部屋に入るよう指示した。了解。そして目で合図を送るからゆうたくんママが、また天井に

発射するようと、指示した。了解。明美先生がノックする。ちいさな返事がある。

マスコットが入っていく、うしろに私たちが隠れる。よくんパパはとりあえず待機だ。

司令室にはたくさんさんのパソコンが並んでいた。そこに4人が並んでいた。その反対側に

テーブルがあった。だれかが英語でありがとう、といった。マスコットたちがそのテーブルに

食事を並べる。4人は作業の手を止めて、テーブルに向かってくる。明美先生が目で合図を送る。

マスコットが腰を下ろす。我々の姿が見える。4人はびっくりする。

「うおおおおー！！！！」 ゆうたくんママは絶叫しながら天井に何発も

発射した。楽しそうだ。マスコットに入っているゆうたくんパパがおどおどとしたリアクションを

する。見たことない表情だ。私と明美先生が銃を4人に向ける。明美先生が部屋の外でおどおどと

待っているよくんパパを手招きで迎え入れる。パパもママみたいにぐるぐる回りそうだった。

4人はめいっぱい手をあげている。しかし、ゆうたくんママが止まらない。やりすぎだ。

もう十分だ。そもそもわれわれは発砲する必要はないだろうと思うけどやる。これはおそらく

女性特有の心理だ。男達はお手上げだ。しかしやりすぎだ。私はゆうたくんママの肩を叩く。

よしよし、よくやった。やっとゆうたくんママは発砲を止める。はあはあいつてるが満足そうな

表情だ。私にハイタッチを求めた。しょうがないから私とゆうたくんママでハイタッチする。

ゆうたくんパパがそれを眺めている。中でどんな表情をしてるのだろう？

我々が銃を向け続ける。向こうは武器を持っていない。マスコットたちは頭を取った。

汗がたらだらだった。そりゃそうだ。その上に変な格好までさせられている。

さゆりちゃんのパパがことを説明した。4人もなにか説明している。タカチャン星人と

ひよんなことで意気投合したが、もうここから出たいと言っていた。明美先生がもうすぐ

軍がくるから大丈夫だと説明した。よくわからないけど、なんとか納得したみたいだ。

とりあえず食事をしてもらう。4人はおいしそうにそれを食べた。

そしてさゆりちゃんのパパは

コンピューターでアメリカの上層部とコンタクトがとれないかどうか聞いた。一応可能だ、

と彼らは言った。しかしタカチャン星人の司令部の許可がないと出来ないと言った。

司令部はどこにある？と聞いたけど知らない、と答えた。ともかく我々は彼らに

大まかなパソコンのプログラムの説明を求めた。よしくんパパがパソコンに詳しくかった。

さゆりちゃんパパの通訳を交えて、よしくんパパと4人が話していた。だいたいわかったようだ。

そして、一応悪いけど、とお断りをして4人をロープでしばった。下手に自由に行っていると

アメリカ軍が間違って発砲するかもしれない、と明美先生が言った。彼らは同意した。

そして私は明美先生から鍵を借りて、彼らを倉庫に入れた。鍵を閉める。鍵はそのドアノブに

かけておいた。その方が発見されやすいだろう。私は気になって子供部屋を覗いた。

みんなはもうテレビを消して寝ていた。おやすみ 夢に変な忍者が現れませんでしたように

キッチンも覗いてみた。よしくんママはなかなか楽しそうにキッチンを片付けていた。

私もそれを手伝った。よしくんママが笑顔で答えた。もう誰も敵はいないと言うと

ほっとした表情を浮かべた。そして、彼女を連れて司令室に向かった。部屋に入った。

「だいたいわかったけど、向こうからコンタクトがないと話が進まないね」とよしくんパパが
残念そうにつぶやいた。まあそうだろう。

「とりあえず、もう我々もいっかい寝ませんか？」と私は提案した。
みんな賛成した。

というわけでわれわれは司令室の奥にあるベットを借りて寝ることとなった。4台あった。

それぞれの夫婦で寝た。うちの奥さんはなにをやっておるのだ？

その頃、うちの奥さんはたかはしさんとログキャビンでお酒を飲みながら昔話で大いに

盛り上がっていた。あんだね、

016

夜7時半、ねこ一同はエリカ姫のところに出発する。朝起きて、またマスコット達が
食事を運んだ。ねことうさぎ達はその間、天井の穴に隠れていた。
また同じメニユーだった。

よくんたちはぶつくさいってたが、また女の子3人で母親役になり、どうにか食べさせた。

フルーツをねこたちにあげた。ねこ達はそれをおいしそうにそれを食べた。

またマスコット達と遊んだ。なかなか楽しいけど、体力を残しておかなくてはいけない。

ミコがみんなにそれを伝える。みんなが賛成した。

子供たちはその天井の穴へと登る。ミコとマコが先に浮遊術である。みんながポカんと

それを見ている。そしてねこミコとマコでひとりずつ上に浮かべる。なんだかみんな

楽しそうだ。全員洞窟の上に上がった。ねこがみんなを案内する。

通気溝の前にくる。

そしてまたねこミコとマコは術を使い、みんなの体を半分くらいにする。ねこが大きくみえる。

ねこを先頭にしてみんなで赤ちゃんみたいにはいずって進む。エリカ姫の部屋のところまで

くる。ねこが様子を伺う。相変わらずつまんなそうだ。ねこが音をたてる。エリカ姫が

ねこに気づく。笑顔になり手を振る。問題なさそうだ。またうさぎさん達に杵を外して

もらう。そしてねこから部屋へとゆっくり降りていく。ミコとマコがそれに続く、そして

体のサイズを元に戻す。そしてまたひとりずつ、降りていく。ミコとマコとねこで

協力しないとちょっと重い。慎重に降ろす。エリカ姫がそれをじっと見ている。

エリカ姫も魔女をみたのは初めてだった。地球よりも文明が進んで

いるから

今までなんにも驚くことはなかったが、これにはちょっとびっくりしていた。

全員が無事に降ろされた。サイズをひとりずつもとに戻す。よしくんがいつかい大人みたいに

でかくなつてみたいと言ったが、却下された。そういう場合にはない。無駄に術を使うと

うちの奥さんに死ぬほど怒られる。

「もうすこしするとみんなかいぎをはじめはす」エリカ姫は言った。

子供たちはエリカ姫の部屋をぐるぐると見回した。まず日本ではお目にかかれない

ものがいろいろあった。エリカ姫がいろいろと説明してくれた。なんだか楽しそうだ。

「ぱがもうあとなんねんもたつとちきゅうにもできるっていった」エリカ姫が言った。

そして、不思議な動きをするおもちゃをエリカ姫が披露してくれた。みんなが沸いた。

なんだか待ちきれないといった表情だ。でもこれが地球に普及することには

みんなは大人になっているのかもしれない。そんなことは良くわからない。しかしそういう場合で

はない。ねこはエリカ姫になにか紐はないか？と聞いた。エリカ姫が紐を探して持ってきた。

ねこはミコに姫の手首をそれで縛るように指示した。

「わるいが、姫、人質のふりをしてくれ」とねこは言った。エリカ姫はうなずいた。

ミコが姫の手首を紐で軽く縛る。時刻は8時近くになっていた。そろそろ出陣だ。

ねこはよくんとゆうたくんがペアを組むように指示をした。うさぎさん達とあひるさん達

にもそう指示した。了解した。さゆりちゃんが持っている杖で魔法を欠ける。ミコとマコが

それを操作しメガホンを持ってあおる。ミコとマコがエリカ姫を守るのだ。みんな了解した。

台本は完成した。なんだか学芸会みたいだ。みんなで円陣を組んだ。そしてエリカ姫は部屋の

ドアをそつと開けて廊下の様子を伺った。問題ない。

タカチャン大王たちは全員で7人くらいで会議をしていた。女王もいる。なんだかアメリカの

司令室から反応がないのでごちゃごちゃとなにかを言い合っていた。チャンスだ。

エリカ姫がドアを開ける。先によくんたちがどこかと部屋に入っていた。みんなが気づいた。

「ちょっと、ぼくたち、ここにはいっちゃいけないよ！」大王がやさしく言った。

その後にはうさぎさん達とあひるさん達、ねこ、さゆりちゃん、手首を縛ったエリカ姫を

ミコとマコが挟んで入っていた。お遊戯会のはじまりだ。ミコがメガホンを持って叫んだ。

「こどもとあそばないおやはわれわれがゆるさない！」みんながうなずいた。

大王たちはポカンとしていた。大王と女王がおそろおそろこつちに近づいてきた。相変わらずみんな変な格好だ。奥には5人の変な格好の男達がいる。どうやらタカチャン星人の正装らしい文明が進んでいるのに、服装のセンスがない。よくわからないが、そういう場合でもない。

「けつとうだ！」ゆうたくんが叫んだ。

ゆうたくんとよしくんがジャイアンツメガホンを持ってうしろの男達のところに行き

なにやらわけのわからないことを叫び始めた。男達は耳をふさぎながら足をバタバタさせた。

なんだか変わった人達だ。みんな基本的には優しい人達だ。よくこれでアメリカと

戦えるもんだ。ねこがうさぎさん達とあひるさん達を宙に浮かべてうしろの男達を

攻撃した。うさぎさん達が両手でパソコンパソコンと頭を叩いている。

あひるさん達は

くちばしで攻撃する。よし、うしろの5人は大丈夫そうだ。なんだかよくわからない台本だ。

ねこは右手をぐるぐるさせてうさぎさんらを操作する。大王たちがおそろおそろ近づいてくる。

「エリカひめがかawaiiそうだ！おひめさまをやめさせるべきだ！」ミコがメガホンで思いつきり

叫ぶ。

「もうたかちゃんせいにかえるべきだ！」マコがメガホンで続く

さゆりちゃんは持っていた杖で魔法をかける。ミコがそれを操作する。すると大王と女王が

宙に浮いてぐるぐるとまわり始める。大王がたすけてーと叫ぶ。さゆりちゃんはなんだか

楽しそうだった。アニメ漫画みたいだ。こういうのに憧れていた。

さゆりちゃんは

アニメの魔女もののファンだった。なかなか様になっている。さすがさゆりちゃんだ。

そうしてミコとマコが得意の口攻撃を繰り返し、うしろではよくんらがたがたとやっていた。

変な台本だが、さゆりちゃんもなかなか夢中になっている。魔法をかけていた。

わけのわからない光景だった。ここ何日はすべて変なことばかりだ。その時エリカ姫の頭の中でなにかがパチンと言った。

「もうたくさんだあああああ！！！！！！」とエリカ姫が叫んだ。すべての動きが止まった。

大王と女王も動きが止まって床に落ちた。

「ぱばもママももうかえろっ！あそびたい！おひめさまももういやだ！やめる！」エリカ姫が

そういつて泣き出した。ミコとマコがエリカ姫の肩に手を当てる。よしよし

子供たちがそうだ！そうだ！と続いた。大王は困った顔をしていた、しかし、同意した。
両手を上に上げた。エリカ姫はまだ泣いていた。ミコとマコが慰める。

「ごめん、えりか、パパが悪かった。もうおしまいだ」と大王は言った。ミコとマコはエリカ姫の紐を解いてあげた。大王と女王とエリカ姫が3人で寄り添った。一見落着。さゆりちゃんが感動して泣き始めた。みんなが拍手をした。

「我々はもう国王政治をやめにして地球を見習ってきちんとした議会制民主主義をとるよ」

と大王はみんなに説明した。また拍手が起こった。後ろの5人が驚きの表情で拍手した。

マコが大王の前にすたすたと歩いてきた。

「だいおう」ミコが言った。

「なんででしょうか？」大王は丁寧に答えた。

「ぎかいせいみんしゅしゅぎってなんですか？」とミコが質問した。ねこがこけた。

そうして子供達らはみんなでその議会制民主主義スタイルで話し合った。みんなで椅子を用意して丸くなった。ねこがまた中心にたって議会制民主主義の基本的な概念について説明した。

大王たちはこくこくとうなずきながら聞き入っていたが、子供たち

はわけがわからなかった。

ねこがまたこける。しょうがないからミコがみんなでフルーツバスケットをしようと言った。

今度はミコが中心にたって説明した。そしてみんなはフルーツバスケットでなぜか大いに

盛り上がった。大王が議会制民主主義は楽しい！と言った。エリカ姫も楽しそうだった。

ねこがそれは違うと言いたそうだった。まあ、いいや、フルーツバスケットも民主主義の

概念がないというわけでもない。フルーツバスケットでみんな仲良しだ。

みんなでワイルドに盛り上がった後、ねこはアメリカの司令室とコンタクトをとる

方法を大王に聞いた。さっき繋がらなくてどうしようといったたところだ。とひとりの

男が説明した。もう一度トライして欲しい、とねこは頼んだ。ひとりの男はパソコンの

前に座り、ねこと一緒に司令室にアクセスを試みた。子供たちもみんなでこのパソコンを

見ていた。

「お、繋がった」とひとりの男が言った。

「司令室とビデオチャットできませんか？」とねこが聞いた。物知りなねこだ。

そうして、司令室とコンタクトした。

「お、繋がった」よしくんパパが叫んだ。みんながその声で起き上がった。朝だ。

よしくんパパはなかなか凝り性だ。気になって朝早くこっそり起きてパソコンに

張り付いていた。こういうのは好きだし、得意みたいだ。さすがだ。われわれがよしくんパパの後ろからパソコンを覗いた。なにか向こうから

ビデオチャットの許可を求める通知が来ていた。よしくんパパが許可する。

近くにマイクと大きなカメラがあった。我々を映している。

「おおおおー！」と歓声があがった。するとビデオにはうちのねこが映っていた。

するとねこの背後から子供たちが覗き込んでいた。そして子供たちは大爆笑を始めた。どうやらツボにはいったみたいだ。笑いが止まらない。

「ど、どこにいるの？」とよしくんパパが格さんの格好で聞いた。まだ爆笑している。

「こっちは日本だ、タカチャン星人と一緒にいる」ねこが答えた。よしくんパパがびっくりした。

「こどもたちは無事なんだね？」さゆりちゃんパパが聞いた。そういえば我々は子供達を探していたのだ。やっと気づいた。

「無事だよ、そっちの件はうまく片付いたかい？」とねこが聞いてきた。こっちの件？

「こっちは片付いたよ、けどもうひとつ頼みたいことがある」と明美先生が言った。

「なにかな？頼みたい事って」ねこが聞いた。

さゆりちゃんパパがアメリカの子供たちとその親たちでビデオチャット会議を出来ないだろうか？

早急に、とねこに尋ねた。ねこは右手をあげて、画面から消えた。タカちゃん星人と交渉している

らしい、その間、画面は子供たちが映っていた。相変わらず爆笑していた。そういう場合じゃない。

「ぱぱはさむらいさんだ！」とミコが爆笑しながら指をさして言った。

私は侍じゃない。私はすっかり八兵衛だ。

みんなが爆笑している。大人たちは笑ってごまかした。さゆりちゃんのパパがまたおどけて

印籠を片手にひかえおろうー！と言った。爆笑が大爆笑に変わった。そういう場合じゃない。

ねこが戻ってきた。どうやらいけそうらしい。ねこがマウスを動かしたり

キーボードを叩いたりしている。それを子供たちが覗いている。変な光景だ。

ねこはこっちにわかりやすいようにアクセス方法を文字で送ってた。わかりやすい
ちよつとよしくんパパもわからない部分があったので、質問を文字で送った。
それを我々が見ている。子供たちがまた爆笑している。そういう場合じゃない。
質問の内容をみてまたねこがこける。ねこが、あんたね、とよしくんパパを睨む。
よしくんパパが頭をかきながら照れている。しつかりしたねこだ。
ねこが質問の返答を送ってきた。ようやくよしくんパパも理解したみたいだ。

「それでは、アメリカのトップには私から話をつける。用意が出来たらその手順で
ビデオチャットを開始してくれ」とねこがよしくんパパに指示をした。よしくんパパが
敬礼をする。頼もしいねこだ。ビデオチャットが終了した。

そうして、我々はよしくんパパとさゆりちゃんパパを残して、キッチンへと向かった。
子供達の食事を作らないといけない。よしくんパパはパソコンから離せないから
また、私がよしくんママの助手を務める。ハードな朝だ。砂糖！
片手鍋！とよしくんママが
叫ぶ、私がそれを用意する。他のみんなも指示を仰ぎ、朝からあわただしく動く。

そしてワゴンに食事を積んで、子供部屋へと運ぶ。子供たちはみんな起きていた。
なかなかよしくんママのお食事は好評なようだ。みんなでわいわい

言いながらそれを食べる。

私はよくんパパとさゆりちゃんパパのところに食事を運ぶ。私もそこで一緒に食べる。

食べている途中にねこから再度アクセスがあった。よくんパパがパンを加えながら

またビデオチャットをする。それをみてまた子供たちが爆笑する。そういう場合ではない。

「今日のお昼過ぎまでになんとか親達を集めるそうだ」とねこは言った。了解。

ねこはまた文字でアクセス先の情報を文字で送った。よくんパパがカメラに向かって

OKサインを送った。何度もねこに怒られたらたまったもんじゃない。まだ会社の上司のほうがましだ。

「ぱぱ、そこはどこなの？」とミコが聞いてきた。

「ぱぱはシアトルにいるんだよ」と私は答えた。

「ぱぱ」とミコが言った。

「なに？」と私は言った。

「しあとるってなに？」とミコが言った。またねこがこけた。我々もこけた。

チャットを終了し、食事を片付けて、我々はこの部屋を広く開けて子供部屋から

椅子を運び出し、ビデオ会議室を作った。さゆりちゃんパパが今日

の会議の内容を説明した。

私はカメラ係を担当した。よしくんパパがパソコンの管理をする。

さゆりちゃんパパが

議会の進行役を勤める。マイク係をさゆりちゃんママが受け持った。我々の顔が

ばれるとやばい。途中で気づいた。さゆりちゃんのパパとママにキツチンペーパーを

巻きつけた。なんだかあやしいがしょうがない。顔を知られたら私達は捕まってしまう。

お昼が過ぎた。あわただしく昼食をすませた。最後の食事会だ。みんなにそういうと
なんだか悲しがられたが、しょうがない。みんなもいつまでもここに
いるわけにはいかない。

「みなさん、それではこの際、自分の意見を正直に言ってください
ね」さゆりちゃんパパが
そう子供たちに説明した。みんなはそれになぞった。

どうやら向こうも用意が整ったようだ。アクセスがあった。ビデオ
にはたくさん親達が

深刻な顔をしてこつちをみていた。そしてさゆりちゃんのパパが顔を
隠して子供たちを

椅子に座らせた。親達がどよめく。次々に子供の名前を叫んだ。涙
する母親の顔もあった。

子供たちが手を振る。元気そうだ。ひとまずは安心したようだ。さ
ゆりちゃんパパに

ママがマイクを渡す。さゆりちゃんパパはまず、子供たちは無事である
こと

おそらく今日中にもアメリカ軍が子供を保護するであろう。だから

心配しないでください。

子供はシアトルにいます。なのでこの会議が終わったらみなさんシアトルにいらしてください。

しかし、その前に子供たちの意見を聞いてください。とさゆりちゃんパパは説明した。

親達はなんだ？この変な格好の男は？という顔をしたが、あんまり挑発するものなんなので

黙って同意した。きっとこのチャットは記録されるんだろうな、とさゆりちゃんパパは

ふと思ったので、ちよつと印籠を出しておどけてみようかと思ったが辞めた。そういう場合じゃない。

さゆりちゃんママがひとりの一番年上のしっかりした男の子にマイクを渡した。

その子が正直に子供たちの心境を代弁した。親達はそれを真剣に聞いていた。

子供達は優しい大人に囲まれて楽しくなにも怖いことはされずに過ごした事と

子供達がみな親が遊んでくれないことへの不満をぶちまけた。ひとりの親がそうだけど、

と切り出すと、その親の子供がマイクを要求し、親に不満をぶちまけた。子供達が

それに拍手を送る。子供たちが次々とマイクを奪い合って自分の意見を述べ始めた。

親達がそれを悲しそうに、真剣に聞いていた。なんだか子供がずいぶんと大人っぽく

なっていることに驚いていた。そして楽しそうに、のびのびとしていることに気づいた。

親達はなにも言い返せなかった。そして一度、親達同士で話し合い、ひとりがそのことを

深く認めて、今度からはきちんとそうする。悪かった。許して欲しい、と言った。

さゆりちゃんパパは親達はそういつてるけど、許してくれるかな？と聞いた。

子供同士で話しあった。そしてまた一番年上の子が意見をまとめた。

「ぱぱ、ちゃんとゆるすから、よいこにするからあそんでくれる？」とそのこは言った。

親はうなずいた。許して欲しいと言った。さゆりちゃんのパパがにっこりしている。

が、そのペーパータオル顔でにっこりされるとちょっと怖い。さゆりちゃんのパパがマイクを握った。

「というわけで、みなさま、ありがとうございます。それではお忙しいでしょうが、

シアトルにいらしてください」とさゆりちゃんパパが言った。親たちがつなずいた。

そして、よしくんパパはチャットを終了させた。ほっとした。子供たちから拍手が沸き起こった。

われわれも拍手した。任務完了だ。明美先生がなんか泣いている。

よしくんママも感動している。

感情表現が豊かだ。

そして、我々は子供達におそらく夜までにはアメリカ軍がくるからここでおとなしく

待っているように指示した。下手に動くとな変な目にあうからと注意した。みんなが納得した。

年上の子の言うことをよく聞くように、と言った。

キッチンでよくんママがパンとケーキを焼いていた。おいしそうだ。それを子供たちに配った。

パンはお腹がすいたら夜に食べてね、とよくんママが言った。さゆりちゃんママが通訳した。

そして、我々はさようならをした。みんなで握手して別れた。なんだか寂しくなったけど

日本につれて帰るわけにはいかないし、こんな格好でアメリカ軍にも会いたくない。

よくんパパにもう一度ねことアクセスしてもらい、無事終了したことを報告した。

「わかった、それではこっちも帰る」とねこは言った。また子供たちが爆笑した。こりない人達だ。

我々はあの廊下まで来た。どうやって開けるのだろうか？なにも書いてない。

みんなで力を合わせて横にスライドしてみたがびくともしない。すると明美先生とゆうたくんママが

機関銃を持ってきた。またよくんママがぐるぐるとまわり始めた。こりない人だ。

「ちょっとどいて」明美先生が言った。みんながどいた。こんなところで死にたくない。

明美先生とゆうたくんママはふたりで顔を見合わせてにやりとした。どうしてもやりたいみたいだ。

ふたりともにこにこだ。そしてそのドアに機関銃を向けて、連射し

た。けたたましい音がする。

しばらく連射していた。ふたりとも楽しそうだ。みんなは耳をふさいでいる。機関銃の弾が無くなるまで、それは続いた。そして、

ドアがゆっくりとスライドしていった。

「ふう、すっきりした！」明美先生がそう言った。ゆうたくんママとハイタッチをする。

機関銃をその辺に投げ捨てた。もう用はない。弾も入っていない。でもゆうたくんママはなんだか記念に持って帰りたいそうだった。いったいなんに使うのだ？そんなことしたら警察に捕まる。

そうして我々はもと来た道をたどることとなる。駐車場みたいなスペースで我々が

降りてきたところを探した。確かこの辺だ。我々は手をつないで輪になり、静かに待ってみた。

すると天井に黒い穴が開き、我々はゆっくりと宙に浮かんだ。そしてまた綺麗な星空の中を

上昇した。綺麗な景色だ。みんな笑顔だった。なんだか良くわからなかったけど、心地よい

充実感を感じた。みんな涙を流していた。不思議な気分だ。でも感動的だ。

018

「みんなもいっしょにいこうよ」「ミコが提案した。

エリカちゃんも賛成した。タカチャン星に帰る前にちょっと地球を見てみたかったし、ミコたちとも遊びたかった。元大王のエリカちゃんのパパは、いいのですか？ミコちゃん
と聞いた。

「うん、べつにぜんぜんだいじょうぶだよ、うちのぱぱたちもだいじょうぶ」とミコが答えた。

そうして、ミコ一行は子供部屋の天井の穴へと向かった。エリカちゃん、タカチャン星人7人
うさぎさん達とあひるさん達とねこと子供軍団だ。

エリカちゃんパパが梯子を用意して登った。魔法はもう使えない。決まりだ。

そうしてひとりずつ登り、洞窟へと出た。そしてまた元の道を辿った。だんだんまた
洞窟はせまくなっていった。でももうなにも怖いものはない。タカチャン星人たちも

楽しそうだった。子供みたいだ。変な格好だけどパパたちよりかはまともな気もする。

エリカちゃんも楽しそうだった。良かった。とミコは思った。なんだかよくわからなかったけど
きっと良いことをしたんだと思った。うちのママはいつもわけがわからない台本を用意するけど

まあ、いいや、楽しければ。さゆりちゃんたちとももっと仲良くなれたし、みんなも

楽しそうだ。良かった。キャンプは面白い！でも本当のキャンプはそういうことじゃない。

そうしてあともう少しで干草の部屋という所まで来た。

019

ベツケンガー大佐は大きな丸い穴の所までやってきた。周りには干草が寄せられている。

わけがわからない。誰もいないみたいだ。4人でその奇妙な黒い空洞を覗いていた。

「どうやらこの中にいくしかないな、」大佐は言った。みんなが緊張した。

この中がどうなっているのかまったく検討もつかない。ためしにひとつ機関銃の弾を

その穴の中に落としてみた。すると弾は宙に浮きながらゆっくりと下降していった。

しばらくその様子を見ていた。ゆっくりと下降している。やがてそれは見えなくなった。

しかし、いつまでたっても底に当たる音は聞こえてこない。大佐は悩んだ。

「どうしよう、」大佐はめずらしくみんなにぼやいた。意を決して飛び込んでも

問題なさそうな気もする。ロープがない。無線で連絡してみた。しかし、全然繋がらない。

4人はしばらく腰を下ろし、その穴の中を覗き込んでいた。その時にうちの奥さんと

たかはしさんがそつと彼らに近づいて、二人ずつ突き落とした。4

人は見事に落ちた。

絶叫があがったが、やっと問題ないことに気づいたらしい、静かになった。

ふたりはハイタッチをした。任務完了だ。

大佐達は星空の中をゆっくりと下降していった。なんだかまたわけがわからないが

死ぬことはなさそうなので、ほっとした。誰だ？我々を突き落としたのは？

しかし、まあいい、なにを考えても答えはでなさそうだ。綺麗な星空だ。

4人ともなんだか見とれているようだった。ゆっくりと下降している。

なにか神様が私にメッセージをしているのかもしれない。大佐はふとそう思った。

悪くないメッセージだ。もうすべてを神にゆだねよう、と思った。考えても無駄なようだ。

そして、4人は地下駐車場のようなスペースにたどり着いた。しばらく見回した。

4人は注意しながら歩いていると、そこに大きな円があって真ん中に緑のボタンが

あった。4人で円の中に入り、大佐はそのボタンを押していた。円の中が光った。

そして上昇していった。訳がわからない。しかしそれに身をゆだねた。考えてもしようがない。

そして、かれらはセーフコ球場のマウンドに立った。お昼過ぎだ。どうやら今日は

チームは遠征しているらしい、試合は今夜はないようだ。4人はび

つくりして

辺りを見回す。どう考えても本物だ。本物の野球場だ。シアトルだ。入り口は

日本にあったのだ。わけがわからない。大佐は持っていた携帯電話で本部に連絡してみた。

電話は繋がった。信じられない。本部の人間が電話にでた。大佐は訳がわからないが

今、シアトルにいる、と言った。本部の人間も訳がわからないようだった。大佐は

日本に行ったのではないのか？と本部の人間が聞いてきた。うまく説明できない、

でもこういうわけか今、シアトルにいる、こっちに軍を呼び寄せて欲しい。

場所はセーフコ球場だ。マウンドに集合して欲しい、大佐はそう言った。

本部はしばらくたってから、軍はすでにシアトルに集合している、今からそこに向かわせる、

球場の入場許可を今取っている、そこで待っていて欲しい、と本部は言った。了解。

大佐は電話を切った。しばらく、そこでぼけっと観客席を見回していた。大佐は昔、学生の頃

野球をやっていた。なかなかのピッチャーだったが、なぜか軍隊の道を選んだ。

マウンドの近くにひとつボールが転がっていた。大佐はそれを拾い、本来キャッチャーが

いる所にめがけて思いっきり投げた。ストライクだ。しかもなかなか球は速かった。

3人は拍手をした。大佐がにつこりとした。なんだかとても良い気分だ。はやく息子と

キャッチボールがしたくなった。学生時代を思い出した。どうして

私は野球選手にならなかった
のだろう、と思った。でもいまさらしかたがない。どうやらこの変
な事件を解決できそうだった。
そうすれば、私は自由の身になれる。気楽にいこう。大佐はそう思
った。

軍がぞくぞくと球場内に入ってきた。隊員は全部で20人近くいた。
マウンドに何人か残して
その他を円の中に入れた。隊員たちは不思議そうな顔をしたが、う
まく説明できない。

ともかく、この中に敵はいる。十分に気をつけるように、と大佐は
指示をした。みんなが
了解をした。大佐がボタンを押した。円はゆっくりと下降した。ど
よめきが起こった。

大佐は別になんともない、といった表情でじっとしていた。いち
ち説明している場合ではない。

もちろん説明も出来ない。自分だってわけがわからない。そして、
先ほどの地下にたどり着いた。

部隊は辺りを見回した。するとさっきはなかった入り口を発見した。
うすい水色の廊下が見える。

大佐が銃を構えて、中の様子を伺う。廊下には機関銃が2丁、転が
っていた。大佐は廊下の前後に

隊員を配備した。機関銃を調べてみる。弾は空だった。大佐は二
手に分かれて内部を調査することに

した。大佐は廊下を進んだ。すると子供たちの声が聞こえてきた。
誘拐された子供達だろうか？

大佐は静かに廊下を歩いた。ドアに耳を当てる。中では子供達の元
気そうな声が聞こえた。

子供達以外に誰もいなさそうだった。しばらくして突入を決意した。廊
下に10人ほどの

隊員を呼び寄せた。ひとりに合図でドアを開けるよう指示した。ひとりはずいぶん待たされた。

ドアを開けたら一気にみんなが突入した。みんなが了解した。ドアが開いた。みんなが銃を構えて

どかどかと進入した。子供たちがびつくりして大声を上げた。女の子が震えていた。

しかし、問題がないとわかると、隊員は銃を降ろした。大佐はひとりの子供にここに誰か

いるのか？と聞いた。ひとりの子供は子供以外誰もいない、と答えた。この館内に誰か

大人はいるのか？と聞いた。子供はわからないと答えた。さっきまでいた日本人達のことは

黙って欲しいといわれたので答えなかった。いい人達だったので答えたくはなかった。

ひとりの隊員は倉庫でロープに縛られた人達を発見した。そのほか、司令室らしき部屋や

キッチンも調べたがなにも異常がない、と報告があった。大佐はその大人たちに質問したが

まるつきりわけがわからない答えが帰ってきた。我々はタカチャン星人に拉致されたものだ。

とずっとそれ一点張りだで答えた。わけのわからない日本人にそう言えと言われていた。

そうすれば無罪になる、日本人のことを話すとあなたがたはちょっと、面倒なことになる。

どのみち説明しようと思っても誰も信じてくれないだろう。黙っている方が良く、と忠告され

ていた。確かにそうだろうと彼らは考えた。正直にこのややこしい話を説明しようと思っても

つじつまが合わない。我々が疑われる。というわけだただ黙ってタカチャン星人のせいにした。

大佐は頭を抱えた。他にここに大人はいるのか？と聞いた。誰もいないと答えた。

、事件は解決した。子供もいる、敵はもういない、終わりだ。携帯電話が鳴った。

大佐が電話にでた。本部からだ。

「そちらに変な日本風の格好をした人間をみなかったか？」本部が聞いてきた。日本風？

「ちょっと待つて」大佐は言った。子供と大人に聞いてみた。ひとりの大人がそれはタカチャン星人だ、と答えた。そういうと子供たちもそれに同意した。

「それはタカチャン星人だそうだ」大佐は答えた。

「わかった、そっちはあまり重要ではない、とにかくタカチャン星人は誘拐をやめたようだ

今、子供たちの親がシアトルに向かっている。お疲れ様、任務は完了だ。よくやった。

今後は現場検証に入るから、後でその進入方法を教えて欲しい、というわけだ」と本部は言った。

「わかった、ありがとう、今から子供を連れて行く」と言って大佐は電話を切った。

そして、子供達と大人達をマウンドに上がれる場所まで連れて行った。人が多いので

先に子供たちを上連れて行った。子供達は最初は怯えたが、大丈夫だとわかると

笑顔になった。そしてマウンドにあがった。みんな不思議そうな表情を浮かべた。

「もうすぐ君たちの親が来るから、そこで遊んでいてね」と大佐は笑顔で言った。

子供たちはフィールドを走り始めた。久しぶりに地上に出たので楽しそうだった。

そしてまた地下に戻り、大人達と隊員を乗せた。そして地上にあがった。

大人たちは不思議な表情をしていた、しかしこれで元の生活に戻る。ほっとした。

しばらくは誰かに問い詰められると思うが、まあ、大丈夫だろう。早く家に帰りたい。

全員をマウンドに上げたたん、円は消えていた。何事もなかったように、そこは

普通のマウンドになっていた。ボタンもない。大佐ははいつくばってボタンを探したが

見つからない。困った。本部に進入ルートを説明しなくてはいけない。しかしもう

なにもない。終わったのだ。きっと現場検証したってなにもわからないだろう。

消えたのだ。大佐はなぜだかわからないけど、そう思った。なんとか適当に笑ってごまかすしかない。

タカチャン星人とやらのせいにしよう。きっとあの日本の入り口も塞がれているだろう。

親達が到着したようだ。客席から入ってきて、フィールド内にやってきた。子供達が

みんな親の元に走っていった。それぞれの家族が自分の子供を抱きしめていた。

大佐はその姿をずっとマウンドから見ていた。変な気分だ。でも、まあいいや、任務は無事終了した。誰もけがなく、死ぬことなく、任務完了だ。

しばらく、家族達はこのフィールド内で遊んでいた。子供達も親達も楽しそうだった。

大佐はそれをずっと見ていた。そして神に感謝した。

020

我々はその干草の部屋で子供達と再会した。子供達は我々を見るなりまた大爆笑した。

タカチャン星人達も一緒にいた。なんだかよくわからないけど、ご挨拶をした。

「ミコちゃん達には大変お世話になりました。ありがとうございます！」エリカちゃんパパは
そういつて私と握手をした。なんのことだかわからないけど、うなずいた。感情表現が豊かな人だ。

みんなでこの変な格好をやめる前に記念撮影をした。タカチャン星人も交えてみんなで

写真をとった。そして、このへんな衣装を脱ぎ捨てた。子供もそこで脱いだ。

あーすっきりした。

そして我々はあの星空のガラスチューブに入った。なぜか今度はエスケーターみたいな

床がなっていて、止まったまま進んでくれた。楽チンだ。みんなでにぎやかに進んだ。

綺麗な星空だ。なんだか名残惜しい、そうみんな思っているみたいだ。明美先生が泣いていた。

大人達は携帯のカメラで写真をとりまくっていた。もちろん、我々以外には見せられないのだけれど、まあ、キャンプの良い思い出だ。

そうして我々は久しぶりに外に出た。今度はなぜかトランポリンが消えていて

そのまま防空壕の外に出た。夕方だった。そこにはうちの奥さんとたかはしさんが

調理器具を一式そろえて待っていた。みんなが外に出た。明美先生はたかはしさんと

なにやら話していた。みんなはなんともいえない表情を浮かべていた。しばらくは

我々の間の思い出話として語られるのだろう、と思った。悪くない。みんなで

誰にもいえない秘密を楽しく語り合うのだ。悪くない。うちの奥さんがよくくんママに

包丁を手渡した。よくくんママがにこっとした。出番だ。また表情が変わった。

我々はよくくんママが作ったカレーライスやら焼肉やら、その他いろいろなおつまみで

乾杯した。みんなお腹がすいていたから、すごい騒ぎだった。タカちゃん星人がカレーライスを

絶賛していた。タカチャン星人達が何度もおかわりをした。よく食べる人達だ。

よくくんママにカレーのレシピを聞いていた。相当気に入ったようだ。よくくんママが

楽しそうに教えてあげていた。さゆりちゃんパパが持ってきたワインをあけて乾杯した。

エリカちゃんはミコ達と楽しそうに食べながらおしゃべりをしていた。タカチャンたちは

食べるのに夢中だった。ねことうさぎさん達やあひるさん達もご飯を食べながら

なにやらお話していた。うちの奥さんが花火を用意していた。子供達がエリカちゃんと

花火で遊んだ。私はエリカちゃんのパパとおしゃべりをした。変な格好をしているけど

なかなか優しい人だった。何度もミコちゃん達に感謝の気持ちを述べていた。

ともかくまあ、カレーライスに喜んでくれただけでも、こっちは満足だ。

良い文化交流だ。今度はうちの星にもいらしてください、エリカちゃんパパは言った。

ぜひ、と言ったけど、どうやって行っているのかわからない。まだ地球の技術では無理だ。

そして、そろそろお別れの時間がきた。

エリカちゃんと子供達がみんなで握手をしていた。大人達もみんなで握手した。

ミコ達もエリカちゃんも泣いていた。でもしょうがない。エリカちゃんも今度は

タカチャン星にきてね、と言った。絶対行くとミコが泣きながら答

えた。

そして、さっきのガラスチューブの中にタカチャン達は入っていった。みんなで

手を振った。子供たちがばいばい！と手を振った。みんな中に入ったら

防空壕は消えてしまった。ただの土になった。しばらくすると空にいくつかの

UFOが見えた。きっと彼らであろう。みんなで手を振った。お幸せに。

UFOはいつかいぐるぐると回った後、空に消えた。

021

夏休みが終わった。また制服洗濯地獄が始まる。私は午前中、洗濯機を回していた。

その後、我々はログキャビンに戻り、ごく普通のキャンプで楽しく過ごした。

みんなでこの思い出話に花が咲いた。子供と大人でお話かが違ったけど、合わせて見ると

なんとかかこのお話の全貌が見えてきた。たかはしさんと明美先生もそのまま泊まった。

明美先生はなにも言わなかった。まあ、言いにくい話だ。子供の前では言えない。

キャンプ後もたまにどこかの家に集まり、この話で盛り上がった。
ニュースで、
シアトルで無事に子供たちが保護されたことを聞いた。でも細部は
謎のままだ。
しょうがない。あと、あの防空壕があつた付近で3人の自衛隊員が
倒れているのを
誰かが発見し、病院にいったそうだ。

ミコは毎日のようにいつタカチャン星に行けるのか聞いてきた。困
つたもんだ。
新幹線で連れて行けるならとくに連れて行ってる。笑ってごまか
すしかない。
あと何年かしたら、地球人はそこに行けるのだろうか？未来の事は
誰にもわからない。謎だ。

幼稚園ではビックニュースに園児たちが沸いていた。山形先生と明
美先生が結婚することに
なった。おめでたい話だ。そりゃそうだ。このお話は明美先生が主
人公だ。
うちの奥さんが台本を書いた。かなりむちゃくちゃだがまあ、まあ、
そういうことだ。
誰かが何かをする時、広い目でみれば世界中を動かしている、とい
うこともある。
宇宙をも動かす。初めは小さな心でも、拡大する。

この話はそういうお話だ。

教室の中で山形先生と明美先生が園児たちの前に立ってそのことを
発表した。
園児たちは喜んだ。良いニュースだ。みんな明美先生のことが好き

なのだ。

ミコが泣いていた。明美先生がミコにどうしたの？と聞いた。ミコが立ち上がった。

「あけみせんせい、いままでへんなことばかりいってごめんなさい、
でもせんせいけっこうおめでとう」 とミコが泣きながら言った。

明美先生も泣き始めた。

「ミコちゃん、ありがとう、先生、幸せだから大丈夫だよ」 明美先生が言った。

みんなから拍手が沸いた。みんな立ち上がった。明美先生はありがとうを何度も言った。

山形先生が明美先生の肩を優しく叩いた。みんながピーピー言い始めた。山形先生が照れていた。

「ちょっとやりすぎだろ」 私は洗濯物を外に干した後、うちの奥さんに言った。もちろん

このお話のことだ。なにも宇宙人まで巻き込むことはないのではないだろうか。

「はははは、」 うちの奥さんが照れながら言った。私はにこりとした。うちの奥さんもそうした。

天気の良い9月の日だ。

外の洗濯物が風に揺れていた。
も知らない舞台裏の光景だ。

なかなか気持ちよさそうだった。誰

終わり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6636c/>

le freak

2010年10月10日00時29分発行